

51314

529-102

其日庵叢書

第一編

杉山茂丸著

44.5.10

自心空寂の
高僧の
心も
長き
まはる
あはれ

法も徳も自在の
祖厚禪師

門人杉山其のり庵の
叢書をとよまう

生るるはつらの

海はまはひかく

甲かたのつら

めらうは

世にちのり

まはらばのり

いそちあま

ままのあま

清水隠士自在庵主

祖厚福社



次 目

其日庵叢書第一編目次

辛 棒 録	一
借 金 譚	九二
法 螺 の 説	一四八
義 太 夫 論	二二七
刀 劍 譚	二五八
附 録	
怪人の怪文を読む(倉辻白蛇)	

其日庵叢書第一編

其日庵主人著

辛棒錄

緒言

辛棒錄

世に辛棒と云ひ我慢と云ひ忍耐と云ふことは其の實行の意味に於て聊
 づゝ異なることはあれども此に録する記事は此等を概括した事柄を以て
 するのである而して辛棒我慢忍耐の如き行爲は餘り面白いことでなく之
 を食物にしたらば中々甘味くない不味いものに相違ない茲に澁柿唐辛子
 青橙などを辛棒して無暗に食はねばならぬとなつたら考へものである今
 ま若い人方には是非物事には辛棒せねばならぬと勸むるは先づ無理に不味

ものを是非食へと勸むると同じことである併し或る意味に於て此の不味ものを若い時に辛棒して食うて置くと比較的に他のものが甘味くなるのである庵主の経験では甘味しいものを食へば食ふ程人間の體を経世的に破壊して終にグニャ／＼の人間に墮落して仕舞ふ之れに反して不味ものを若い時からウンと食ひ込めば身材軀幹の發達は申に及ばず根性ツ骨などは實に強いものになる然らば諸君に朝から晩まで澁柿に唐辛子又は青橙計り食ひ給へと勸告するかと云ふにソウでは無い之れは勸めたとして食へるものではない之れを食うには此の不味いものを食うことを樂みとして所謂嗜好にならねばならぬ嗜好になるにはドウすれば成れるかと云ふに一番六ヶ敷學問を爲ねばならぬ夫は馬鹿になる學問と阿房になる修業を爲ねばならぬ即ち辛棒我慢忍耐と云ふやうな不味ものを食うには馬鹿阿房にならねば嗜好にならぬのである之れが嗜好にさへなれば別に勸告などをせずとも上戸が酒を飲むように下戸が團子を食うように見さへすれば手を出して見なくなるものであるカウなれば人間世の中に對して恐

るゝことがなくなる恐るゝことが無くなれば根性ツ骨が強くなり一寸見ても立派な男になれるのであるそこで馬鹿と阿房の研究が必要になる抑も此馬鹿阿房と云ふ事は昔時秦の始皇帝の子に胡亥と云ふ人があつた此人親の仕置の身代があつて不自由と云ふものを仕た事がなく子供の時から長人になるまで甘味いもの計り食うて終に二世皇帝と云ふ二代目の天子を相續する時は甘いものを食つた報いの蟲齒で二十歳位で齒が一本もなく總入れ齒をしたさうだ夫れから體も不味いものを食つたことの無い爲めにグニャ／＼であつて餡掛け豆腐の中に酔拂ひを放り込んで塗り箸で挟むやうに餘程始末に困つた天子であつたさうだ處が其の家來に趙高と云ふ途方もない黒鼠の悪い奴が居つて萬事此のグニャ／＼先生に胡麻を摺つて總て自分の好いやうに專斷を仕て居た或日彼のグニャ／＼先生何位に胡麻化つたか試めて見やうと思つて鹿を一匹持つて來て馬を一匹献上し升と云うた處が何程グニャ／＼先生でも鹿だから不審に思つて左右の侍從に之れは馬かと聞いて見たら皆な顔を見合せて居る處が彼の黒

鼠の趙高が尻目に屹度満座を睨み若し鹿と返答をしたら首が無いぞと云はぬ計りの見幕を示したから一同の者は口を揃へて左様馬でムい升と答へた處がグニヤク先生も趙高が怖いから左様かと答へたと云ふそこで後世違つたことを違つたと云ひ得ぬ奴を馬鹿と云ふ今明治の昭代には權門や金満家の前へ出て違つた事にも頭を下げ御無理御尤のお誂阿を遣つて馬でも鹿でも何でも構はん得さへ付いたら言分ないのだサツサ捨てとけ放つとけと云ふやうな馬鹿は一人も無いが支那奴の昔時には夫があつたのだ夫から阿房と云ふのも矢張り此の胡亥のグニヤ君が遣つたことで三千人の宮女に雨の降るとき家の中で駆けつくらをさせて見たいとか家の中を自動車で馳つて見たいとか思つて建築した家が長さ百里であつたと云ふ此家を名號けて阿房宮と云うた夫から後世人民から殘酷な租税を取つて方圖のない政治をしたり無理非道な金儲けなどをして酒や女に身を持ち崩す奴を阿房と云ふ是も今の世にはそんな阿房は一人も無いと信するそこで庵主が今諸君に勸めて辛棒や我慢や忍耐の嗜好になる方法の

馬鹿阿房の學問は此の二世皇帝的の行爲を學べと云ふのではない問題的に馬鹿阿房の意味を研究せよと云ふのだ一身の利害得失を構はないことは二世の馬でも鹿でも頓着しないが如く自分が此様と思つて遣り掛けたことは人の思ひ思惑も見榮も恰好も構はずドンドコドンのドン詰りまで野方圖の無いこと阿房宮の如くせよと云ふのだ此の學問を爲る入校試験には南無阿彌陀佛でも南無妙法蓮華經でも何でも構はない一聲叫んだら慥かに死ぬると云ふ決心をして其事件の中へグイとハマリ込み夫から辛棒と我慢と忍耐とを命の有る丈け遣るのである人間死ななければ止めないと決心して掛る以上の強いことはないのであるそこで利害得失を考へてはいけなない見榮や方圖を構つちやあ駄目である馬鹿のドン詰り阿房の行き止まりまで覺悟をして糞でも蒞蒞でも構やあせぬ死るまで遣るのだと云ふ決心を本當に付ける此れが馬鹿學阿房學の初歩であるそこで人間根性の土臺がチャンと極る雪の日に筈を探す親孝行も主人の爲めに腹を切る忠臣も國家の爲めに矢玉に當つて倒れる烈士も此の馬鹿學阿房學の土

臺が無ければ駄目である元來人間生きて居ると云ふが馬鹿の骨頂で痴漢なフキロンフキを云ふではないが名譽と云ふ號は馬鹿が付けた名前前で愉快と云ふは馬鹿の贅澤で二錢銅貨見たやうな勳章をぶら下げて人に威張る奴は鉦を敲いて町を歩行たら飴賣りの親爺と間違へられる、レツタルの様な紙幣を握りて、目鼻を引張りて、鯨魚張つて居る奴は一寸見た姿は泥棒が癡癡に引付けられて居ると疑はれる、吾々諸君御互ひに空気が有るによりて據るなく生きて居る、生きて居るから五月蠅ながら止むを得ず人と交際する、そこで馬鹿の競争場が出来来る出来たら仕方がないから成丈け多くの馬鹿が好い心持になるやうに多数の馬鹿が喜ぶやうに自分馬鹿の魁けをして辛棒をしたり我慢をしたり忍耐をしたりするのである、夫れには生きて居る馬鹿と、餘り恰好の變はらぬ死ぬる馬鹿たることを決心するのだ、此の決心をする手段には馬鹿學の書物を讀む前に色々の馬鹿阿房を盡くさねばならぬのである、庵主素より此學の後輩、非才、鷲鈍は天資であるが、青年諸君が生ま暖るき春の時雨に花開く窓の睡氣のお伽にと思へば

古き馬鹿事の辛棒録を記憶に探り此れからポツ／＼書いて見るのだ

第一棒

昔日石の上に三年坐り、爪の上に燈をともした馬鹿者があつたさうな、又た面壁九年して下らぬ屁理窟を考へ起つて見たら尻が腐つて居たり、鳩一羽を助ける爲めに痛さを而へて、股の肉を剥りたりした阿房があつたさうなが、今茲に書く事柄は寧ろ夫れ以上の破天荒の事で、辛棒録と云はんより馬鹿物語りと云うた方が好いと云ふ程の事を演出した大馬鹿者が飛び出した、其本人は外でもなく、斯く申す其日庵先生、即ち拙者である、庵主が慥か十五歳位の時の事と思ふが、我家も御維新と云ふ辻捲風に吹飛ばされて、城下より十里許ある舊知行所の田舎に引込み百姓と伍して農事の傍ら家塾を立て、世に憐れなる子弟を集め、手近の書籍など教授して居たが、或る時書生共が凡そ一里許も隔りたる米搗を營業とせる水車屋に二俵の米を持ち行かんとして、春に其二俵を重ねて、大きい棒を以て、四人掛りで擔がんと願

いで居る所が中々擔げさうにない一寸一間許りも歩行ては卸し又た歩行
 いては卸しつて甚だ不體裁である此の有様を先刻より縁側に立つて見て
 居た庵主は常から軀幹長大臂力強猛を以て子供仲間を誇りて居ること故
 直に跣足のまゝ飛び下り弱わ蟲の小僧共其處退け此位の物が四人掛り
 持てぬ位なら飯を食うて學問することを止めよ一人前で半俵の米も擔げ
 ぬ奴が聖賢の道を學ぶのは子供に大八車を挽かすようなもので挽く眞似
 はしても挽けさうなことはないダカラ平生武藝を先きにしてドンナ艱難
 にでも耐へ得る體格を拵へ夫から一心に學問を爲よと云つて居るではな
 いか此位の物は手が一人で擔いで行くから引下りて見て居よと云ひ様更
 に一個の畚を持ち來り兩方に一俵づゝの米を載せて彼等が持つて居る棒
 を取り上げ竹を拾つて杖となしオツと云ふ掛聲とゝもに天秤にして擔い
 だ處が其の重さと云ふものは後頭の皮がギユウと引張れたかと思ふと前
 額の肉が割れるような心地がして背中の骨が弓のように曲りて仕舞ふよ
 うに思はれる併しタツタ今一同を罵倒して擔ぎ上げた處ゆる卸す譯には



ゆかずドシ／＼と一足づゝ前へ進み出した處が一同の小供は心配を始め
 てゾロ／＼尾行て来るから實に進退谷まると云ふが此事で書生共が早く
 歸りたら直ぐに卸して他に何とか方法を考へて持つて行かうと思ふが何
 處までも尾隨て来るソコデ息を詰めた腹の中で心にも思はず南無阿彌陀
 佛と云ふた此南無阿彌陀佛は庵主が一生忘れる事の出来ぬ念佛である何
 にせよ威張つても數へ歳十五歳の小僧が二百斤許りの物を擔いだのであ
 るから全身浴びる程の汗で、一町許り行つたら曲ッ角がある其處を曲つた
 ら書生共は歸るであらうと夫を樂みに滿身の力を込めて遣つて行つてマ
 ンマと其曲ッ角も過ぎて、十四五間進み人通りもない處になつたから卸し
 て見ようと思ひ一寸側目で横を見たら彼の四人の書生は其の曲リッ角に
 佇立んで眺めて居る故中々卸す處の騒ぎでない彌々勢ひ込んで進まねば
 ならぬことゝなつた夫から又二三十間も進んだから又た横目で見て見る
 と最早書生共は見えない上に今五六間も行けば道の中に藁が澤山積んで
 ありて後からはドウしても見えぬことに成りて居るヨシ其處まで行つて

人間再生の息を入れようと思つてトウ／＼其處まで行つたから愈々卸さうと思ふ矢先か最少し前でか電光の耀めく如き不思議の考が起つた、サア此處が日本一の大馬鹿でなければ出来ぬ考へで、其の考はコウである、予れは人を罵り叱り飛ばして擔ぎ上げた米は、コンナに重からうとは思はなかつたが、夫を瘦せ我慢で擔ぎ出し茲まで持つて来た丈けで身心疲れ一歩も引けぬまでになつた此の鹽梅では兎ても前途一里の遠遠なる水車屋まで行くことは思ひも寄らぬのである、若し行けぬとすれば彼の四人の書生に對して顔を合はする面目はない、ソコデ何とかして一時の耻を忍ぶも彼等四人の小供が生命の有る間は此の一事だけは擲擲の種とされて頭は上らぬ次第である、人間喩へ一人にでも一生頭の上らぬ事を仕出かし、夫でも何とか胡魔化して生きて居る必要は無ないのである、ヨシ予は十五歳を一期として此の米を擔いだ儘死ぬのが至極適當の死場所である、其上彼等が監視して居た間は我慢をして擔いで行ける舉動をして居ながら居なくなつたからといつて、アノ藁山の蔭で人知れず休息うなどとの考を起したの

は泥棒の根性と同じことである、金銭の泥棒はイケナイ勞苦の泥棒なら好いと云ふ筈はない、予は昨年十四歳にして西南戦争の彌次馬に行つて直ぐフン捕まへられ成年未滿で無罪で返へされたが、友達は大抵死んで仕舞うた、其時死んだと思へば何でもない、寧ろ米を擔いで死んだ方が風體が面白くて振つて居る人間死ぬと覺悟を極めた上に何にも怖いことは無い、此から此の米を擔いだまゝ、少しも息も死ぬまで水車屋の方を向いて進むのだとコウ決心を極はむべく電光が耀めたのである、人間の腦髓と云ふものゝ、一セコンドの間に働く考へは如何なる推理學者でも測量が出来ぬ、うであるが、或る人が崖を踏み外して轉げ落ちる時考へた事を助かつた後咄したのを聞いたことがあつたが、親や妻子の事から自分の希望から目的から貸した金のことから借りた金のことまで總て一巡考へた跡で、若し萬一今此崖から墜落ちて助かつたら、コンナ事を仕様とまで考へる餘地があつたさうである、庵主が五六歩を進む間に考へた事は、夫程まではなかつたが、何でも死を決するまでの考は仕たに違ひないのである、夫から不動心

が腹の底に据りて、ドシトと少しづつ歩いたが體中は電氣でも掛つて居るようで、人の物か自分の物か分らず、只だ我慢と辛棒が混亂になつて、許り張りて、其他の總ては煙である、先づ米を擔いだ、亡者が地獄の途に踐み迷ふて、空氣の中を歩いていると云ふ姿である、處で半途許りも行つたと思ふ時に、丁度六月頃で、マダ菜種の花が咲いて、田畠に満ちて居た、夫れに一寸目が付いたら、自然と天地一様に黄色になつて來て、道の傍にある樹木までが黄色であると思ふと、何時の間にか足が動ぬやうに成つて來た、ハ、ア此が死ぬるのだなと思ふて、竹杖を前に突つ張り、ウンと腹に力を入れて擔いだまゝに立往生を遣つて呉れようと、ウンと踏張り立ちはだかつた、夫から暫く氣分を繕うて、死ぬのを待つて居たらば、又たズツと世の中が明かるく成つて來て、足も動いて來たから、ヨシ、夫れなら又往ける丈け、往くのだと又往だした、夫れから何のことか分らず、往つたようだが、跡で聞けば、庵主を知つた隣村の百姓二人に、道で遭うたさうだ、何にせよ、其風體と云つたら、辨慶が、火事見舞に往たような顔をして、尻ビリ腰で、長い竹の杖を突いて、行つ

つある有様は、餘程不思議の圖であつたさうな、彼の百姓は、若旦那何處らへお出で、ムリ升と云ふたさうなが、返事も何もせず、酔拂ひの仁王様が荷を擔いだ、ように瞬もせず、ヨロ／＼と往つたさうだ、夫れからトウ／＼、目的の水車屋に着いた時は、餘程氣分も、シツカリ仕て來て、其水車屋の庭に始めて擔いだ、米を卸さうとしたら、其水車屋の婆アさんが、何か襤褸を繕りながら、目鏡の上から庵主を睨んで、ア、モンお前さん、其處に其の荷を卸しては、いけません、向ふの車場の庭に持つてお出なさいと云はれた時は、愈々命の綱を、菜刀で打切らるゝ様に、辛酷かつたが、已に卸しかつた荷を、又擔ぎ上げて、凡そ三間許り持つて往つた、苦しさは、今までの辛棒の幾百倍で有つたか、今も明白記憶に残りて居る、夫れから其畚を二つ棒に突つ、差し其の家を出て、二町許りの道側の榎の根本に、バタンと倒れて眠つたのか、死んだのか、分らぬことになつて、仕舞ふた、何だか寒む氣がするようなのに、意付き、起きたら、心持がフワ／＼／＼して、少しも歩行けない、其後は何處をドウ歩行いたか、丸で夢路を辿ると云ふが、アンナものか、何時となく、我家へ歸りて來た

ので心に大安塔をしたら氣がグラムくするから自分の部屋へ這入たら下婢が飯を持って来た、聞いて見たら晩飯だと云ふたには驚いた、初め家を出たのは何でも朝の十時頃で有つたが、一里の道を一日掛りで歩いたのである、心持が悪いからと云ふて飯も食はず、直ぐに寢床を布いて貰ひ寝たが、其夜の九時頃から大熱で醫者が来る、近所の見舞人が来る、家内は大騒動を遣つて五日間は寝返りも出来ぬ始末で、一週間目から室内位は歩けるようになった、其時ドウしたのか知らぬが、右の腕が變であつて、何事をするにも、懶いようになつて、其後馬から落ちて右手を折つて、一年半許りの間は、左許りで何事もすることになつた、扱て之れは辛棒録の一説であるが、人間謙むべきは慢心である、庵主が平生氣力絶倫であると自信して居た、慢心は忽ちにして罵詈となり、亂暴となり、終には米を擔いで死なねばならぬことになる、此時まで庵主は世に謙遜と云ふことは人間の美德で之れを養うは徳性の一つであると思つて居たが、何に決してソナナ上品なことでないことを發見した、謙遜と云ふことは、米を擔いで死なぬ爲めに用ゆる正當防衛の

用心棒で、何事にも初めに此の用心棒さへ振り廻して置けば、死ぬ程の辛棒は大抵入用ぬものである、併し慢心でも不遜でも、其の破滅に這入りて後には、喰へ死ぬまでも此の棒を振り廻はすことをなし得ぬ奴は、金箔付の籠棒である、ソナナ奴は戦をすれば負けて来る、喧嘩をすればブン撲ぐられる、女を口説けば、臍鐵砲を食う、錢を借れば返さぬ位ぬが、取りで、元來薄志弱行の人間だから、終には何を爲せても、道途ると云ふ、辛棒がないから、富貴に耐る辛棒がなく、驕りをする、貧賤に耐る辛棒がないから、詐僞小盗をする、トウトウ、コンナ奴の一生の歴史を露骨に煎じ詰むれば、嘘と泥棒丈に成つて仕舞ふものである、古語に曰く、若い時の辛棒は、買うてもせよと、良い戒めである、併し庵主の如く、辛棒が無代價で有過ても、馬鹿のドン詰りになる、若い人の戒に、庵主が貧乏のドン詰りに詠んだ狂歌、一句を書いて置く、

貧棒で、足おられたら辛棒の

杖に縋りて立てよ身の上

第二棒

今茲に記す一説も辛棒や我慢と云ふものは馬鹿でなければ出来ぬと云ふ一例である庵主が廿歳位の時のことと思ふが前回に述ぶるが如く田舎住居をして農事と家塾とを事とし秋に農業が一段済めば冬から春に掛けては三四ヶ月間は氣の向く諸國を漫遊したり或る時は東京に出て四ツ谷仲町の山岡鐵舟先生の處にゴロ／＼仕たりして暮して居たが茲年の秋庵主の茅屋を年頃二十七八か三十位の武者修業者が訪ねて来た風體骨柄とも立派な男で豊後の士族で幼少より武藝を好み諸國を遍歴し段々順次ぎに紹介状を貰つて漫遊するのであるが庵主の家には筑後柳川の知人から手紙を持って来た故快よく一泊を勧めたら強く喜んで足を洗うて上り食後爐端で段々咄を聞くと山陰山陽から四國方面を巡り鹿兒島より熊本を経て筑後に入り夫れから筑前に来たので所持の武行日記等を見ると相當に武藝も出来るらしい一體武人と云ふものは單純なるものにて漫遊中の

咄などは中々面白いから遅くまで咄しをして翌朝になると其武者修行先生是非修行の爲め試合を爲たいと云ふ折柄庵主の老祖母が少々病氣を起した爲め他の塾生共が二三稽古旁試合をしたら皆な散々に敵き付けられ仕舞ふたと云ふソコデ庵主が負惜みの病癖はムク／＼と頭を持ち上げ何とかして其技量を一度見たいと思へども彼の病人の爲め其事も出来ずに居たれば二三日して大分全快したから其稽古振りを見又近村にて相當に擊劍を使ふ者と立會ひ居るのを見た處が中々使ひ込んだ劍術にて第一防ぎの堅固な構へにて太刀數の少ない責めの甘い使ひ方であるトウトウ庵主は試合を申込まれ嫌やと云はれぬ蹴になつた元來庵主は武藝は飯より好きであるが天性の下手で只だ根の強いのと體格の相當であるので聊の分を持つて居るので殊に此頃は幼少の時學んだ二天流の兩刀より無念流の山岡式一刀流に變じた許りの時ではあるが其處が馬鹿故自分の方許りに利方を付け何に大抵の處に勝負は追付くで有らうと己惚れ氣合と體で押し潰す積でイキナリ大上段に構へて向つたら暫くの間に隙を見ら

れ非常の悪い間に釣り込まれ申譯の出来ぬ馬鹿氣た負けを取つた夫から
 段々使つたが使れば使る程一本も打つことが出来ず先方は使へば使ふ程
 好い調子になつて来て、トウ／＼三日の間に五回試合を仕たが、非常な不
 裁な小手を二本取つた切りで跡は悉く好い處許り打たれて、全然敗北に極
 まつて仕舞ふた夫から庵主の腹の中と云ふものは残念と悔しさと一杯
 になりて、一夜寝て考へたが、ドウしても勝てさうでない、到底勝てないとす
 れば此の野浪人見たやうな奴に腹散々敲き付けられ歸すと云ふは辛棒の
 出来ぬ悔しさである、何とかして此奴を外のことでも構はぬ負かして閉口さ
 して見たいものだ、若し夫にも勝てないと極つたら恥の擧き上此の世の中
 に生きて居る必要はない、左すれば此奴を打殺して、自分も死ぬまでたと又
 た死ぬことを決心したのである、夫から夜食後爐端で色々武藝の咄をして
 庵主は彼れに向つて云ふには、君の武藝は正さに僕より甘いに相違ないが
 人間の氣力と根氣は又武藝とは別物である、今夜は御互に眠だから根氣競
 べを仕様ではないかと云と、中々面白い先生でソリヤ面白い遣りませう

と云から占めたと思ひ、夫なら先づ此處で腰コジを遣らうと云ふて互ひに
 大腰を出してコジ始めた處が庵主の方が力が強い上に體格が大きいから
 一息に勝つて仕舞ふた、すると今一度と云ふから、今度は二度と要求し得ぬ
 やうに酷い目に合せて懲りさせて遣らうと思ひ、又たコジ初めて少し力を
 弛るめ、負る振りをして先方に押し掛らせ、俄かにコジ返へしグウとコジ
 付けて、其上をコジタ儘キユウ／＼と二ツ摺りコクツたら、双方の脚の皮は
 三寸許りピリ／＼剥けて仕舞ふて、白い肉が現はれ、見る間に鮮血がタラタ
 ラと流れて来た處が彼の先生中々根強く痛さを耐へ、直ぐに手拭を裂いて
 傷所を括くり、減らす口に言ふには、力は慥かに君より私の方が弱いから、何
 か力業でない外の事ではなくては根競べには成らぬと云ふから、小癩には障
 るし庵主も負れば死ぬと覺悟を極めて居る事故何でも怖いことはなく、ヨ
 シ夫なら力業でなく本當の根競べを仕様と、手箱の抽斗にある釘の頭の折
 れた碗豆位のもの二ツ見付け出し、爐の中にて、真赤に焼き之れを足の甲に
 載せて辛棒を競べ、少しにても腰の浮いた方を、此の二夕節の火吹竹で頭を

一つブン打ぐること仕しようと云ふと宜しい夫では此に双方の足を並べ
て一二三で一時に焼け釘を載せようと云ふたら、ヨシと合議一決し即ち釘
の頭を爐の中に放り込み暫くすると真赤に成つたから庵主は先づ其の焼
釘を火箸に挟み先づ自分が載せるから見給へと云ふて其儘左の足の甲に
ボイと載せたが最後プウツと煙りが出た之を見た武者修行先生は已に挟
んで居た焼釘を壘の上に取り落した一刹那庵主は側なる火吹竹を取るよ
り早く武者修行の左の耳尻を骨も割れよと腕限り力任せにビユウと云ふ
程打ち付けた處が武者修行先生ギヤツと云ふ聲を發したのは聞えたが其
儘其處にバタンと打倒れ口から血をダク／＼出して居る夫れから庵主も
家内の者も騒ぎ出して水や薬は申に及ばず近邊の醫者をも呼び迎へ漸く
蘇生は仕たが左の上の奥歯二本打缺き其上脰骨が何とか成つて口が利け
ず一寸見た様は頬邊たが拳固程腫れ上り目が引張れ口が曲り血はゴゴ
ブと出て来るから先づヒョットコが餡粉の盗み食いをしてブン打ぐられ
たと云ふ様である夫から離座敷に寝せて醫者と下婢が介抱をすることに

なつたが茲に庵主の身の上又豫想外の大困難が起つた夫は庵主の左足は
見る中に腫上り捕鯨船の水夫の穿くゴム靴のやうに股まで青い筋が腫れ
出してチツトも動かぬやうになつて来た自分では仕出かした事故満身の
力を込めて我慢と辛棒を張り詰めて居たが翌朝になつたら足を出して飯
を食ふことも出来ぬやうになつて来てトウ／＼十時頃にはバツタリ寢込
んでトウ／＼醫者の世話になることになつた四五日すると武者修行先生
の方は腫も大分減つて来て気分も好い様子であるが庵主の方は筋でも骨
めたものか意地が少しも取れぬサア茲が大馬鹿の標本で庵主は書生を使
に出して彼の先生に左の事を申込んだ君を火吹竹で打ぐつたのは悪か
つたが約束だから仕方がない其易り手前も足が腫れ上りて動かれない併
しまだ根競べの勝敗は付かぬやうだから今度は打ちつこなしで焼釘丈け
右の足の甲に載せて冷めるまで辛棒の仕をしよう一人は左り足が駄目
の易りに一人は左の頬ベタが腫れ上りて居るが是は御互コッコで更に之
れからの根競べには何等の差支へもないかと思ふがドウですと云ふて遣

つたら先方の答へに「私は武藝を修業して天下に名を擧げようと思ふて諸國を遍歴して居り升すが國にはマダ六十七歳の母があつて私の歸りを待つて居り升からコンナ馬鹿なことをして死んではお暇を待たせぬから今少し至快仕ましたらお暇をして國に歸り升から今度は此儘御免し下さい」と云ふから「ソナなら慥かに負けたのだな」と云ふて遣ると「負けたも負けないも此方の御主人の様な恐ろしい亂暴な方は昔から今日まで咄しに聞いた事もムいませぬ慥かに負けました」と云ふから「夫ならと云ふので旅費を拵へて渡し四五日後に立たせて遣つたが今日になつて若い者が爪の垢にも足らぬ小亂暴を爲るのを心配して呼付け意見などをする時に「フツと左足の焼傷の痕を見ると何處か空中に聲がありて「オイ其日庵手前は何の口で其の意見をすのだ」と叱らるゝやうな氣がして一寸威勢が鈍ぶるのである、コンナ咄は素より金箔付の馬鹿話で役にも立たぬ事ではあるが、時世の變遷で段々人間が懦弱になり恥と云ふことは人間の生存上に差たる障害にもならぬやうに心得恥を擡いても

取つた月給は取り得貰つた勳章や爵位も貰ひ得況んや借りた物や儲けた物食つた物や拾つた物まで皆な利益の中に數へるかのやうに見受けらるる事もある世の中故夫では人間と獸と段々區別の付かぬことになつてくるから一己の廉恥即ち恥辱に伴ふ勝敗は人間の世の中に立てる功績以外の勳章と心得之れを決定するには喩へ命掛けでも辛棒の有らん限りを盡して遣り遂げると云ふ氣象が少しは無くてならぬと思ふから思ひ出したる儘一寸書いて置くのである

第三棒

庵主の郷里に於ける先輩は皆な恨を呑んで國事に斃れ庵主の朋友は悉く悲憤を抱いて鋒鏑に死したり庵主一人不幸にして面白からぬ世に生き残り蠢々乎として一日を姑息するは人間の不愉快此上のことはないと思ふ此等の先師友は故山青松の間苦むす石の下露に骨を露ほして今尙ほ切齒扼腕して庵主の生涯を睥睨し蕭風夜雨の間時に啾々の聲をなして庵主

の無能を叱咤するに似たり。天運の循環人の盛衰に伴はず。維新鴻業の先驅として、夙に勤王の大義を唱へ、天下不浪の壯士を扶助誘掖し、放ちて四方に横行せしめたるが、其の布衣蓬髮の輩は、峨冠勳爵の光を燦爛せしめて一世の人目を眩惑し、眞忠義膽、父母を捨て、妻子を刺して、國事に馳騁し、終に腹を屠りて、純忠の血に咽びたる、故山義人の墓は、草亂れ、香冷かにして、天下一人の弔ふ者なし。老幼道途に困倒し、子孫野外に泣悲す。庵主決して愚痴を云ふには非ざれども、人間遭遇の賦命は、斯くまで偏奇なるものかと、時に覺えず、嘆息の聲を發することがある。此の如き實現的歴史が、幼少より腦骨に沁み込んで居るから、随分世の中と云ふものに對しては、眞正直に親切を盡したものである。先輩は可愛い妻子さへ打捨て、命までも國家に捧げて居るから、庵主の能不能は別問題として、世の爲め人の爲めと云へば、自分の窮苦や困難は先輩に叱り飛ばされ、ない。正當防衛として遣つて見たが、サア其處が馬鹿阿呆の標本だから、直ぐに誤解され、壓服され、縛ばられたり、牢に入れられたりする。此で例の下らぬ辛棒と云ふものが、又入用となる今は政黨と云

ふ、鋪の腐つたやうな汚物が、天下の公道に横つて、常に糞より悪い臭氣を放つて居るに、政府も役人も之れに弱り、抜いて居るが、昔日ソナナものではな

い、何事を爲すにも命を先きに投げ出すと云ふ習慣であるから、物事が本氣で、一寸した事にも腰が据つて居る人間、ドンナ悪人でも命に關係したことは正直である。正直であるから、眞面目である。眞面目であるから、死ねるのである。ソコデ辛棒も出来るのである。昔日我國の政治の中樞に横はりて、商人など、結託して眞正に悪い事許りする役人があつて、我が明治聖代の一大汚點となるのみならず、國家は未だ治まりもせぬ中に、既に暗澹の境に向ひ如何に苦惱するも、吾々の瘦せ腕で、議論や建白位で、此大勢を動かすことが出来ぬことを諦め、終に一命を擲ちて、此の暴政を抑止しようとした。夫から服心のももの四人を率ゐて、其事の實行にかゝつた。先づ順序として、其役人の行爲が果して不良なるか否や、誤解ではないか、若し少しにても間違があつては、後世に残る恥の上、に其人に對しても無禮極る事故公平に其善惡を調査することにしたが、色々苦心をして、半年許りの間に、其調査が完結した

が悲い事には庵主等が豫期したより以上の罪惡を發見した夫れから後世に遺すべき證據を蒐集して茲に決定すべき罪狀が三ツ極まつた

第一其役人の處行が皇威に關係する事

第二其役人の行為より外國の輕侮を蒙りし事

第三其役人が奸商と結託して私利を爲したる事

之れ丈げのことに證據がチャンと揃ふたが之れを新聞に書いたり演説にしたりするのは國の恥で愛國の志士の忍びざることであるから人知れず大志を遂げた跡で賈せ狂人となつて美事腹を切つて仕舞ひ生き残りた者より其の趣意と證據物は子孫に傳へて蹤を滅し一方其國家の禍害さへ免ければ好いと云ふことに仕ようと相談を極め夫れからドン／＼其手筈を運んだ處が其後色々の苦勞をした揚句漸々物事が運んで其大志も案外手易く實行の出来ることになりて其の機會が明後日となつた時庵主等が泊つて居る宿に他の犯罪を爲した客人が有つた爲め警察から手が入り其掛り合で友人二人丈けフン捕まつて胴巻に入れて居た書類を皆捲き揚げられて

牢に入り庵主と今一人は東京を逃亡せねばならぬことになつた一人は帆船の水夫となりて北海道の方に逃げ庵主は坊主になつて東國の方に走つた處が時の警視總監は古今の辣腕家で實に其の警戒の嚴重なことは舌を捲く位で宇都宮までは往つたが一日も半時も安全を保つことが出来ぬやうになつた夫れから一ト工夫をして反對に東京に引返し不思議の手段を以て淺草の豆腐屋某と云ふ者の家に隠れた此男は信州生れの者で以前一寸急場を助けた事のありしものにて古の天野屋利平も恥かしき位の男氣のある者にて其家内と云ふは元と吉原の娼妓で有つたさうだがな愛嬌多き女にも似ず實に驚く許りの烈婦であつて夫婦で快く庵主を犒勞て呉れたが二階の物置の破れ疊二枚の處に居り夜になると下に來て愉快に咄しなとして居たが或る日風強く雨烈しき夜の一時半頃突然數名の巡査が闖入して庵主を捕縛に來た處が家は小さき三間住居にて逃げることも隠れることも出来ぬ丁度庵主は二階で豆ランプの火を消して寝ようとした箭先故直に蒲團を丸めて側らに積み元より荷物財布一つに短刀一本手拭一

つ故外に何にも取り散したるものもなく、何時でも覺悟をして居た事故直ぐに二階の窓より飛び出さうと思ふて外を見たらば軒燈の光りに見ゆる外の警戒、兎ても出ては逃れられぬと見たから一寸マゴついたが、不圖上から見付けたのは豆腐釜の竈である。是が大分大きいから其穴なら多分隠れるならんと思ひ、丁度巡查二人は奥の六疊に寝て居る夫婦を起して居る一人は裏口の方に行つた隙に大膽にも二階より身を軽くブラ下りて豆腐釜の端を踏へ竈の中に直ぐに這入り込んだ處が其竈は外から見れば大きいやうだが中は案外狭くして體を二つに折りても足の先き位は庭の方へ出るのである。是では蚤が疊の目に隠れたのと同じこと、此上フン捕れば實に頓馬の標本であるから、一生懸命奥の方に壁込んだら天の助けか大きい穴がある。夫は煉瓦の煙突である直ぐに天頭を突込んだら無理にすれば肩まで這入るから占たと漸々體を伸ばし、竈の奥に残つた足を藻掻いて段段肩を左右に撚つたら、樂に成つて足探に探れば何處にも煉瓦の缺けた痕の穴がある、其の穴を踏へて體を上へくと伸ばしたら、トウくと足が竈の

中で無いようになつた是なら一寸大丈夫と思ふて居たが、サー茲に困難な事は其後家内の形勢が分らぬ、ソコデ何でも少し模様を見ようと思ひ、ソウツト寵の中に下りて見ようかと思ふたが茲に不思議な事を發見した、夫れは天下の士大抵煙筒の中にブラ下つた經驗はあるまいが庵主は神の告げかと思ふたは、其夫婦と巡查の咄が手に取るやうに聞える、今日文明の世になりて、ストロブに空氣を吸込む理窟からして音響も割合に能く聞ゆると云ふ事も分つて來たが、其時は金箔付の野蠻書生だから實に不思議に思ふた、夫から夫婦の申した切々ながら大要はコウデある、アノ方は私共が恩義のある方ですからお世話をし升た、又た中々了管の立派な方であり升から恩義が無くてもお世話致し升、アノ方が嘘へ悪い事をせられても私共は屹度お助け申して目的を遂させ升、實はお巡り様方に嘘を突いてもお隠し申さねばなりません、夫れはアノ方の御了管に對して恥ぢ入升から嘘へ私共は罪になり升ても嘘は吐きませぬ」と云ふにある事が分つた、人間と云ふものは弱いもので、陰で自分の事を嘘でも譽められるのは非常に善い心

持のもので庵主は不幸にして過つても今日まで斯の如き信用を人に受け
たことがない此の夫婦の云分が其時命を取られても宜いと思ふ程嬉しか
つた跡で聞いて見れば丁度其の竈の前で白洲を立て、調べたさうである、
其後人聲が聞えぬようになつたが何でも亭主は拘引されたらしい家内は
頓と寂々として何の音もせぬ其中に煙筒の穴から天を見れば夜も明けた
模様であるが茲に溜らぬ辛いことは足の指先き計り煉瓦の缺けた穴に突
込んで體の重さを持つて居るのだから指先は痺痺して仕舞ひ後脚も割れ
るようになつて来て股から下腹まで突張つて来る世の中に法師や山伏の
爲る荒行にも色々の苦しい事は有るが煙筒の途中にブラ下りて我慢辛棒
して居る行は有るまいと思ふ夫から今一つ庵主の身の上に非常な大事が
出来た、夫は先刻より變テコナ音がして居たが其神さん亭主が拘引され
たのも平氣でお得意様から豆腐を買ひに来るので先刻から豆腐を白で挽
出し竈に火を入れんと下の方でガサ／＼云はするの一事である如何に庵
主が馬鹿でも豪傑でも煙筒の中に居るのに下に火を入れられて溜るもの

でない寧ろフン捕まつて懲役に往た方が餘程樂であるとか考へたから急に
狼狽出して竈の中に下りて来たら膽を潰したのは神さんで火を燃かんと
する籠の中に毛脛が二本ブラ下つて来たから普通の女ならビツクリして
聲をも立つるであらうが中々膽の据つた女だから薪か何かで頻りに足の
先きをつくから、ハ、ア此は下りては悪いのだなと思ひ又ソロ／＼這ひ
上つた、トウ／＼夫から又五六時間辛棒して晝の十一時頃までになつたら
コツ／＼下の方を突つく音がするから何かの合圖と思ひソロ／＼下りて
来たならば神さんが手を貸して引出して呉れたが足も腰も立たぬ足の指の
先きが兩方で三ヶ所裂け傷が出来て餘程出血したものと見える夫から其
の御面相と云ふたらドンナ寫生術の名人が來ても描かれない有様で體中
に油煙の塊まりを背負ひ水漬を垂れて頬も手足も眞黒で印度人が炭團圍
に觀光に往つて饜應の墨風呂に浴れられて黒ビールに酔拂らつたやうな
姿で手も付けられぬ有様で如何に吉原のお鐵漿溝に水鏡を撮つた黒人上
りの神さんでも庵主の眞黒なる黒出立にはギョツと尻込したのである處

で神さんは直ぐに箒を持って来て庵主の天窓となく體となく一遍に拂ひ落して裏口にも出ることならぬことを咄し早々例の二階に追ひ上げられ小桶に水を汲んで来て頬と手足丈けを洗つて呉れ古旅籠の向ふ側の暗い板張の上に蒲團一枚を布いて庵主を寝せて手早く握飯三ツと漬物と茶一杯を呉れ咄もせず下に往たが、一時間も立たぬ中に又巡査が張り込みに来て一寸二階に首を出して見廻し下に往つて据り込んだ夫から神さんは巡査にお世辭よくヤレ御苦勞様とか御大抵ではムりませぬとか好い加減の事を云ふて茶などを出し平氣で豆腐を拵へて居る夫から其夜も身動きもせず明し小便を先きの小桶の中に足して翌日となり九時頃例の張り込巡査の交替が来た故又二階を見ると神さんが私が御案内申すと云ふて先きに上り巡査を連れて来て一巡見て下に往つた實に其際度い危うさと云たら男子の庵主でさへ安心もせぬ然るに神さんは實に平氣である此間に庵主は人間精神上の非常の學問をしたのである神さんと巡査が下た跡にフイと見ると古旅籠の上に神さんが手に持つて居た手拭がある何氣

なく一寸取ると不完全な握り飯が一つと金が五圓轉がり出して来た庵主は實に神さんの度胸と氣轉に驚嘆した夫から其日も晩れて夜の八時半頃になつたら亭主が歸つて来た間もなく警部が一人来て亭主夫婦に長たらしい説諭をして彼の張り込み巡査と同道して出て往つた其刹那マダ半丁も往かぬ時に俄然ランプが消えた其トタンにドン／＼二階の梯子を敲くから直ぐに勿ね起き、ヨロ／＼して探つて往つたら手を取つて下し夫婦で兩方の耳に口を寄せ御機嫌よく御達者でと云ふと其儘一つの風呂敷包を庵主の手に渡してドンと表に突き出した庵主は直ぐに向ふの路次に入りて振り歸つて見た時は豆腐屋にはランプが明かるく付いて居た庵主今日日男らしく大きな頬をして居れども今から考へて見ても此豆腐屋夫婦は人物が庵主などより一二枚上の人であると思ふ庵主他日筆硯を清洗し此の夫婦の履歴を發稿せんことを常に心中に期して居る夫より庵主は夜の中に八丁堀の炭積船に金を遣つて甘く談判して乗込み今日の如く水上警察も整備して居ない時だから無事に出帆して伊豆の下田に往き兎や角東

海道から神戸に出て多度津に渡り金比羅参りをして伊豫の松山に往き夫
から漁船に乗りて對州の嚴原に往き釜山に往き仁川に行つて京城に入り
難なく縲綯の耻かしめを免かれて今日ある譯である而して他の同類三人
の者の行末も實に面白い事があるが餘り長くなるから總て他日の機會に
譲り茲には只だ煙筒入り辛棒の珍談を記して筆責を寒いで置くこととせ
り

因に記す此の夫婦が暗中に庵主に呉れた風呂敷包の事に付又面白き物
語りあり而して此の豆腐屋の家は其以前鐵工場の追立られた跡を貸家
にして煙筒のあるを幸に此夫婦の豆腐屋が借りて煙筒の横ッ腹を毀は
して穴を明け其前に豆腐釜を拵へたのなさうである此は後に聞いた咄
である

第四棒

昔日庵主が浪人書生を仕て居た時に方々の宿屋を喰ひ詰め芝京橋麻布

麴町を先づ片付け日本橋の某下宿屋に泊つて居た處が、コンナに流浪はし
て居ても手下者二人丈は何時も引連れて居る一人は宮崎縣の者で一人
は山梨縣の者である此の兩人は如何なる因縁か盛衰苦樂とも暫時も庵主
の側を離れぬと云ひたいが始めから終りまで盛々樂々は抜きであつて衰
々苦々計を共にして働いて呉れたのである故に此の日本橋下宿屋の御難
の時も無論同宿して居たが回顧すれば人間僅の一生に意氣の投合と云ふ
ものは實に恐ろしき程のものにて善惡邪正の仕事は申すに及ばず嗚へ烈
火の中に飛び込む事でも庵主の云ふて聞かせた事は確實に執行して更ら
に他に求むる事の無いと云ふ譯故妻子眷族一家一門の事は忘るゝ時があ
つても此の二人の事は忘れることが出来ぬのである古語に曰く萬人の心
を執る者は必ず一人の心を執ると人の心を執る事は下女一人の心さへ確
實に執り得られぬものである庵主は萬人の心は執つたことは無いが二人
の心丈けは慥かに執つて居たのである此の故に庵主は寢ても覺めても此
二人が便りて萬事を行ふて居たが一道の悲運は庵主が日本橋の逆旅を蔽

ふて生涯に再び遭ひ難き悲惨の事を試嘗した夫は此時の困窮は今日如何なる靈妙の筆を揮ふも描き出す事の出来ぬ有様で他の書生は先輩成効の花下喧暖の風に吹かれ各所志の學業に従事し居れども庵主等は滿都一人の知人朋友なく最上期待の幸運が學僕位のものである夫れとても好い程の馬鹿が縁故因縁によりて相當の位置を得た奴の處の立關番位のものだから鼻垂息子をお坊様と崇め奉り小辨當をブラ下げて學校行のお供をするか白雲天窓のヤンチャ娘の守りをさせられる位の職務をして賣婦上りか下女上りかの氣六ヶ敷喉を奥様と申上げて頭を下げ飯炊婢や車夫の喧嘩の仲裁にまで立入りて機嫌を取り漸の思ひで晩に缺一杯の油を貰ふて之れを窓の敷居に載せ屋根打つ霞や窓漏吹雪に身を縮め只だ僅かに脂切つた翠丸を親とも子とも産地神とも思ふて握り詰め森の彼方の雞の音を聞くまで書見に疲れ少し斗りコクリくと居睡つたかと思ふと下女に起されて門内の掃除を爲る位が彼の最上幸運の既定憲法であるから庵主は彼の二人に左の事項を申聞けて同意せしめた汝等決して尺寸の榮達

を望む可からず之れと同時に寸毫の侮辱を忍ぶ可からず男子世に生るゝや雄大の使命を天に享け居れり曰く世を救ひ人を助けよと此の大任を果たさんが爲めに學問をするに先づ多大の侮慢と屈辱とを歴史として學び得たる學問は何物であるか其の説くところ行ふ處已に侮慢屈辱の歴史を暴露して生涯を過さざる可からず併し學問は爲さざる可からず決して人に仍りて爲すべからず須らく自から學んで自から行ふべし之れを爲すに對する刻苦辛酸は我れを生んだる慈愛の神に對するの犠牲なり若し力足らずして耐へ得ざりせば尤も潔よき死を以て神に返納すべしと二人は此の心を以て庵主と共に刻苦したる者なり即ち庵主は此の日此の二人と共に夢の炎尙ほ消えず涼風鎖す倉狄の夏ならねども九月の末最も蒸し熱き六疊の部屋に三人卓を共にして晩食をなし翌日は其の一人が芳町の桂庵の世話によりて藥研堀の或る活版屋に奉公に棲み込み庵主が北海道に往く旅費を才覺せんとする相談の最中其の宮崎生れの一人が俄かに腹が痛むと云ふて厠に往き餘り長く出て來ぬゆゑ庵主起つて見に往きたれば便

所の前に打倒れ居る故引起して其譯を問へば、蟲の息にて多量の吐瀉をなしたると云ふ間もなく、又其の處にて吐瀉を初めたり、直ぐに今一人を呼び水よ薬と手當をして、少しは快くなつたから、二人にて寢所に連れ來りしが、悲い哉、昏睡状態の儘、俄然其夜の十二時に死亡したり、庵主の驚き一方ならず、永年の交誼一片快心の期會も與へず、故山千里の逆旅に此の最後を見る、庵主の九腸寸断せんとするは實に此時にて有りなき、扱て斯くて止む可きにあらねば、翌朝亭主に咄し、纒かの貯へを以て葬具を整へ夜に乗じて下谷の宛ある寺へ頼み、之れを埋葬し、月代高き秋の夜に庵主其の墓前に跪坐し、熱心に讀經引導して歸りし時は、繁華を競ふ大江戸の町の家毎も戸鎖して軒の燈のみ光り往來稀なる頃であつた、夫から其三日後の晝頃、今一人の山梨生れの者が俄かに又腹痛を初めた、今度は病勢も餘程緩であつて、其夜十時頃まで、十七回の吐瀉であつた處が、其宿屋の亭主は此事を知りて、宿料も何も要らぬから、即時に出立せよと、番頭手下女交るゝで火を付ける如き催促である、何にせよ、東西隔る旅先の災難故、如何なる庵主も、途方に暮れ

是非亭主に面會して、事情を訴へようと思ふても、絶對に峻拒して面會してくれぬ、進退茲に谷まり萬止むを得ず、其夜の十一時半頃、其病人を背負ひ、側らズツクの大カバン一つに荷物を纏め、踏躑として其宿を出たが、今考へて見ると、當時庵主の體力は餘程強猛で有つたと思ふ、即ち背中、男の病人を一人背負ひ、左手に大カバンを提げた姿は、餘り恰好の良い見掛では無かつた、夫から深川の或る消防警察署に、懇意な人があつたから、夫に往て頼む積りで、新大橋に出て來て、消防警察に往き、病人を警察の横門の處に卸し、其人の家に往つて、事情を咄し、一時病人の手當の事を相談したら、其主人は餘程困つたものと見えて、不在と云ふて裏口から出て往つて仕舞ふた、落ぶれて袖に涙のかゝる時人の心の奥ぞ知らるゝと云ふ古歌の如く、此人は其以前庵主の助けに依りて、或る危急を免れた人であるが、此の始末故普通の人は、ら、屹度其薄情を咎むるであらうが、其所が馬鹿學問の効力、辛棒學の神髓で、其時庵主はコウ考へた、世間の普通は皆自分の不徳を棚に上げ、慕の如く向ふ許りに目が付き、人の不徳を咎めて怒るが、是は大きな間違である、人間と

云ふものは、恩徳更になく、只だ道路で出會つた許りでも相當の敬禮を受くべきものであるに、已に知る人であり、又々交際をして、其上其人の爲めに恩徳まで施して居ながら、尙ほ輕蔑無禮を受けると云ふのは、其の向ふの人より先づ自分の不徳が尋常一様でなく、自分の何處にか、嘔吐より惡い不徳が食つ付いてをるに違ひない。何でも此から自分の徳を磨いて、他日彼の人が自分に分に偉大の尊敬を拂ふようにせねばならぬと思ふた夫から、又其病人を背負ふたが、其時は、モウ大分弱つて居たトウ、本所の相生町まで行つたら、何でも様子が變であるから、決心をして、其の側にある安宿らしき家に案内なしで背負込んだ。急病人だから直ぐに手當をせよと頭押に云付けて、店の次の間に寝かした。グズグズ云ふて居る中に、巡査が前を通つたから呼止め、其事を打明けて咄したら、醫者を直ぐ連れて来て、眞正虎烈刺と確定した。間もなく、其夜も明けんとして、回向院の坊主が鉦を敲いて朝の勤めを始める頃、一寸の煩悶にてアレと云ふ間もなく、溘然と落命して仕舞ふた。是れが即ち東京に大虎烈刺の流行した始り、即ち明治十九年九月初の事である。夫

から其宿屋と庵主と巡査と三角對峙の間に、大悶着があつたが、之れも辛棒と忍耐で無事に済んで、終に市役所の手で葬つて呉れた。此間に庵主の面目ない事や、殘念な事、其慘澹の有様は、是又筆紙の能く盡す處でない。讀者宜しく推察し玉へ、何にせよ、發生する事件に少し猶豫があれば、何とか工夫の仕様も有るが、總て啞喑の間に起る事斗りで、庵主の境遇では運動の餘地がないのである。庵主は此の萬艱を辛棒と忍耐で凌いで、來たが、願れば朝暮寢食を供にし、艱難を同うした希世の信友二人は、僅かに一週日にも足らぬ間に、芝居や小説にも、見る事の出來ぬ悲惨の最後を遂げさせた。跡に残つた庵主一人は、此後如何し、らう好いであらうかと、自失惘然として居たが、扱て斯くて在るべきにもあらねば、ブラ／＼と足の向く方に任せて、出て來たのが、銀座の町である。此處で兎ある下宿屋を見付出したから、此家に一ヶ月四圓五十錢の下宿代、明日の仕拂と極めて泊り込んだが、其晩の食後八時頃、頻りに睡眠を催はし、九時半頃、厠に行たら、又大下痢、二回目には吐瀉となり、十二時頃には九回も重ねたから、苦しさを凌ぎ、晝の中に見て置いた向家の醫

師に宛て、手紙を書いたが、夫も何と書いたか分らず、終に人事不省となつた。夫から人心の付いたのは、其日より十二日目で、身は龜井戸の避病院の中にあつた。庵主が正氣に成つて、其左右の床にある患者の、白い布を蔽はれて、焼場に持つて行かれた。死亡人は、何でも七人許りであつたと思ふ。庵主は此の恐る可き災厄の中を、彼の銀座の宿屋及び醫師又た避病院の人々の過大の盡力によりて、萬死の中に一生を得たのである。此から二十日の後漸く全快室と云ふに移されるまでの辛棒の多大なること、其全快退院後に連續した困難と忍耐及び其翌年の七月までの間に、此三人の病災に對して受けた恩義と同情とを、酬ゆる事の困難にして、辛棒と忍耐を要した事を、是又讀者の推諒を乞はねばならぬ。餘り長くクダクダ敷なるから、此顛末は先づ此位にして、次回の稿に移ることゝすべし。

第五棒

釋迦が印度王國の嗣儲として、宮殿樓閣の裏に長となり、榮位榮華の境界

を出で、人間塵世の痛苦を哀み己れ先づ出離捨身の難行に入り、偏へに解脱正覺を求めたるは、元々人に頼まれた事でもなく、云はゞ全く自分の道樂物好きより始めた事柄で、何も酷く敬服する事でもないが、茲に不思議なことは、其の積み來つた難行苦行の辛棒は、一つの効果となつて、五千年後の今日世界第一の多數の信者を持ち、其教化功德の末にある弊害は暫く措き人間生死の大事より、心身迷悟の智覺術を聞く時は、如何なる剛惡非道の者も一寸、腦髓に一妙感を起して、ヒロツク事になるは、實に不可思議の事である。之れは、全く此の道樂の辛棒を本氣で遂げたる結果であつて、少しでも冗戲があつては、人が眞面目に受けぬのである。故に人間のすることは、何事でも本氣で無ければ駄目である。殊に此の辛棒と云ふものは、尤も本氣で無ければ出來もせず、又仕ても居られるものでない。庵主が幼少の時學問と云ふものが嫌ひで、稍々長となつた時、ドウシテも學問をせねば可くないと云ふ事を感じた時、かう考へた。天地の間に同じ人間に生れながら、同じ資格で生れて死んだ人間の事蹟、又た所説を學ぶに、一生懸命になつて、學び得た學問は、

古人の受賣若くは取次人たるに過ぎず。夫では如何にも残念である。自分
 之から學問を爲るなら、自分を本位として、先づ自分が斯様な人間に成りた
 いと云ふ事を定め、夫に對して古の奴共はドンナ事を爲たか、其の爲た事が、
 自分の本位に入用ならばよし、若し不必要ならば、必要な事として、知つて
 置く。と云ふに止むる外ない。何でも、自分に入用の事項を探し出して、参考と
 するまでを程度として、遣つて見ようと思ふて、夫から神儒佛は申に及ばず、
 和漢洋の書物を、手當り次第に、讀んで、讀み倒した處が、其の學問の値打
 のない事夥しく、先づ道理としては、段々悪いことの仕方を覺え、其他の科
 は、屁理窟を云ふて、人に憎まるゝ丈けの用に外立たず、夫から、其の道理と云
 い、理窟と云ふものは、實地に當て、符めて見れば、悉く失敗の種となりて、甘
 往つた例證なく、尙ほ未練が残つたから、其の専門の人を、金を出して、備ひ、實
 地に遣らせて見た處が、何程遣つても、遣四九尻計りで、コンナ筈では無つた、
 ソンナ譯は無いと、いふ言譯に、學問を遣ふ計りで、學問は責任なく、今日まで
 少しも學問が、損害賠償も、保證の義務も、果して呉れた事がない。詰り、學問と

云ふものは、番太郎の夜廻に、敲く拍子木の如く、癡坊をすると、泥棒が這入
 と警戒する丈け位の道具であると思ふた。勿論庵主の經驗は極々疎雑で有
 つて、眞味を嘗ふまでには、往かなかつたかも知れぬが、庵主は、ソナ間鈍る
 い事を仕て居る隙がない。先づ人間一生を、六十年と定むれば、始めの二十年
 は、無我夢中で暮す。中の二十年は、遣つて見る失敗の歴史である。僅かに、残り
 の二十年に、何か少し計りでも、世の爲めか、人の爲めになる事を、仕出かすか
 仕出かさぬかと云ふ、御愛嬌である。夫に、何をグズグズして、廻り遠い事を考
 へて居る暇が有るものか、ソコデ、之れはマゴクして居れば、役にも立たぬ、
 屁理窟を知る爲めに、何にも仕出かさぬことになつて、仕舞ふと思ひ、夫から、
 何でも耳に聞えた事、眼に見えた事、手當り次第自分でも考へた通り、可成好
 い事に成るやうに、遣つて見たのである。ナゼコンナに急ぐかと云ふに、元
 來人間と云ふ者は、深い巧みが有つて、拵へた者でない。庵主の身體でも、神に
 斯様の風に拵へて下さいと、誂へ注文した物でない。本の出来合ひで、戯れに
 竹で水を敲いたら、泡が出た位の物で、マゴクして居て、一寸無常の風か

フーと吹けば、バツと消えて仕舞ふ。其の消えぬ間のお慰であるから、手取早く何か有象無象で、マゴゴとして居る亡者共の爲めになる事をして遣らねばならぬ。ソコで中々忙しいから、自分の困る事や、苦い事は構つちやあ居られない。何でも遣うと思ふた事は、跡構はずにズン／＼遣つ付けるのである。其間に學問が入用であるか、間に合ふ事があるかすれば、ズン／＼借用して往く。我流手摺み主義で往ける丈には、夫でズン／＼遣ると云ふ式に餘儀なくなるのである。此等の亂暴は、馬鹿で無ければ出来ぬ。ソコで無際限の辛棒をせねばならぬ。此辛棒で得た處の經驗は、實に不思議の結果となりて、古來より有り來つた書物や、學問で得られない意外千萬の新學問が出來て來る。夫が面白から、又た他方面の事を遣る遣る丈け面白く成つて來る。是で今少し計り残つて居る生涯を、遣れる丈けの變化と轉遷をして、世の中を掻き交せて見るのである。斯様な次第故、今日まで遣つた辛棒の中で、尤も馬鹿氣た可笑い事だけを録して、諸君午睡のお伽にして、筆責を塞ぐのである。是から考へ出して、又ソロ／＼書くのである。

第六棒

段々前にも言ふ如く、庵主は或る意味に於て、手の付け様の無い、厄介坊主だから、自分がコウと思ひ込んだことには、神でも佛でも自分の面前を遮る者は、踏み殺しても進むと云ふ、亂暴者で有つたから、親に苦勞を掛け、師匠に心配をさせた事の絶え間は無かつたが、世の中は良くしたもので、庵主の如き者には、又た普通以上の慈愛深き親と師匠が配合して有ると見え、云ふも聞かぬから、蔭になり日向になり、庵主の身の上を保護して呉れたことを、今日思ひ出すと、身も縮むやうに慚愧するのである。所で庵主は随分亂暴な書物も読み、亂暴な行ひもして來たが、先天的に庵主が生存上の力を麻痺させて、人間の機能を失はしむるものが二つ有る。一つは酒である。庵主が如何なる場合に於ても、如何なる決心をしても、酒と云ふものが一寸と唇に付くと、蛇の頭に煙草の脂を付けたやうに、ズーツと顔色が變り、次ぎに全身が倦怠となりて來て、逆も身動きも出來ぬやうになつて、夫を尙ほ我慢して居れ

は直ぐに氷袋を頭に載せねばならぬ始末となる是は如何に修業をしても、工夫をしても辛棒が出来ぬのである今一つは天子様と云ふ三字である此の三字は彼の酒の如く一寸庵主が脳髓に觸るゝと、一種云ひ得られぬ感じがして全身麻痺し即ち庵主の生存力の悉くが休止するのである庵主の家には昔より明暦の天子様 御西院天皇様の御震翰色紙の掛物があるが、庵主は幼少より手も觸れたことが無い所が庵主が若い時マタ仕ても我意を募り云ふことを聞かぬ時は父母は此の掛物を床の間に掛けて意見をする庵主は蛸蝮に鹽を振り掛けられたやうに絶體服従である其他歴史を讀んでも事 天子様の事になると、脳髓が妙になつて来るから直ぐに飛ばせて讀む癖がある随つて彼の菊桐の御章が何だか氣になつて子供の時貨幣紙幣が變であつたが今日になつても何程か其癖があつて此間義隊の騒動の時上野の宮様から紛れ出た歴史付の刀三本奥州の白川から賣りに来た者を皆な庵主が買ふたが其中に一本丈け金細に後藤風の鍔目のある菊桐の御章彫付けの名刀があつた暫く大事に保存して居たが何だか吾々

の家に置いて居るに氣に成つてならぬやうだからトウ／＼舊思ある或る高貴の方に獻納して仕舞ふた位であるソコデ庵主は若年の時から勤王と云ふことは決して口で云ふ事でないと思ふた昔時から勤王家とか勤王論者とか有つたが庵主は細かに其言動を審査したが全部とは云はぬが大抵が此の恐れ多い尊嚴な事を道路に觸れ聲を出して賣りて功名爵祿の代價を得たのである庵主はドウカ此問題だけは日本國民の天性とか特質とかにして他に如何なる様々の事を爲すも恰も小兒の親を慕ふが如く人間の飯を食ふが如く日夜の心に間隙なき精神活動の基礎として徒らに議論の問題などにしたくないと思ふて居た此等の意思を決定するに庵主は永い間の煩悶を辛棒して書物をも讀んで居たが皆臭氣紛々讀むに耐へぬ物許りで中には讀掛けして放り棄てた物も澤山ある人間苦痛の辛棒も色々有るが精神上或る疑問を解決せんとして探求して得られない程辛酸事は無いものである天性頑鈍の庵主は今考へて見ればコンナ詰らぬことに永く苦んだのであるトウ／＼先きに行く事も跡に歸ることも出来ぬやうに成

つたのを辛棒して掻き探して居たら、不斗或人の家の床間にある掛物を見
た。夫は幻住庵の高僧仙厓と云ふ禪坊主の歌である。下に薄墨で天満宮様即
ち菅公の束帯坐像を書いて、其上の賛に、

心だに誠の道に叶ひなば守らすともおれは鎌〇ぬ

と書いて天神様を地邊端に厭落した歌である。永い間苦んだ庵主は思はず
大聲を上げて「此れだ」と膝をボンと打つた。ソコで庵主が此の天満宮様の歌
を解剖すれば、

心だに誠の道に叶ひなば守らすとも神や守らん。

で守つて貰ひたければ心を誠になせよと云ふ即ち代價付である心を誠にする
から守つて下さいと云はねば守つては呉れない。ソコで或一人が心を
誠にして、サア守つて下さいと代價を要求した時に神が守つて呉れず、御利
益が無つた時には直ぐに神殿に行つて尻をまくりて、ナンダ天満宮の嘘吐
野郎、手前は詐欺師だ、人を馬鹿に仕やアがつて、心を誠になせやがつた、揚句
に守つても呉れねえじやないか、我等心を誠になせやがつた、今日から止

すよ、此からドシ〜虚偽詐欺の爲放題をするから、ソ一思へと云はれても
天神様グツとも云へぬ。仕末である。仙厓坊の歌はソ一でない。元々心を誠にする
のが人間の本分なら勉強して誠にしたら好じやアねえか、心を誠にする
が我等の希望で、欲しい物を取つたのだから、別に賃銭を取る必用はない。守
るの守らねえのと失敬な事を云ふなと云ふ主意である。人間は何事も此れ
で無くては成らぬと、小學校生徒の二年生位の者の考へ出したやうな事を
喜んだのである。ソコで勤王と云ふことも誠の道に叶ひさへすれば夫で好
い。否な夫限りにして置かねばいけないのである。其先きに守つて貰つたり
譽められたり、物を貰つたり、位階勲爵の上に金銭を溜めたり、別荘が出来た
りせねば膨れつ顔をして、ブ〜ハッ當りに當り散すやうなことをする
と直ぐに仙厓坊主に木魚槌で頭をコツンと敲ぐらるゝのである。併し此の
辛棒が人間の一番六ヶ敷い事で、無賃無代價で物事を爲ると云ふことは、お
額の飯粒を舌で舐め落すか、拳固で茶碗の皮を小摺り剝くより困難な事だ
ある。自から遣つて見る氣があつても、遣り切れない辛棒である。夫を平氣で

遣るのが馬鹿で有り、阿房で有り、辛棒で有り、忍耐で有り、孝行で有り、忠義で有り、勤王であるのである。昔日印度の或る國に、釋迦の弟子の尊者が佛道を弘めに行た處が、此國は魔道と外道計りで不待遇こと夥しく、歡迎もせねば、説教も聞かず、碌に飯も食はせぬのである。尊者先生非常に弱りて、杖に絶りてヒョク／＼して或る溪川の涯りに來たら、素敵滅法の美人が其の川で白布を晒して居る。尊者先生立寄つて、女人何をか爲すと聞いた。彼女曰く、妾は無垢清淨を求むといふと、尊者曰く、其の布既に無垢清淨ならずやといふと、女曰く、此布無垢清淨に似たりと雖も、溪流時に濁濁して之れを汚がすこと屢なりといふ。尊者曰く、何笑れぞ布を濁濁の溪流に晒すやといふと、女笑つて曰く、布を濁濁の溪流に晒して無垢清淨を得ざれば、人笑んぞ五慾十惡の濁世に處して佛心を得んや。妾今此の溪流に布を洒すこと既に四萬六千日、之れを洒すの心既に無垢清淨ならば、何れの日か布白からざるを得んやと、尊者長揖冥目我道心の虛弱を悔い、暫くにして目を開けば、女人の身邊光明遍照し、天に向つて飛び去れり。即ち菩薩の示現にして、尊者渴仰瞻に銘じ終

に其國を立去る事を止め、幾多の辛棒忍耐の後、佛道歸依の國となしたりと、即ち我々が此の俗世汚流の中にありて、幾多の誘惑を排し、無賃で無垢清淨の誠心を得んなどは、濁濁の流れに布を洒すと一般先づインボッシブルの事のやうだが、決してソーデない事を保證する。夫は左の歌を三唱すれば直ぐに其辛棒は出来るのである。

心だに誠の道に叶ひなば、守らすとも、おれは鎌〇ぬ

アト／＼詰まらぬ屁理窟で草臥れた、今度は何かコンナ子供たらしで無いやうな事を考へ出して書く事としやう

第七棒

庵主が借金譚の時一寸書いたと思ふが、旅商人の妾で山陰道を遍歴した時の事であったが、其山陰道に入る途は岡山より朝日川とか云ふ河に沿ふて、作州の津山に出で、四五日逗留して、夫から山陰山陽の脊骨とも云ふべき山脈を踏み越えるのである。何でも津山より八九里と思ふ處に物見村と云

ふ處がある其村に一夜泊りて明朝物見峠とか云ふ山を越えて因州の智頭郡の智頭とか云ふ驛に出で鳥取に行く積りである此れも何でも五六里あるらしい處が此物見村と云ふ山村は何だか太古臭いやうな氣持がして山容水態妙な感じがして昔日印度で釋迦が分け登つた山はコンナ處では無かつたらうかと思ふて急がぬ旅の漫遊浪人は頻りに面白い心持がしてならぬソコテ翌朝其の泊つた茶店のやうな處を立出でブラ／＼と路を辿り或は小高き處に休んで景色を眺め或は名も知れぬ花の咲き亂れて居るのに戯れて北へ／＼と登つて行つた用事のない責任のない連れの無い錢のない無盡しの貧乏旅程氣散じの面白い物は無い道の有るに隨つて其山に登れば登る程面白い心持がするからブラ／＼と行く中に腦髓の中に色々の考へが浮んで來た一體釋迦など云ふ奴が人間一大事の本願を起して正覺解脱を得んとするに山に這入たと云ふは面白い考へである元人間は悉く凡夫だから五慾の境十惡の衢に彷徨して居ては纏まつた事は考へられぬと思ふたに違ひない表の門を出れば天獄羅の立食ひが出來

裏の路次に出れば白首が居ると云ふ處で抑も根性の土臺が禽獸と餘り遠からざる性質の人間で碌な妙感を得らるゝものでないコンな山中に孤坐獨棲して天下の人間を盡く獸類と見做して居たらば一寸面白くないでもないと思ふたり何かして行中に道なら三里も來たかと思ふ頃酷く草臥れたやうな氣がして來たから辨當でも食ふて見よう思ふて兎有る見晴しの好い丘の草の上に坐り込んで竹皮包みの握り飯を出して谷川に下りて腰なる水呑一杯の水に喉を潤はし食ひ了つたら頻りに眠りを催して來たから横になつて何か物思ふ中にツイトロ／＼と眠つて仕舞ふた夫から夢と幻の境ひ目も分らぬ中に何だか馬鹿に面白い夢を見たやうな氣がしてフツと目を覺ませば秋の末の事でザワ／＼と風も出て頻りに寒い心地がするフツと天を仰げば日は三竿の傾きとなつて居るサア大變と急に刎ね起き身繕ひをして一息に智頭の驛まで馳せ付けると出掛けたが道は一本徑で他に紛れもないからズン／＼行つたが慈に不思議な事は如何程往つても登る許りである夫から徑が段々狭ましくさくなる落日山の端に沒せ

んとして、向ふの溪よりフツと夕霧が湧き出て、廣がるると同時にチラ／＼として居た、太陽は何時の間にか西の山に隠れて仕舞ふた、此時は慥かに三里は來たに違ひないが、左すれば物見村よりは慥かに六七里は來たのである、夫に今一つ不思議なのは、朝八時頃、荷を擔ひた商人が一人、鎌と負枠を背負ふた女一人に出會ふた、以來終日人つ子一人に出會はぬのである、處で茲に最後の不思議な事は、今まで辿つて來た道がバツタリ無くなつて仕舞ふた、小笹、灌木、落葉が大木の間にありて、往先きは薄暗い、此は大變と思ひ直ぐに一町許り引返して見たれば、今まで來た路がある、其路に立つて段々考へて見たが、何處かで道を踏み迷ふたに違ひない、ヨシ／＼仕方がない、迷ふたら、元の正路に立戻は人間一生の務めだとは、是より逆戻りと出掛けた、其中に日はドツブリ暮れて仕舞ふ、霧は深くなる、明治の釋迦牟尼佛少々、狼狽の體である、背ひ暗みの黒白も知れず、足深りで下りて居る中、トウ／＼又マンマと本迷に迷ひ込んで仕舞つた、此處で凡二時間許りは右に往き、左に往き馳せ廻つたが、今度はドウしても徑が見つかからない、サ、是が若い人に注意

をする處だ、人間と云ふものは、貴賤賢凡、智愚、道俗の別なく、迷ふと云ふ事は、屹度あるもので有る、其時狼狽へると、狼狽へぬが道を得ると得ないの界である、迷ふた時は、人間の目や耳や總ての機關の働が十分ならざるもの故、狼狽れば、狼狽る程、彌迷ふて來る、ソコで斯る場合には、チャンと體も心も靜止して、腦髓を働かせぬやうにして、此の腦髓の力を養成し、さへすれば、或る期間を経過すれば、屹度回復して、更らに幾十倍の強猛な力を振り起すものである、夫には兼々云ふ、死の一事を決するのである、此れが極まれば、人間にも世の中にも何等の愚痴もないことになる、應主は早速此方法に取り掛つた、迷ふたから仕方がない、此の暗黒なる深山を自分の住居と定めて、先づ體でも休る事に仕やうと決心して、兎ある大木の下に場所を探りて、安心立命の處と定め、夫から此邊の山は、但州の大江山、落折峠等から續いた山脈なソ、テ、狼などが居ると云ふことだから、短刀を抜いて、其邊の木の枝を切り集めて、落葉をゴン／＼掻き集めて、マツチを出して、火を吹き付け、其上に生木の枝を段々打掛けて、大分火勢を起したから、先好しとドツカリ、其側らに坐り込

んで大安神の境界となつた處が夜は段々と更けて來る冷氣も段々増して來る其壯快言語に絶したものである經驗のある人は覺えが有うが深山で眞夜中になると色々想像の出來ぬことがある先づ今まで眞つ暗らでボンヤリ見えた山が俄かにズーツと明るくなつて山の形樹木の模様までよく見えるかと思ふと又たズーツと眞つ暗になる今度眞つ暗になつた時の暗らさは實に鼻の先きも分らぬやうになる夫から遙か向ふの幾層の山を隔てた谷川の水の音がザーツと恐ろしい程響くかと思ふと又たズーツと消え入る如く遠くなる此の二つの現象は餘程心細いものである此れは全く神經の作用でコンナとが出來るのである跡で咄を聞けば何れも同じことである獵師などが猪待ちなどに行くのが狂れると是れが無くなるソイである夫れから一時過ぎでも有うかと思ふ頃になると近く遠く色々の獸の聲や夜鳥の聲が聞える庵主は山に寝る事は初てゝあるから鹿の鳴聲を初めて聞いたのである随分淋しい聲がするものである之れをジツと辛棒して居ると辛棒の絶頂が過ぎて魂の落附きが出来たと見えて頻りに眠り

を催して來た永い午眠をして又た眠いはドウしたのかとも思ふたが大分奔走したのであるから疲れたのであらうツイ又トロと眠に就いた處がフト異様な音がしたやうだからバツと目を覺ますと何か獸らしいものが今其處に居たやうに思はれるハ、ア何かヤツて來て居たなと思ふと夜明け前の二時半か三時頃であるから朝嵐がザー／＼と吹き出して來た處が又遠く近く四方八方に何か礎でも投るやうにドシ／＼音がして大勢で責め寄せて來るやうな擬粧があるハ、ア是は何か山中の惡獸共が珍らしき客人と思ふてお見舞ひに來るのだなア好し庵主の絶體絶命であるから此の備前長船則光の短刀で目釘の續く丈け奮闘して見るのだと竊かに帯の結目をめめて後の大木を小楯に取りて十分に身構へして待つて居た處が風は一と息／＼に彌ザワ／＼と吹いて來る今の不思議の音は彌烈しくなつて來る何様暗夜の事で目先が分らぬからジツと心を落付けて目の力の有る限り光らせて待つて居れども近寄る様子が無い折柄何か頭に石の様な物を出し抜けに打付けられた庵主はハツと思ふて身構へしたら其石

が足元に落ちたやうだから、ソトツと身構を弛るめて、手探りに其處等を捜したら、手に降るものがあるから、取り上げて側らの篝火をホジクリて見れば、何んだ馬鹿々々しい小供の拳固見たやうな栗の實である。夫れから段々考へて見ると、昨夜來四方八方に、バタ／＼と猛獸の草木を押し分けて攻め寄せるやうな音のしたのは、此の栗の落ちるのではなかつたらうかと思ふて、又二三間先の柴の根子などを捜ぐれば、又た一つ見つけ出した。其中東天紅を帯び、間もなく曉となつて來たから、漸々四邊を見れば、其邊の樹木と云ふ大木は皆栗許りで、跡で聞けば、此邊の山脈は例の丹波栗と云ふ種類の物が到る處にある。由夫から其處等邊りを拾ひ集めたが、秋の末とて成熟して獨りで風の爲めに落ちた實計りで、中には驚く計りの大きい物がある。拾へば何程でも有るが、邪魔だから、旅行季一杯丈け詰め込み、先づ腹が減つて居るから、其栗を二ツ三ツ焼いて食つて飢を凌ぎ、夫から能く／＼昨夜來の事を考へて見ると、實に人にも咄されぬ見苦しき状態にて、兎や角身體の狼狽だけは僅かに制し得て、辛棒を仕たが、精神上の狼狽は猫に追たれた鼠の

如きものである。今少し造物に擲掬れたら、栗の實と眞劍の勝負したかも分らぬと思ふと、其の耻かしたるに物なく、天地無人の深山に只一人居へて是丈け耻かしくては人間界には行かれぬと思ふ位であつたが、又思ひ變へて昨日來造物が庵主を餘程面白い境遇に引入れて、好き教訓をして呉れたのである。此れより一生懸命に精神上の修養をしやうと決心して、夫からは此方から好んで其種の馬鹿なことを試みることにした。夫から此の迷路を幾多の辛棒と艱難をして雲州の勝山に出るまでに、又面白き辛棒談があるが、夫は次號に述ぶる事としよう。世間の人は強がり、と豪傑許りであるが、自分の恥になる事を差引いた豪傑許り、故色の生白き若い人の爲めに先づ庵主の身の上にある人の知らぬ恥かき咄しを一節書いて置く

第八棒

前回に述べた栗の實のお怪化に遭ふた翌日朝霧の中を立出で、段々下に向つて道を求めたが、ドウ云ふ譯か其の近邊十三四町四方許りの間には

山に登りても谷に下りても樵の路一筋無いのである。何様時間から考へても作州の物見村を距る七八里の山奥である上に昨夜來狐にでも魅せられたやうに深山幽谷の間を奔走したのであるから如何に深思熟考するも方角と云ふものが更に分らぬやうに成つた。夫から腹は減つて來るし辨當はなし。人里のある方角は分らず心細い事になつて來た折から空合が變になつて來て沛然と雨が降つて來た。素より雨宿りの家もないから大木の下に屈んで居て、フト考へ付いたから先づ旅行李の中から昨夜拾ひ集めた栗の實を取り出し、これを焼いて飢を凌がんと袂からマツチを出して見たら、只の三本しかない。夫も何だかジメ／＼して居る。夫から大木の蔭の方にある枯れつ葉を集め、火を付けんとするに、一本のマツチはマンマと遣り損んじ箱の藥の付いた紙が剝かれて仕舞ふた。二本目は兎や角火は付いたが、ドウシテも燃え付かぬ。三本目が命の瀬戸際、日本國中の八百萬の神々を念じて目を塞いで南無阿彌陀佛と云ふて摺つたら、火が付いたから直ぐに夫をマツチの箱に付けて、夫からエイヤツと枯葉に火を移した。其の火を又短刀で

切り落す。枝に焚き付ける困難は筆紙の能く盡くす處でない。庵主後年法螺で吹き付ける事は妙を得たが、生木に火を吹き付ける事は神佛の力を借らねば出來ぬ事である。強く吹けば火種を吹き飛ばす。弱く吹けば火が付かず、其吹加減は如何なる學者を呼んで來ても、技術家を聘しても、好き成績を得られぬと思ふ。夫から其の火の付までの辛棒は大變なものである。煙と云ふ恐ろしい封建政治の役人が、鑄刀で目と鼻を抉るやうな苛酷なものが、悉く自分の顔一面を蔽ふて、如何なる辛棒人でも堪へられた物でない。併し若し此の火を付け損じた時は、栗の實が焼けず、焼ければ命が繼げぬと云ふ問題で、満腔の熱心と神佛の冥助とで、兎や角火が燃える事になつた。夫から栗を焼いて腹を拵へ濡れた衣物を乾かし、尙ほ火種たるマツチが無くなつたから、栗の實を悉く焼いて行李に入れ、雨も歇んだから前途の方向を定めんと考へたが、別に仕方もないから最早死ぬ決心をして、命の續く丈け行くべし。其行く方角は積極的に山の高い方を目當にて行くのだと、エウ決心して夫から短刀で大きな杖を一本拵へて、反對に高い方に向つてズン／＼登り

始めた凡一時間も歩行したと思ふと火を焚いた跡がある其嬉しさ喻ふるに物なく何でも此邊には人の来た事のある處に違ひないと能く見れば昨夜庵主が火を焚いて夜明しをして栗の實のお怪化に出遭ふた處である夫から庵主は其大木の皮を短刀で削り剥がして左の文字を彫り付けた。

鎮西之勇士宿此處

の八字を纒かに留めたソコデ何でも此處に昨日登つて来るには低い方から来たからと思ひ低い方に向つて道を求めたら七八町も往くと道があつたソコデ聊か力を得て其道を下つたら又十町許りで道が三ツ辻になつて居るから茲で考へた何方へ行たものかと思ふたが往古源頼光が大江山の鬼退治の時行路に迷ひ杖を倒して方角を定めた小供の時乳母のお伽ぎ嘶しに聞いたから手に持つ杖を倒して見たら左の方に倒れたから其方に行く事に極めた此れが又た面白い嘶の種の初まりで庵主以外別段の辛棒録序開きである夫から其道をズン／＼と足に任せて行くと凡午後の三時頃道なら五六里も来たと思ふ處で左の深い谷の底に大砲の響きのやうな

音がする能く見れば丁度石炭の烟の様な黒雲が捲き上つて居る道が其の谷の方に行くべく付いて居る今更跡へ返る譯にも行かぬから其方へ意を決してズン／＼進んで往つたら其の谷底は秋の夕立の大雷雨である此時深山の夕立は谷底に電霆の響くことを發明した夫れを凌ぎ衝き切りて又少し山路を登らんとする右手に忽然として人家が一軒在るピツクリして能く見れば茅や木の皮で葺いた家根で確かに人の住む家である庵主は此を見極むると同時に全身電氣にでも打たれたやうに體が草臥れた實に人間は氣合許りで生きて居るものである事を知つた夫から其家の入口に立つて御免んなさいと云ふ聲と同時に出合ひ頭に顔を出したのが熊か人か分らぬやうな婆さんである庵主の驚きは素よりであるが其の婆さんの驚は大變なものでギヤツと聲を出して夫から徐ろに挨拶をして内に這入ると七十有餘とも見える爺父さんが寝て居るサモ苦しソナ體は病氣と見えるソコデ庵主は庭に立つて丁寧に道に迷ふた顛末を述べると兩人も安心したと見え其處へ腰掛けよと云ふから初めて落着き庵主の生國から旅

行の目的等も咄して、一宿を乞ふたら、快く承諾して呉れ草鞋を脱いで座敷か庭か辨別の付かぬやうな低い蓮敷の床に上つた時に秋の日の短かく、ドツブリと暮れて仕舞ふた素より行燈もなくランプもなく婆さん焚火をして、芋とサ、リとか云ふ草の實を煮き交せたものと、谷川魚のイブとか云ふもの、鹽漬けにしたものを、一疋爐で焼いて食はされた時の味さと其有難さは、今日思ひ出して決して忘れられぬのである。先年兄玉大將御存生の時、築地の瓢屋で晩食を伴にした時、干鮎の甘ま煮を食ふ時、フト庵主が此事を思ひ出し咄しを仕出したら、大將閣下坐ろに落涙をせられて、夜の十二時過ぎまで過ぎ越方の物語りに歸ることも忘れた事がある。即ち此の後の咄は丸で芝居に見る播州一の谷の山奥にありし鷲尾三郎の古事のやうである。扱て庵主が飯を食ふて仕舞ふか仕舞はぬ頃表がグワサク音がして這入て来たのは年頃三十四五歳許りに見ゆる女で、薪様のものを澤山背負ひ、手に竹籠を提げて居る。夫は此老夫婦の中に於ける娘である。其處で庵主の挨拶も濟み、老夫婦も段々咄しをする。娘は負ふたる荷物より取り出す山の

芋栗實様の物竹籠の中には山川に仕掛たる受け籠とかに入りたる川魚である。娘は草臥たる體もなく、庭で夫等の仕末をして居る中に、爺さん俄かに病氣の咳嗽が来て頻りに苦む。母子は細心敷介抱をする。庵主も見兼ねて容體を聞くと、此山中に来て十三年一度の病氣も無かりしが、フト一と月餘り前から病み付いて、一時全く平癒したが、一寸したる出獵の爲め更らに打臥し。昨今は助かるべうも見えぬとのことである。庵主は分らぬなりに脈を取れば、何でも熱も有りさうである。夫から庵主が國を出る時母が脊戸まで送つて来て、庵主が幼少よりの合ひ薬と云ふて厚き恵みに與へたる消毒丸といふ解熱劑があるから之れを與へ、又た庵主が聞き嚙りの醫療法で腹巻の木綿布を解いて、鹽湯に浸し爺さんの胸部と咽喉部にシツプをして、庵主も共其夜は徹夜をして介抱して遣つた處が其親子の喜びは譬ふるに物なく、爺さんは夜明頃より苦痛に疲れたか、サクと眠り、幾度かのシツプ取替も氣が付かぬ程、睡眠して翌日の九時過ぎまで寝たが、夫から熱も少し下がつたやうで精神も爽快しくなつて来て、晝頃より庵主三人爐邊の物語りに

ボツ／＼口を出して咄すやうになつて来た處が其日も朝からの大雨で前の谷川も一杯汎濫して濁流箭の如く漲り向ふの路に越すことも出来ぬから空しく其家の厄介になる。又夫婦三人は頻りに留めて此先き人家の村までは二里半許りありて同じ川を右に亘り左に渡りすることが七ツもある。秋になると三十日も交通杜絶であるところがあると云ふ仕方がないからトウ腰を落付けた夫から不斗此爺父さん親子の履歴を聞いたが夫は此家の前に拱把位の柏の木がある其前に丸石を一つ置いて花筒に野花が手向けてある庵主が其の困縁を聞いたが始まりで一宿の返禮に旅人の庵主が爲せる厚き介抱に感したる爺父さんはシツプの取替と食前に飲ます消毒丸のお辭儀とを中に挟んで語り出す物語りは大略コーデある。

此老爺父は元雲州松江の劍客文化十年に生れて姓を早見と云ふ歳十八の時より勤王愛國の志厚く天保三年彼の渡邊華山が海防事務官となりしを聞き之と交を結んで四方に遊説し同八年大鹽平八郎の亂を爲すや大に其間に奔走し幕府の嫌疑を受けて獄に投せらる。後獄を脱して江府に遊び嘉

永六年米國ハルリの浦賀に来るや慷慨止み難く幕府の因循を憤るの餘同志と謀り暗夜米艦に闖入して洋人を塵殺せんとし事現れて八町堀の獄に繋がる。安政二年の地震に牢獄の破壊と共に危く身を脱して水戸に奔り萬延元年櫻田の變に先づ數日佐幕黨の狙撃を受けて其友一人は斃れ己れは左肩に重傷を負ひ期年にして命を全ふするを得たり元治元年長州征伐の事起るや袂を投じ勤王の黨與を助けんとし道にして大阪に縛せられ長人の救によりて僅に身を脱するを得たり夫より郷國に歸りて身を潜むる中舊創再び破傷し三年の療養を藥泉に暮らせしが國家の禍亂は創痍と共に止み終に王政維新の大業を見るに至る然れども對世の慷慨は尙休まず見聞荐りに憤恨の心を躍らすと雖も創痍深く骨裏に入りて進退己が雄心に伍せず斷然として志を抛ち塵界俗流の交を絶ちて深山幽谷の間に逯逃し。鷹を壯年狩獵の地たる此溪峽に結んで出でず獨棲半歲の後其妻と女婿とを招きて茲に人間社會の行通を杜絶せり居る事二年にして明治九年の春に至り仄かに前原一誠の企謀あるを聞き一夜溪頭月白く泉聲靜かなるの

時徐ろに其の婿子を膝邊に招き舊友前原に對する一篇の手書を屬して曰く我壯年の時より頑鈍屢々行藏の機を失ひ許多度生死の地に入つても武運拙く事志に添はず君國の大事に寸功なく空しく痲疾の殘軀を提げて徒らに露命を覆載の間に繋ぐ慚愧此上やあるべき我れ世と交を絶つ茲に三年なるも天下の大勢は日に益々非なるを知る藩閥鄙流の浪士俄かに青雲の志を得て徒らに峨冠長衣の粧ひを爲すも其の卑近の眼光は忽ちに洋習物質の奇に眩惑せられて家國人心の裏面は已に道義の銷磨するを知らず聖運の興隆未だ民に偏ねからざるに閣臣の驕奢は早も廟堂に滿つ知友前原夙に惻々の志を提げて永く不平隱忍の地に立つ今や機熟し風雲に會して大いに爲す處あらんとす汝幼より天縁を以て我が婿となる奚んぞ我が志を紹いて一死國に報ゆるの事なかる可けんや且つ此一書を携へて前原に屬し彼の牙角を輔して我が神心を休せしめよ夢再生を思ふて笑ひを後世に遺す勿れと之れを聴くの婿子又た曠世の傑士なり只だ曰く諾徑ちに旅装を整へ別を其の双親に告げ去るに臨んで妻を顧みて曰く我れ今之

の小柏木を移して之れを門頭に植ゆ之れを以て汝に屬す汝且つ日暮の心を以て之れに侍せよ父命重きこと山の如し我が一諾又た萬鈞に齊し我性脆き事此の野花に似たり豈に碎けざるを得んや我心清き事此の溪流の如し豈に流れざるを得んや山中時に風雨の傷あり又た時に氷雪の艱あり其の父母に奉ずる最も細心を要す此の任を全ふする一に汝に有り春寒秋雨克く膚を冒す且つ心を留めて自から之れを愛せよと云ひ了つて遽然として出で去りしは朝暾既に遠峰の雪に映じ屋後の梅花溪鶯を迎へて綿蠻聲あるの時なり征人一たび去りて還らず鴻封雁信迹を絶ちて妻孥復た再び之れを語らず只だ時に賤娘が負薪に野花を折り添へて清泉と共に之れを柏木に供するを見るのみ人生夢幻の如し流梭茲に十裘褐今ま君に對して計らず門前の小柏木を話す老父豈に今昔の情に耐へざらんやと

以上は庵主が旅日記より抄録したものであるが之を聞いた庵主は只だボンヤリとした恐ろしい辛棒強い爺父さんも有ればあるものと思ひ憫れて仕舞ふた此の爺父さんは日本辛棒界の親玉と今日まで信じて居る夫よ

り庵主は三四日大雨に降り込められて、道を習ふて雲州の松江に出で伯州の倉吉に往き、因州の鳥取に廻つた時今は故人の山田信道と云ふ人が知事さんで、今の名古屋の知事さん深野君が警部長であつた面會して色々世話になりて大阪に出て来たのである。

第九棒

世の中に中毒と云ふものは、約て困つたものである。腐れ鮓を食ひ中毒の爲め全身に吹出物がしたり、アルコールに中毒して鼻の先きがイチゴのやうに成りたり、河豚を食ふて泡を吹いて死んだりするが、其中禪中毒と云ふものをして、難儀する患者は實に始末に困つたものである。庵主も此の病に罹つた患者の一人であるが、其の病症の経過は餘程不思議の兆候である。今幸棒録の仕舞がけに臨み一寸其の模様を書いて見よう。昔日庵主が禪は佛界にあらす、俗裏にありと云ふことを知つてから、商賣人となり、大阪神戸の間、在つて、獨逸船を借り、香港貿易を始めたが、下手鐵砲の魔昏れ當り

に、トン／＼拍子に儲かつたが、或る夏の土曜日に、運動券々浴衣掛けてステツキ一本の身軽な出立で、京都に遊びに行き、東山邊を漫行し、夫から南禪寺の瓢亭で、晝飯を食ひ、風斗叡山の方の田舎を歩行いて見ようと思ふて、田圃徑をズント、北東に向つて行つたが、トウ／＼叡山の麓の一乗寺村と云ふ處に行つたが、兎ある竹藪の陰に一軒の破れ寺がある、其の軒落ち、破れ門内などは大抵打倒れて、青叢四邊を圍み、秋ならぬのに、晝尙蟲の音囂しき有様である。庵主は風斗其處に行き掛り、其の寺の破れ工合が如何にも面白く、氣に入つたと見えて、何だか好い心持ちになつて、頻りに其の門内に進み入つた處が、寺の客殿とも覺しき庭の向ふに垣根が繞らしてある、中に大きい池があり、澤山蓮花が咲き、其廻りに異種の山吹が咲溢れて、其向ふの庭の隅より葎の中を潜りて、山水が潺々と流れて居る、夫から其客殿と云ふは、一寸次ぎの間付で、二三十疊もありさうな座敷で、縁側の根太も凸凹許りで、敷居も鴨居も満足な處はないと見える、其縁側の日當りの宜い處に、垢衣白髻の老僧が獨りで何かポツ／＼獨言を云ふて、本を乾して居る、其の側に黒い

溜め塗りの長持の剝げ班らになつたのが一棹ありて其長持には金色燦爛たる蒔繪で葵の大紋が付いて居る老僧其長持より段々本を取出して土用干をして居る其の本の結構さ悉く唐本らしく見えるが却々日本などでは滅多に見られぬ本許りである破垣越しに之れを見て居た庵主は何だか變な氣になつて來た第一破れ寺齋蒼たる山清泉蓮花山吹の花四邊の青叢蟲聲等の照應が荐りに可笑しな妙感を刺激して全身麻痺したようになつて見惚れて居たが何時の間にかズーッと其の老僧の處に這入つて行つて土用干の手傳を初めた處が離れて見たとは又格別實に其本は唐本許りて結構至極の禪書である又た其の東洋無比の珍書に見惚れて夢路に入つたような氣がして手傳ひながら其本に見惚れて仕舞ふた此見惚れたの續きは詰まり恍惚となつた事にて前後も辨へず三昧に入つて仕舞ふた又た面白きは其の老僧未知の俗人が進入して來て自分の側らに座し其の手傳をなすを別に恠む氣色もなく時々ジロ〜と庵主を片眈に見た丈けで相變らずブツ〜獨り言を云ふて本を干して居る其中に見上ぐる眼前の比叡山

腹に白い雲がフワ〜と掛つたら頼に冷氣を催してソヨ〜夏の夕昏の風が吹いて來たら前にある池中の蓮花が一輪バラ〜と落ちた此時老僧も庵主も期せずして此の面白き造物の演技を見惚れて居た暫らくにして老僧は何か思ひ出したように忽に膝を押へてヨツと立上り勝手の方に往たから庵主は又た其本を読み初めた稍々一時間もしたら其の老僧庵主の傍らに來てお容さん茶粥が出來升たお上りなさいと云ふ此れが老僧と口の交き初めである成程考へて見れば腹も減つて居るから有難と云ふて老僧の迹に尾いて厨の方に往たら汚ない缺け膳があつて其上に藤豆と南瓜の煮たのが一皿付いて居る夫から粥を老僧と二人で食ひ仕舞ふた時は日も西山に没してドツブリと暮れたのである老僧は直ぐに香奠や回向料の包み紙で張つた破れ行燈を點す庵主は其處にある小火鉢で蚊遣りを始めた之れから庵主と老僧は荐りに咄しを始めたが此寺は元徳川家の善提寺の一つで御維新以前は寺領も五百石付いて居たソ〜テ先々代の和尚は時の將軍様より召された時麻の衣に草鞋掛けで歩行をなし夫れに金紋先

き函を振らせて東海道を押し上り駿府に於て御目見へをして御家門大名列席の場所を堂々と盛者必衰の理を説き終に談義碧巖に及び彼の牛頭没馬頭同曹溪鏡裏絶塵埃打鼓看來君不見百花春到爲誰開の邊に至りし時は古稀の老翁音吐鐘の如く上様を初め一座の諸侯其學識の高邁と威徳の勁健なるに敬服し夫より年々秋の初めに召さるゝ事になつたこのことである此の高僧が寛政二年に遷化せられてから次の住持は資性病弱の間に終られたが世に知られたる大學者であつて今の和尚が十六歳の時に死に分れたソであるコンナ咄しを仕て居る中に向ふの山から月代がズーッと上つて来て見渡す青田萬畦の夜景は道心迷悟の界を照すの思ひをして只だモ一好い心持で仕様がなない夫から和尚さん居睡りを初めたから寢ませうと云ふと蚊が多いから手傳つて呉れいといふ庵主は其の蚊帳を見て驚いた先づ蚊帳の他の一面は大きい葵の紋の付いた幕が覆せ縫ひに縫ひ付けてあつて他の一方には南無阿彌陀佛の旗が三流れ許り縫付てある其他の方には禪の切れのような物やら打敷のような物やら蚊帳が破れるに

従つて和尚さん自分で縫ひ付けたのであるから引き釣り引張り蚊帳は片チンパのイビツになつて居る先づ蚊帳三分幕旗七分の縫分けの風呂敷を覆つて寝るのである和尚さん平氣なもので寝ると其儘高軒である庵主も何か考へて居たが終に又眠むつて仕舞ふた翌朝目を覺ました時は六時半頃で和尚さんは破壊した本堂で頻りにお経を讀んで居た此れを夢心地で聞いて居る庵主の心持は下ウデ有らう山中の破れ寺で一人の老僧が讀むお経は峯の嵐と泉の聲に和して心耳に澄み渡り郵便も電報も來ず音訪る人もなく功名利達の鬼に途はれた亡者の如く劍や針の山路の如き袈裟世界を血身泥になつて東西南北に馳け廻つて居る人間修羅場の有様とは全く別乾坤の淨土であると思ひつゝ起き上りて寢所を片付けて仕舞ふた頃和尚さんはお勤めを仕舞ふて來て共々朝飯を食ふ夫から又た土用干の方に取掛る本を讀む中々面白いコンナ事をして六七日居る中に或る日の晩方村の爺さん見たような者が來て和尚さんと何か咄しをして居る和尚さん頻りに點頭づいて居たがソコ法衣を引掛けて出て行つた夫から庵主

は一人になつて頻りに本を讀んで居るが日が昏れても知尙さん歸つて來ぬ仕方がないから火を燈して何か飯でも拵へようと思ふて厨の方をマゴマゴして居たら和尙さんニヨツコリ歸りて來た一人の百姓が送つ來て油揚げ飯やら色々の御馳走を持つて來た之れは和尙さんが法事に招ばれて往つたのである。夫から其夜の夜咄に和尙さんが云ふには貴君が不思議の因縁で此處に來たのは全く佛陀の引き合せて僅か數日の同棲は十年の鬱悶を齊し今日までお互に咄した事は半世勤修の道場を共にした思ひがある。貴君が學問に厚き志は直ぐに愚僧が尊敬となり愛慕となつて今は早や貴君と離別れることが甚だ心細く思ふのである。ソコデ茲に咄しがある。此の寺の末寺に芭蕉庵と云ふがある。此庵は芭蕉翁の開基であつて本尊は芭蕉翁行脚の姿である。此れは翁自作の木像を安置したものであるが此庵は不思議の事には昔日石川丈山と云ふ貴君見たような人が茲に修學し又梅田雲嶺と云ふ人も時々此處に來て書物を讀んだのである。夫れや是れやで里人の尊崇求めずして多く此庵に歩み運びつゝあるが今は此寺の衰微

とともに庵住の人もなく愚僧の心掛りは之れ一つである。何と貴君此の庵の住持となつては如何です。愚僧の寺は見らるゝ通りの貧寺で二七日の日は京の町家へ愚僧が托鉢に往くより外檀家も何も一軒もないが後住は愚僧の弟子で本年二十三歳になる小僧が今本山の檀林に修學に往つて居るから夫れに此の寺を譲る事になつて居るが芭蕉庵の事丈けは氣掛りで仕方がない折柄今日里の村長の家に法會に往つたら村の誰れ彼れが此の頃見慣れぬ若い坊さんが來て居らるゝがと尋ねられたから貴君の事を委しく咄したら其の人を芭蕉庵の住持にしてはと口を揃へて云ひ出したから愚僧も貴君と離別るゝ事が嫌な處ゆゑ直ぐに同意賛成をして來たがドウデあらうと云ふ庵主は其面白さ喩ふるに物なく元々禪中毒患者で今は其の病毒の發作中であるから云ふ事も爲る事も一切間違つて居る人間生れて雲水の行ひ樹下石上の業は強がら僧徒に限つた事ではない總ての俗人も心に悟らす身に覺えねども雲水境界に彷徨ひ樹下石上以上の爲業に苦しんで居るのである。予も全く俗界藻屑の中に流轉して時に血涙白汗の苦

みに沈淪して居る一人に相違ないから少しの氣保養に往成和尚を遣つて見ようと思ひ早速に引受け其翌日老僧と同道して芭蕉庵に行つたら村の百姓二三人来て色々手傳つて呉れ掃除も出来一寸疊替へも出来庵主が少少金を出して土鍋に七輪ザツト飯食道具も整ひ寺より一脚の經机と三四個の本箱を借りて其日の晩方はチャンと芭蕉庵の和尚さんが出来上つた夫から其晩には村の善男善女がゾロゾロ參詣をして来るから老僧一場の道話を仕た處が村の者が庵主へも頻りに道話を求むるから庵主は越後の良寛上人が咄した人生無常迅速の咄を春蝶野花の譬へに引いて咄したら爺婆の連中は甚く面白く感動したと見え毎晩々々日暮れになると今一度今一度と云ふて満員である夫から隣村隣村へと咄し傳へてワイ〜と押し掛ける之れは溜らぬと思ふて居る處に此處より一里許りある村にある交番の巡査がヒョソコリ来て無鑑札の坊主で住持など觸れ込み説教などをして居るのは怪敷からぬと云ふので中止解散を命じられた夫から庵主は全く老僧に頼まれた家番であると云ふので無事に済みはしたが警察だ

の巡査など云ふものは餘程色消しの者で何でも人の遊興の邪魔する終に犬にでも噛まる野暮な者に出来上つて居るコンナ木刀の前には釋迦も孔子も一文の値打もなく庵主などは正に犬の糞同様に取扱つたのである併し其以後は至極閑靜になつて毎日讀書三昧に入りて庵主半世の觀念は此處に定つたと云ふても好いが此寺は芭蕉翁が心血を濺いで道學を勤修した處であるが庭の隅に茶の水と云ふ古井がある其側に苔に蒸された石が立つて居る能く見れば左の文字が讀まれる

うきわれを淋しがらせよ閑古鳥

此の一句で此庵を閑古庵とも云ふさうである又其右手の庭の真中に大きい石を立て左の文字が彫り附けてある

西と見えて日は入にけり春の海

此二つでも此の場所の如何に閑雅なるか分るのである夫から此所に三ヶ月位隠遁して居たが茲に大騒動が持ち上つて来たのは庵主が大坂に殘して置いた手下の者共である二三ヶ月前の土曜日に翌日の日曜を見當

てに遊歩にとて出掛けたなりに皆目行衛不明となつたので初めは心當りを捜がし、段々警察の手まで借りて、捜索を盡して居る中不幸なこともあるもので、其借りて居た獨逸船が五島沖で沈没し、海上保険に不完全な事があつて、多年の商運一時に崩潰し、銀行の取付けには遭ふ借金には責めらるゝ。餘程奮闘は仕たソ一ダが、終に城明け渡ししの悲境に陥つたのである。之れは庵主が大坂に居ても、此の天災は免れ得られぬのであるが、禪中毒で高歩きする蟹の歸る穴は打壞はされて無くなつたのである。夫はやつとの思ひで探し當てゝ来た一人の手代の咄しで分つたのである。庵主は之れは好い鹽梅だ此れで清々して此れから本當の芭蕉庵主と成れるなど、内心喜んで居たが、業因身に積りて生れ来た庵主は却々ソ一行かぬのである。其手代が澤山持つて来た手紙を順々に見て居る中、東京に出して居つた手先の者の急報として、吾日本帝國は政府の無謀と専横との爲めに忽ちに暗黒界となるべき實現を認めたのである。庵主は其手代が歸つた跡で沈思瞑目して考へて居たが、何時の間にもやら手に持つて居た珠数をブツリと切つたのである。

此時まで禪中毒の爲め所有視聽を鎖ざされて居た夢が初めてバアツと醒めて、風斗真人間になつたのである。夫から直ぐに全身の活動が初まり、其老僧に事態を咄し、白無垢一貫で飛び出し、直ぐに大谷の停車場に往き、大津に出て湖水を乗切り、長濱に出て、名古屋まで汽車に乗り、熱田まで往つたら、錢が一文もない丁度其處に演習から歸る陸軍の將校が休んで居るのを取つ捕いて、五十錢を借り、四日市に出て、濱邊に往つたら、東海丸と云ふ船が碇を擧げて居るから、夫れに無切符で乗り込み、横濱に着いて、永年心易き船宿の山崎屋啓二と云ふを呼び、船賃を拂はせ、白無垢の法衣を脱いで、衣服を拵へて貰ひ、小遣錢を借りて東京に乗り込み、阿修羅王の荒れたる如く活動をして、其の困難は半年許りの間に喰ひ止めたが、今に横濱の山崎屋には、庵主が脱ぎ捨てた法衣を保存して、時々其家内が其時の咄をするには、庵主も閉口である。是れは一場の禪中毒の物語りであるが、其裏面に伏在する辛棒と云ふものは、決して尋常でないものである。斯る馬鹿氣た行爲は、辛棒に辛棒を仕抜いた上句で無ければ、コンナ滅法な仕事を水の流るゝ様には出来ぬの

である。今時の若い人は、祖先傳來の臆病に生れ付の意氣地なしを加へ其上臆病の學問許りして、少しの我慢辛棒でも逃がる。工夫許りして居るからトウトウ下宿屋の下女に喉をべめられて名譽を墮し上句の果てが死ぬ苦みをして、取つた卒業免狀が三十圓にも買れぬ事になる。コンナ勇氣のない者が世の中に蛆虫程湧いて居るのである。皆さん餘程氣を付て辛棒と云ふものを本式でせぬと、折角の生存が皆無駄事になるのである。

第十棒

庵主は讀者が寛容答めざるに乗じて天下無双の惡文を草し、已に第九棒まで振り廻して讀者を惱まし、今や少々疲勞の體となりたり、何にせよ天下無二の俗物好きの上に、庵主本人が俗志俗魂の權化か、自分さへ疑ふ程の代物と來て居るから、其の交遊は所謂天下の俗物を糾合する一種の社會主義の品性を備へて居るから、庵主の家は俗物の問屋と云ふも差支へなき位なり、毎日訪ひ來る人は強請乞食、書生浪人、藝者、藝人、茶屋の唄山師、詐偽師、烏

賊様師、職人、商人、坊主、神主、醫師、易者等より、博徒、泥棒の兇狀持より、持逃げ引負ひの會社員、夫より、事業家、銀行家、學者、教員、諸役人、官吏、華族に至るまで、各階級に亘つた人々が、庵主の馬鹿を慰みに、一應づつは、揶揄に、立寄蔭の地獄尊引切りもなく、吾が顔を撫でらるゝのを喜んで、交はる事に會ふ事に、少なき日に二三十、多き日には三四十の人には、屹度面會する故に、如何に氣澤山に生れ付いたる庵主でも、晝過ぎる頃になると、藝者に振られた駄羅助が氣の抜けたシャンパンに酔ふたような顔になつて、茫然として仕舞ふのである。其處に庵主には、借金取より恐ろしい、サンデーの原稿掛りが責め寄せて、サア書け、モー書けと、嚴促らるゝ苦痛さに、ヤット持つ筆は千鈞よりも重き氣で、引摺るやうな文章を塗擦り廻して、渡すのは何時も一時間半位の出來事故持つて生れた頑鈍は、並ぶる文字の其中に遺憾もなく發揮して、長々敷く搔く恥を、ジツト耐へる辛棒は何より辛苦い事である。於是庵主は漸々の辛棒で漕ぎ付けた此の十棒にて、讀者に暫しの休息を與ふる序に、庵主も亦た一息入れんと相談が整ふ今日の埋草に、辛棒録の結末を付ける事

とはなしたるなり。

前來より述ぶるが如く、辛棒なるものは人間百功の基にして之れなくんば貧富貴賤智愚賢凡の差別なく、難易大小の事業とも盡く成功を見る能はざるもの故、青年諸君は何でも庵主の云ふことを疑はずに願る積極的に此の辛棒學は勉強せねばならぬ。耶穌は十字架までの辛棒を漕付けたればこそ歐大陸道徳の祖神となり、釋迦は檀特雪山の辛棒をしたればこそ無爲の正覺を得て、世界大多數の信者を支配し、孔子は陣蔡の辛棒までなしたればこそ東洋百世に教義を垂れ、兵隊は衾霜枕戟の辛棒をすればこそ大將元帥となり、腰辨は阿諛叩頭の辛棒をすればこそ次官大臣に經登り、其他銀行家はアイヌ的を辛棒して、利益を壟斷し、事業家は泡沫的危險を辛棒して、權利を掴み、醫者は殺人を辛棒して、博士たるの經驗を得、學生は謎的試験のツ突き當てを辛棒して免狀を貰ひ、茶屋藝者屋は鼻下長馬鹿息子の引摺倒しを辛棒して身代を拵へ、藝人辯問は下手糞煽り立を辛棒して御祝儀を貰ひ、舞妓は姉妹の尻爪利を辛棒して一本になる等事の善惡と業の醜美は措い

て問はず此辛棒無りせば世の中は只だ平々凡々として社會變化の狀態を寫さず、彼の下手の描いたる鯉の瀧登りの如く、土管の口に素麵を注入すると間違られ如何なる鑑識を以て見るも面白くなきこと夥しきものなり、庵主之れを師に聽く曰く

智にして能く移らんより、寧ろ愚にして守るに如かず。

と之れは馬鹿にして辛棒せよと云ふ教へである人間と云ふものは元々弱い動物にて世間に馬鹿と云れようより、利巧だと云はれたい、又た詰らぬ仕事をして居る處に甘い仕事に側らに有れば、其方に手を出して見たいものである。其處が面白い考へ處である。此の馬鹿と詰まらぬ方に行くのには多數の人が嫌やがる事だから、競争者が少ない競争者の少ない事には妨害も少ない妨害も少ないことは成功するものである。其處が辛棒處である昔日庵主と同様政治破戸の親友が二人あつた庵主と三人とも東京で非常の困難をして、三人で下宿屋に集り評議を始めた甲は曰く、此れでは兎ても詰まらぬから種々手筈を求めて、官吏に成らうでないかと云ふと、乙は曰く、官

吏は良くない事業家になると云ふ。庵主は兩方とも不賛成だ。現状維持が良
いと云ふ。三人各議論が纏らず皆々離れ〜となりて仕舞ふたが、十年許り
の間に甲は官吏に成り遂げて、年俸四千圓許り貰ふやうになつた。處が元々
智にして移る男だから、年は取る家族は増へる。立身の前途は見え抜いて居
るから、又色々工夫して辭職の上、或る會社の重役となつたが、素より經驗の
ない事だから、生き馬の目を抜く數多の社員に馬鹿にされて、大穴を明け、會
社破産の責任が一身に係り、名實共に保たれぬ事になるのを、日夜苦悶して
其處を塗擦り、此處を塗擦り、三年の間防衛した苦勞は實に憫察に餘り有る
のである。愈々悪手段の上塗りを仕て、露顯したらば、縲絏の辱めを免れ得な
いと云ふを知つて、毒を呑んで死んで仕舞ふた。庵主が數回の忠告を聞か
なかつたから、其一週間に庵主は其遺子に前の恩師の訓戒を書いて遣つた。其
子は夫れを今掛け物にして、此の辛棒學を勉強して居る。夫から今一人の乙
は、二年許りの中に、或る紳士の手に代に住み込み、五六年にして獨立し、二三の
會社を創立し、權利券の初まりにウンと爲占めて、夫れからトン〜拍子に

株で儲けて、一時は三百萬圓位は儘かに持つて居た。其の時にも色々親切に
事業を勧め、呉れたが、馬鹿學卒業の庵主は感にして守もるに如かず〜
許り云ふて居たところが、其の男相當の學問もあるから、少しは變つた事
も爲るかと思つて居たら、無學文盲の我利我利商人が金を儲けた行爲と同じ
事を爲た。其紋切形は第一非常の粗服をする男であつたが、忽ち美服家とな
り、金時計などブラ下げた。夫から堅氣な男であつたが、料理屋待合に入
り、酒色の慾を満たして來た。夫から藝者を受け出して、妾宅を構へた。清涼の
地に別莊を拵へた。夫から眞ッ黒き缺け碗の如きものを三四千圓も出して
買ふて、苦き茶を掻き交せて飲み出した。其次は眞ッ黒き暗み夜に、牛を引
き出した。やうな掛け物を、一幅五六千圓で買ふて、床の間に掛けて、煙脂下
つた。其次がドン詰りで、妾宅に居て電話で株相場を初めた。此れ丈けより、外
程の精密な調査をしても、履歴は無いのである。去る三十四年頃、人の咄に病
氣して居ると聞いたから、庵主見舞に行つたら、東京の中央から三里許りあ
る片田舎に引込み、妻に死なれ一人の悴も死んで、十七になる盲目の娘と、伊

豆の田舎から来た下婢を妾として三人暮して軒傾ける狭まい家に寝て居た病氣は大した事はないが兎角不氣分で食物が進まず時々胸先きが痛んで苦痛すると云ふて居た庵主は能く構らい能く慰めて米國に立つて行たら其の留守に胃痛で死んで仕舞ふたさうだ歸つて来て色々跡の世話をした其の娘は今田舎で琴の師匠をして居るさうで年始状だけは送つて居る、サアソコデ一人残つた庵主は、ドウダと云へば小供揚句の時田舎で兒童に本を教へて三圓五十錢の金を半年許り貰ふた外は今日まで地方税も國庫も月給と云ふものは一文も貰はず昔日の馬鹿な其日庵は今日も馬鹿な其日庵である、昔日の貧乏な其日庵は今日も貧乏な其日庵である、只だ昔日と變りたものは借金の増えたのと悪口が上手になつたのと悪友が多くなつた丈けである徒らに生て来た證據は飯を空氣と共に食ひ時々大きな欠伸びと屁を垂れて居る許りだ、古語に曰く生物に餌絶えずと、越後の良寛上人と云ふ禪者の句に、

焚程は風がもて来る落葉かな

辛棒と云ふものは變らぬ事を云ふもので、ヨイシヨ来たギツチヨンくと見る事聞く事毎に變る者は辛棒人でない庵主は今ま雨雲低き秋の夜に、庭の干草に鳴く蟲の亂れ競へる聲々に誘ひ出されし古事を物悲しくも思ひ来て窓洩る風に燈の幾度となく瞬くを掻立てつゝも筆を馳せにき

借金譚

第一席

エ、一席伺ひ升借りの世の借りの住居に借り枕借りて世渡る慣ひこそ
 盧生が夢の五十年魂膽の間に夢覺めてと古き文句にもムリ升るが寔によ
 く申したもので人間と云ふ奴は大きな顔許りして居り升が大抵借りて生
 きて居る奴許りでムリ升金持に智慧の有る奴が無く學者に金の有る奴が
 無く權勢家に膽力の有る奴が無いのは古今の通例でムリ升して大抵金持
 は内所で智慧を借り學者は内所で金を借り權勢家は内所で助けを借りて
 居り升其他國家でも人民でも借りと云ふものゝ無いものは殆んど有るま
 いと思ひ升只だ其借り方の上手と下手がある丈けで借りると云ふことは
 人間の天性かと思ひ升庵主などは幼少より此の天理を辨へまして随分靈
 妙の手段を盡しまして所有方面を借り盡し升たが上には上のあるもので、

此に恐ろしき借り方の名人が現出れ升た夫はサンデーと云ふ雜誌屋でム
 リ升此の雜誌屋も何れ人間の天性に洩れぬ一文無し素寒貧野郎の寄り
 集りと思ひ升が初め金を借せと云ふて來ましたから金は無いと云ひ升と
 夫なら智慧を借せと云ひます智慧も無いと云ひ升と夫なら一寸手を借せ
 顔を借せと云ひ升庵主も少し困り升て手も無い顔も無いと云ひ升と手が
 無くて何で箸を取りて飯を食ふ顔が無くて何で見當を付けて歩くと云
 ひ升からグット閉口してヤツトのこと飯を食ふ手や見當を付くる顔は
 有るが自身に入用だから貸すことが出來ぬと云ひ升と夫なら仕方がない
 がお前さんは若い時から非常に恥を擡いた經歷が澤山あると云ふことを
 聞いたから其の恥を貸して呉れお前さんが已に擡いて仕舞ふた恥は手や
 顔と違ふて今更入用も有るまいから夫を貸して呉れと云ひ升恐ろしい押
 の強い奴も有れば有るものでソ一云へばソ一云ふと始末に付かぬ糞理詰
 めを云ふて借りる者に事を缺いて思ひも寄らぬ擡いた恥を貸せと強談す
 るに至りては實に物借の親玉とも云ふべしと惘れ升たがソ一なりては仕

方がない何にするか知らぬが已に掻いて仕舞ふた恥が役に立つもので
 もないマ、ヨ貸すと云ふて此の疫病の神を逃るゝの外仕方ないと思ひ自
 分の恥を貸すと云ふてドウするか知らぬが役に立つなら貸しても遣らう
 が人の恥を借りて何んとすると云ひ升と有り難い〜と強く禮を云ふて
 扱て云ふにはお前さんは若いときから咄しにならぬ下手義太夫を語りて
 一家親類召し使ひ知人朋友居候藝者藝人茶屋の噴出入の職人車夫馬丁に
 至るまで天下の所有階級の人類を惱まし眩暈立開み頭痛疝瘕溜飲嘔吐腹
 痛下痢の諸病を起さしめ終に悪罵冷嘲の界を越えて居眠り欠伸の極猛烈
 の決心をなして奮然怒りて歸るに至るまで赤恥を掻いたること普く天下
 の知るところなり夫れ物極致を究めて始めて効あり下手義太夫も茲に至
 たりて一片の興味あるを知るべしドウカ其のお前の義太夫と云ふものゝ
 顛末を筆記して我がサンデー紙上に載せて呉れよ若し其の記事の爲めに
 我雜誌の幾部を賣れ高に増すに至らば恰も金を借り智恵を借り手を借り
 顔を借るに齊しからうと思ふ何んでもかんでも云ひ出したが男の意地是

非とも遣つて呉れよと責め付けられ飛んでも無い下手將棋の雪隠詰めに
 會ふて叶はぬ筆で無覺東も義太夫論數篇を書きこしたらマダ筆も擱かな
 い中に又遣つて来て今度は刀劍譚だ庵主は十六歳から刀劍を弄り襤褸買
 ひの名天下に嘖々たり其の四苦尻譚一入面白かるべしザ一遣れモ一書け
 と責め立てられ赤錆ならぬ刀劍で身を切りて出る赤恥を書き了らぬに又
 來り今度は借金譚だ庵主は無位無官無職無業にして一世に跋扈し道樂の
 有り丈けを爲し法螺の有り丈けを吹き人を困らせ世を惑はす多くの不成
 業者食詰立ちん坊乞食は申すに及ばす不孝不貞の不始末者や斬り取り強
 盗巾着切り明き巢覗ひや追ひ落しの兇狀持に至るまで手當り次第に掻き
 集め私立感化の假説説法に其の日を送り其他貧乏老爺の喘息や破れ書生
 の肺病まで彌が上に背負ひ込んで馬鹿世話の有り丈けを焼く之れ元來一
 文無しにて出來ることでない夫れ人生業なくして飯の食へる筈なく空飛
 ぶ鳥も秋の田に落穂を拾ふ勤めあり主なき市の瘦せ犬も家毎の厨の棄て
 餌食腹を肥やすの働ある庵主に限り昔より金の生る樹を植ゑもせず黄金

涌く地を持ちもせず左なくば夜なく富限者の屋壁を切るの外道なし必
 す若き昔より多くの人を借り倒し云ふに云はれぬ赤恥を掻き盡したに違
 ひない夫れが一番面白い何でも早いが良いものだ頼むくと煽られて當
 らぬ謎なら兎も角もマツ黒鵠を射抜かれて今更シタバタ辭むも卑怯と溢
 溢承知はし升たが何様思ひ出すさへ面目ないこと許りにて書くも喋舌る
 も氣極りが悪く生れ付いたる酒蛙つくも甚だ迷惑致し升たが思へば之れ
 も罪滅ぼし盛よ三度笠横つちよに冠れ人間知死期の道中も残り少々の日
 暮れ時此の上恥の時まで登り詰めてもモ一僅か高の知れたる端田路笑は
 ば笑へ今日までも身を包むなる赤合羽剣ね除けてこそ走り書き恥を裸體
 の懺悔坊と茲に漸々決心を致し升て彌次席より借金譚の本文をお喋舌
 り致すでムりませう。

第一一席

エー引續き伺升談に三歳兒の根性百歳までと稱揚て申せば梅檀は嫩よ

り芳ばしとムり升して庵主は此の借金と申すことに付ては誠に資性の宜
 い方で生れ落ちて初めて人の金を借り升したのは十一歳の時で慥か明治
 六七年の頃でムり升て刈り蒺と亂れし御代も漸くに廢藩置縣の大詔に封
 建三百年の制度は崩れ士族と云ふものは皆な歸農の生活をするに相
 成庵主が七歳の時に父は城下より十二三里もある片田舎に轉住を致し升
 たが庵主の家は小侍には似合はぬ工面の宜い家で別に困ることも無く暮
 して居り升たが或る時庵主の友達に初太郎と申升て歳が十三で極く發明
 な兒がムい升た之れは矢張り同藩の侍の子で此の親爺は早くから商人に
 成り升て古道具店を出して居り升た處が此子の母は早く世を去り年若き
 繼母の手に育てられ幼少より人も哀れむ程の冷酷な家庭に生ひ立つて來
 たのでムい升が或る時此の初ちやんが父の云付で此の土地で造り醬油屋
 の隠居が其の店で買ふた大きな花瓶を持つて行くのに路にて出會ひ無理
 に勧め水泳ぎに連れて行き升た處が此の花瓶と共に醬油屋に届くべき
 二圓のお利錢を何處で落したか無くし升たサー大變二人で青くなりて搜

し升たが皆目分らない之れが若し知れぬ時は初ちやんが又たドノ位お母さんに苛遇らるゝか知れないと子供心に泣き出さうに心配を致し升て智恵の有り丈けを絞りに工夫し升たが何とも仕方が無い一方初ちやんが顔を見升すと只だ途方に暮れて豆粒の如き涙を睫毛に溜めて居り升から腸の裂ける程同情に耐へず百計盡きて後の一計を案じ出したのは一身を犠牲に供して貳圓の金を借ることを考へました其處が子供で家に歸りて母にでも貰へば好かりしに其事には氣が付かず只だ其の場で金を拵へると斗りに心を奪はれ升て一つの工夫を付け升た夫れは直き側にある庵主等が習字の師匠の寺の和尚さんに借りることである然るになにか動機が無ければ貸して呉れまいと思ひ色々工夫の末又一策を決し庵主が手習友達の彼の醤油屋隠居の孫に當る金ちやんと云ふ十二歳になる子を呼んで來升した而して此の金ちやんに事の顛末を委敷咄し初ちやんが又たお母さんに苛遇めらるゝことを申升と此金ちやん非常の正直者で初ちやんより先きに泣き出さうな顔をして同情して居り升ソコで庵主は子供心で一

生懸命でムい升から一大決心を致し升て彼の初ちやんが持つて居る花瓶を其寺の門の敷石へ打ち付け粉な微塵に打割り升て初ちやんに大聲を上げて泣けと命じ升た處が初ちやんは先刻から泣きたくて堪らぬ處だからアツト泣出し升た夫れに連れて金ちやんも無條件盲從的に泣き出し升た庵主も少し泣きたくなり升たが此の事件を落着せしむる責任があるのでジツト辛棒して直ぐに寺に行き初ちやんが花瓶を打割り升て又たお母さんに叱られ升から花瓶代二圓貸して下さい私が跡で母に貰つてお返し仕ますからと云ふと和尚さんは初ちやんが可哀想なことを知りて居り升から直ぐに貸して呉れ升た夫れから金ちやんには此花瓶を初ちやんが持つて來る途中のを私が落して割り升たと云ふて二圓の剩錢を添へてお祖父さんに泣いて謝まれと教へ庵主は家に歸りてお母さんに二圓の金を貰つて來て和尚さんに返すからと懇々教へ升た處が兩人とも克く合點して一町斗りの醬油屋に行き升たが一向返つて來ませぬ庵主心配でなりませぬから見に行き升とお祖父さん可愛い孫の粗勿故色々云ひ慰め干柿の味まさう

のを三ッ宛與へて居ました夫から兩人寺の方に歩いて来て始めて笑ひ顔をして庵主にも干柿二ツを分配し升たから三人で門内の觀音様のお堂で食ひ升て今迄の心配はサラリと消えて嬉しさの餘り何もかも打忘る角力を取り鬼ゴツ子をして遊んで居ましたら其處へニユツと和尚さんが遣つて來升て庵主等三人を捕獲へて怖ろしい權幕で詰問します貴様等は三人で噓を吐いたなと責め立てられ金ちやんの奴が一番意氣地無しで庵主から習はつたと皆んな喋舌て仕舞いましたからサー大變和尚さんは非常に怒りて直ぐに寺男を馳らせて庵主の父を始め初ちやんの父金ちやんのお祖父さんも呼付けられて子供の育て方に十分脂を取られて居升たが其の中で庵主が一番重罪で家に連れ歸られ父母とも泣いて折檻を致し三日間倉に入れられ禁錮の身となり握飯二ツ宛で命を繋ぎ升たが此時程手強き折檻を受けたことはムリ升せぬ誠に恐れ入り升すが此の餘談に一寸と面白

いお咄しがムい升序ながらお慰に申上げ升此の和尚さん實に見掛けは怖い人でムい升たが其の心は中々親切な性質にて九州の彦山寶満山の天台

宗僧侶の中に學識高邁の修験者でムい升た由で庵主の父などが藩中で小學者の顔でムい升たが此坊さんには十分尊敬して居り升た事を跡で聞き升た扱て此の頃までは庵主も斯の如き尊き高僧と存じ升せぬから總て馬鹿にして居り升たが坊さんは庵主が抜群の惡徒ら小僧なるを何と思ふたか非常に愛して呉れまして父と相談の上寺に預ることになり升た夫から夜になると腰を打たせ肩を揉ませなどする片手間に色々學問上のことや又人間の心得になる咄しをして聞かせて呉れます故庵主は中々面白き事に思ふて居升たが此坊さんは若い時から先達の三度もして大峰入をした山伏でムい升て其學問の爲め身心不動の境界を得て教へる事も實に面白ふムい升或る時此坊さん庵主に申升には山伏が法螺の貝を吹く譯は己れの諸願をなすに當り先づ捨身奉佛の魂を極め如何なる難行苦行をするも微塵も撓ゆむ心なく飽迄も所願を貫く時此の法螺の貝を持ち出し太陽三竿の角度に眼を注ぎ足の蹠を揃へて其の拇指に滿身の力を集め不動直立の姿をなして始めて全身の力の有限りを込めて之れを吹き立てる此

の爲めには、息き盡きて死するも構はぬと云ふ決心で吹き立てる時は、上は三十三天の諸佛を驚かし奉り下は八萬奈落の地神を鎮め其外王法佛法に、障礙をなすもの善根衆生に害をなすもの悉く懾伏せざることなし故に此の法螺の貝が、本當に吹けたらば天下に少しも畏るゝ事はなきものなりと云ひ升から庵主は其法螺の貝を見せて貰ひ升た處が大中小と三つムリ升一番大きいやつは赤ン坊を寝せた位ムリ升て小チャイやつは二升徳利位に見え升和尚さん其翌朝から此の小チャイやつを吹て見よと云ひ升から吹方を習つて吹て見升すと天性の法螺吹きと見え升して大變な音が致升して自分にも耳が潰れるかと思ふ位でムリ升和尚さん強く感心致し升て段々上達して一と月半斗りで一番大きいやつに息が入るやうになり升した此大きいやつは大變にて實に命掛けでムリ升庵主は三度斗りは氣が遠くなりて、お飯も何も戴かれ升せぬことになり升偶々息が入れば、ブーワブーワと音がする斗りで彼の耳の裂けるやうの響は中々致しませぬ、ソコで和尚さんが云ふには、此の大きいやつが吹けねば駄目だ、此は正護と云ひて

深山幽谷に入りて之れを吹き悪鬼外道を三千魔界の外に走らせ如何なる嶮山惡所も正法佛界となし了はんぬべきものである、此の貝が吹ける時は、汝の全身至極の強壯にて精神爽かに宇宙に満つるの時なり、サ一熱心に遣つて見よと云ひ升から、ソナナ六ヶ敷い事は兎も角も吹けぬのが悔しいから命掛けで吹き升た處が、丁度一週間の朝に至り大變な音がして目が暗むかと思ひ升た和尚さん飛んで起きて来て感心く、實は此の法螺に本當に息の入りましたものは今日までない我等も吹くことは吹いたが、先刻の様な息は、兎ても這入らぬ感心々々と譽めます、夫から毎朝吹き升と少しの呼吸で、段々能く吹けて來升て後には大得意となり升た之から友達が庵主の事を法螺丸と申升から庵主は之を名譽の稱號として自分にも唱へて居りました處が、其後段々生長して東京へ參り升てから新聞屋が庵主のことを法螺丸と書立升から新聞屋も感心だ、庵主の隱藝を早くも知りて譽めるのだと思ふて居ましたら、或る親切な友達が夫は譽めるのではない、東京では嘘を吐くことを法螺吹と云ふ、貴様を嘘吐きと云ふのだと知して呉れ升たから

夫は大變な間違だ嘘を吐くと法螺の貝を吹くのと同じことにするのは面白くない嘘を吐くのは新聞屋の方が問屋で嘘を吐いて飯を食ふのは新聞屋斗りて人を傷け世を欺き風俗を潰亂し人心を毒するも己れの新聞さへ賣れれば更らに頓着なく大きな顔をして商賣をして行くのは天下新聞屋の外ムリ升せぬドンナ間違を書いても徳義なく恥辱なく一切済まぬ氣の毒なと思ふ考なく總ての社會を傷けた儘流れ川に小便を放たやうにサツサツと遣つて行くのは新聞屋の本領でムい升が夫れで居て庵主を嘘吐と吹聴するのは糞へ買が味噌屋を同業と思ふのと同じことでムリ升併し折角新聞屋がソー云ふて呉れ升から試みぬも失禮と思ひ升して、チオイチオイ嘘を吐いて試みて見升たが此の嘘の六ヶ敷いことは中々法螺の貝を吹く位のものではムリ升せぬ嘘を吐いた響が天地山嶽をまで動かすには大抵の決心では出来ませぬ第一嘘を吐く丈けの決心と信用と學問と力量と資本とが、チャンと備はらねばドンナ面白くない嘘を吐升ても人が聞いて呉れ升せぬ何分修業中の嘘吐でお耳だるい處は幾重にも御容赦を願ひ升一寸嘘

吐き放螺吹の間違の段を御披露致し置升餘談を申上げ升て誠に恐れ入り升が是より追々借金譚の本文に取り掛り升から御評判宜しなに御引立て願ひ升

第三席

エ、伺升天に風雨寒暄の變あり地に春夏秋冬の候あり國の治亂興廢は人の盛衰榮枯に相伴ふて歴史の彩を花やかに致しまするが吾國も大治天承の間平家の勢ひ漸くに形をなし保元平治の間に至りて源平の兩氏權を朝廷の中に争ひ最とい盛榮を極めし源氏は衰へ平家は大風砂を捲くの勢を以て滿天下に蔓こり奉ずる所の位は人臣を極め受くる所の田園は天下の半を占め升たが此の榮花の夢も僅かに二十三年治承三年己亥重盛の薨去に繼いで翌年三月源頼政高倉の宮の令旨を奉じて平家追討を謀りしを導火線と致し升て頼朝義仲相繼いで義兵を擧げ文治元年二月には義經平家を屋島に破り三月之れを壇浦に亡ぼし建久三年庚戌には頼朝征夷大將

軍となり、一度瀕府を鎌倉に開き升てより天下暫く平定するに似たりと雖も、道正しからず政疎にして徳子孫に及ばず日ならずして骨肉相害なひ故親相侵し、北條氏此の間に乘じて奸謀手を下さずして血脈を滅し、泰時時頼の賢に依りて僅かに九代の權を保つも高時の頑蒙は忽ちにして祖業を殞とし、足利政權を握りて十三代に至れども、隆亂一日も止む時なく、將軍義昭に至りて英雄四方に崛起し、終に尾州の邊城に起りし信長の爲めに亡ぼされ、天正元年七月立秋の露と消え果て升た信長の光秀に弑せられたる轉瞬の間に秀吉又光秀を打亡ぼし、稍と勢を持するかと思ふ間もなく、秀次秀頼の暗愚は家康の好餌となりて徳川氏三百年太平の基を建つることになり升たが元々天に二日なく國に二王なき道理に背き、七百年間幕府と云ひ關白と云ひ將軍と稱し、恐れ多くも一天萬乘の知ろし召べき政權を弄んだる天罰の長へに免かるべき様は、ムりませぬことにて、嘉永安政と文字のみ愛で、選み升たる年號は、傾く運の仇事にて、矢張り明治の大御代に續ざぬ民の喜びと共に治まる大八洲其の邊陲の草の家、天茲に一の偉人

英傑を生み世に載る可きは、噺しの種の笑ひ草葉末に結す露の玉六十年の命をば、借金で食ふ大膽を物の數とも思はざる最と面白き大豪傑は斯く申す其日庵即ち拙者にて候なり、扱て此の借金と申すものは、チヨイ借り時借り質借買ひ掛り延べ拂ひ證文借り抵當借り一判借連帶借手形借り本人ベケ裏書本位借りより、雜物澤山入れ銀行借越借に至るまで色々借り方が、ムい升るが、何れも借りたら返すべき責任が、ムい升する若し借り離しの返しつこなしと出掛けると、忽ちに貸した人は敵となり升て、盛んに戰鬪準備を致し升て、動員令を發し、旗鼓堂々と攻め、蒐り升先づ怒鳴り込み、頬の皮ヒン刺き、据り込み兵糧責め、喧嘩ン殿り親戚故舊の連帶人捻り上げ、達執吏差向け、裁判所呼び出し、壘み刺くり糶賣叩きツ離しの手と身とツン、水漬垂らしの泣きツ面ら乞食とする等種々様々の恐ろしき兵器を振り舞して來る裏面の禍機が伏在して居り升から、借りたら先づ返すの外仕方がない様にチャント道理が出来て居り升、一度でも借りて返さなかつたらば、二度目からモ一相手にせず、ドンナ甘いことを云ふても貸して呉れ

升せぬ、然に何の道で借りるも信用と云ふものが第一で、ムい升る、信用の裏は嘘で嘘を吐いては信用は無いことになり、升新聞屋が庵主や大隈伯や雨敬を法螺吹きと申升が、若し嘘を法螺の貝を吹くやうに吹き立て升たら、何れも金を借る信用を吹き飛ばし、升是では借金業と云ふ商賣に破産の宣告をする譯で、ムい升から正當防衛としても、嘘の法螺は吹け升せぬ、近かい證據が、嘘法螺専門の新聞屋が嘘の間屋業で有りながら、人が相手にせぬのみならず、新聞と云ふ犬の糞に記者と云ふ蚊蠅が群つて居るやうに思ふて、普通の人間では、迎ても金貸借の相手になどは致し升せぬ、故に新聞屋と云ふものは、人間並の飯が食へ升せぬので、馬の小便のやうな味、喰汁を呑み、鹿皮の紙のやうな薄い蛙の切身を親子夫婦で突き合ひ、霜風寒き冬空に、蕨芝居の獵師が着る、チャン／＼子のやうな垢染みたセルの洋服を着て、普佛戦争の時に用ひた兵隊の靴の拂ひ物を、ボルガリヤ人が買ふて十六年間穿いた跡を日本に輸入したのを、争ふて買ふたと云ふ、紀念履屋付の靴を穿き、山高帽子の阿蘇淺間式とでも云ふ時の噴火した火山灰色の帽子を、眼深にか

より升て、人の玄關先にツ、立て、端書大の名刺を放り出して、強談つて食はねばならぬでは、ムい升せぬか、お客様方にお差し合ひが有つたら、御免を蒙り、升庵主は決して新聞屋さん全體のお方様の悪口をペラ／＼お喋り致す譯では、ムい升せぬ、處で段々申上升する通り、信用が無ければ、借金は出来升せぬもので、曾て露西亞の大經濟家で、大藏大臣たるウキツテさんが申されましたさうで、露國が借金で埋まつた時は、信用で埋まつた時だ、信用で埋まつた時は、利益で埋まつた時である、何と甘い話では、ムい升せぬか、庵主なども、何の理由かによりて、信用が有つたに違ひ、ムい升せぬ、信用が有つたによりて、借金が出来升した、此の借金で、首が廻らぬ時は、利息で首が廻らず、損失で首が廻りませぬ、大變な違ひで、ムい升併し返さぬ譯に行きませぬ、から、又た借金して返し升、ソコで段々雪を轉がすやうに、借金が大きくなり、升、大きくなればなる程、信用の方を大きくせねばなり升せぬ、此等の工夫を、甘くすることを、營業と致し升て、毎日暮して居り、升が茲に有難い事には、此借金から借金に轉がす序に、有耶無耶と、胡魔化し升て、食つては行き升が

此れはお天道様が生んで呉れた恩に對して義務と思ふて食つて遣るので
 ムい升扱て此の如く借金を一生轉がして其の轉がし仕舞のドン詰りには、
 一番大きく成つた所を脊負込んだ貸主が大損をブツ掛けられ升から此貧
 乏圖に當る御方は大體や大方の災難ではムい升せぬ世間金満家のお方様
 は、ドウカ神信心でも遊ばし升て、火難盜難惡病除けの外に其日庵の借金除
 けのお札でもお受なされて門の口に張つてお置なされ升せぬと物騒でム
 い升庵主の御懇意なお方様に對しては誠にお行末をお案じ申上ます次第
 でムり升庵主は又た生きて居升間には命限り根限り借廻り升ても、一番ドン
 詰りの貸主に拂さへ無事に濟ませ升れば、義務は濟ますからとコウ高を括
 り升て何でも大仕掛の信用を製造せねばならぬと思ひ升て此間中よりア
 メリカのウマイコト州のナメサセ會社から新發明の機械を買入升て大仕
 掛で信用を製造するにと取掛つて居り升追々製品出來の上は年來御愛顧
 の餘光をもち升て御最負お取立の程角から角までズイトお願ひ申上升

第四席

エー引續き伺ひ升肥後の熊本に昔し庵主の極懇意の友達がムい升した。
 其人から當時政府に羽振り好き、或る大臣の首を抵當で、百六十圓の金を借
 り升たことがムい升夫は其頃の政治に對し庵主腹の立つことが山程ムい
 升て毎日々々面白くないこと夥しく、一年程ジツト辛棒して我慢をして居
 り升たが、丁度其の大臣が或政治上の動機に乘りて亂暴を働き出し升たか
 ら最早辛棒出來ず、コンナ詰らない世に無駄に生きて物を思はんより、イツ
 ソ其の大臣を打殺して、死んだ方が面白いだらうと段々考へた上終に決心
 を致し升た扱て其の事を實行するには色々面倒がムい升て、第一當時庵主
 の貧乏は洗ふが如きものでムい升第二老父母が或る田舎の軒端傾く破ら
 家に呻吟して居り升第三庵主の妻として兩親が約束した少女があり升此
 の三ツの物も既に決心をした曉故其儘に打捨て遣つ付けやうかと思ひ
 升たが、元々庵主も自分一己の考へで、死ふと思つたのですから、申さば自分

の精神上の道樂でムい升其以外の者から見れば、何も必用の無いことでムい升から若し咄したら皆な止すが好いと申すに極つて居升其位だから、何も何日限りに夫れを實行せねば執達吏が来る、巡査が縛りに来ると云ふ譯でもなく、咽の渴く時に水を飲み、空腹い時に飯を食い、眠い時に睡ると云ふ如く、腹の立つ時に人を打殺して良い心持になりて、自分も死ぬるのですから、ソイヤチ〜騒がなくつても好いのです、昔から遣る紋切形は痴漢が過つて梅干の核を呑込んだやうに口に言はずに、心で名残りを惜むとか、別れを悲むとかして、蔭で涙をポロ〜落して出て行升、此時に淨瑠璃が床で豫て期したることながら、時刻も迫る未の刻、心は左ながら金銀に異るべくも有らねども、流石岩木にあらざれば頻りに名残の惜まれて、振り反り見る我が家の軒など、吁鳴り升とお詠の床下で、ポーンと鐘を入れ升、此時が尤も梅干の核の咽に引掛つた時で、眼を刮き出し、身振ひをして伸たり縮んだりして、痔持が堅い糞を放るやうな腰付を致し升て、ヤツトのことで引込になる夫から跡に書置が有る辭世の歌がある皆な愚痴の百萬多羅と嘶し家の前

座が謠ふ都々逸よりも面白くない歌を詠んで居升、此丈けの耻を掻かなければ死なぬことになつて居升、夫程厭なら死ことを止したらドンナもんでせう、庵主は夫を甚だ不格恰不都合と思ひ升、ソナに出し拔けに、親や家内に驚愕させなくても、能く譯を咄して是非賛成をさせて皆腹の底から同意を致して實行に取掛ることが出来なければ、第一自分の精神が一番親しい家族をさへ感動せしむることの出来ぬ微力でありて、第二跡で家族が驚愕して馬鹿な真似でも致し升た時には家の耻まで後世に遺す譯故、夫が出来ねば、其事を中止するか止めることが出来ねば、家族を刺殺して仕舞ふて遣るか、かの二つでムい升、ソコテ庵主は第一の手續きに取り掛り升て、丁度七月の十六日から八月の一日まで、毎晩家内の寐靜まるのを持ち、兩親の寐間へ参り升て、面白可笑しく世の中の爲めに一と騒動入れねばならぬことを咄し升た處が宜い鹽梅に兩親も快く承諾をして呉れ升て、何でも甘く遣らねばならぬぞ昔からソナナことを爲る奴には、ソナナ心得違ひがある、ソナナ失策があるなど注意までして呉れ升たので、先づ一安堵を致し升て、夫から

翌晩先祖傳來の脇差を持つて又兩親の處に出掛升して今回のこと御承諾下さつて御許を受けた以上はお二た方の口から事が洩れるか跡で可笑しき御振舞でもあつた時は私の事の成らぬのは何とも思ひ升せぬが吾家の耻が雪げませぬから即時に御自刃を願ひ升と遣つて除けた處が父の言分が面白い己れは汝の様な途方もない子を持つたのだから死んでも満足に死ねぬと思ふて居る汝は未だ青弱腕で人を殺すことよりも自分で死ぬことを知らぬから己れが先きに死んで見せても好い其の刀此處に出せと云はれたので驚愕仰天度膽を抜かれ升してヒタ謝りに謝りて引下り夫より妻になる少女は夫れとなく實家へ返す事に致し升て家財の有丈けを竊かに賣代なして凡一ヶ年許りの父母の食料を拵へ升たがサ一自分に入用の金の工面が付かないトウ／＼九月の三日に家をブラリと出掛け升て肥後の熊本の友達の處に参り升た夫から其の友達と二日二た晩程世の中の雑談を致し升中に其の友達は始めから終までブツ／＼云ふて其の庵主の覗つて居る政府の大臣の悪口を云ふて居り升其處で庵主が僕は漫遊をして見

たいから金を二百圓許り貸して呉れぬかと申升た處が其友達が申升には貴様に貸す金は二百圓は愚か二十圓もないと云ひ升た丁度其部屋の床の間に藤田東湖の書いた石摺りの掛物で三・死・死・死の詩が書いたのが掛つて居り升甚だ氣になり癪に障りてなりませぬからソナラ此の掛物を僕に呉れぬかと申升と夫なら遣らうと申升から有難いと挨拶をして夫れを下して直ぐにズン／＼に引裂ひて仕舞い升て宿に歸つて來升た處が其翌朝早く庵主が竊かにピストルの掃除をして居る處に其友達が遣つて來升て不意に己れは種々な物を賣つて金を百圓拵へて來た又外に一人貴様に金を貸したいと云ふ老爺さんがあつて六十圓掛物を賣つて持つて來た併し己れは抵當物に望があると云ひ升から夫は何だと云ひ升と此の金の抵當には人間の首でなければ厭だと申升ソコで庵主は田地田畑の抵當物は持たぬが首なら幸ひ一つ二つ持ち合せが有る一つは二十歳計りの首で一つは四十歳前後の首だと申升と其の四十歳前後の首が抵當に欲しいのだ夫が持つて來れなかつたら其時二十歳位の首が欲しいと申升から好

し、承知した儘かに借りたと申升と、不潔い旅持鞆の中に百六十圓金を入れ、て呉れ升た其跡で彼れが申升には、四十歳前後の首を持つて来るまでは二十歳位の首は、大事に仕るよ、其の首に限り、自分で勝手に斬つたのは受取らぬぞ、己れが取りに往く時渡さねばならぬぞと云ひ升から何方でも同じことだ、金さへ借れば言分無いのだと申て、其の鞆入りの儘受取升て其宿を立出で升たのが、朝飯後の十時頃でもムい升たらう、夫からドン／＼東京に遣つて來升て、臺灣の生番式で、大臣の首狩りと出掛け升た處が、田舎書生の、ポット出でムり升から何方向いて歩つて好いやら見當が付き升せぬ、其處で、二十錢出して東京市の地圖を買ひ升て、毎日々々無暗矢鱈に歩行き廻り升て、各大臣の官邸なども覺え升、夫から覗つて居る、大臣の顔を知り升せぬから、寫眞店に飛び込んで、一錢五厘で、其の大臣の寫眞を買ひ升て、始終馬車に乗つた人さへあれば見競べて居り升た處が、其年の十一月の三日に、澤山の大臣さんが馬車で出歩く中にハタト其人に出會せ升て、儘かに其の御面相を見覺え升たから、宿に歸りて色々考へ升たが、一體男兒が刺客を行ふに

昔時から大抵欺し擧である、庵主は元來其人の爲ることに不平が有りて、擧つのだから、其不平の次第を親しく面談して國家に對する自分の意思をも、十分に云ふて論伏して先方で語塞るに至りた時尋常に刺違へて死ぬが好いと、思ひ升ソコで持つて居る長船則光の短刀を先方に與へ、先づ庵主の腹を突かせて置いて、ピストルで先方の腦天を撃つのだ、少し風違ひに遣らなければ面白くないと思ひ升て、夫から面會することを工夫し升たが、中々會ふて呉さうもムり升せぬから、一つの名案を考へ升た、今思ひ升れば身を捨て、居る程儘かなものはムい升せぬ、丁度十一月の七日の夜、竊かに其の官邸に忍び込み升た裏の崖を攀ち登り升て、生垣を潜り大臣の居間と思しき處の庭に行き升て、ジツト中の様子を窺ひ升と、誰も主人らしき人は居らず、小女が一人、寫眞ブツクか何か見て居り升處に三太夫の様な奴が遣つて來て、何か一言二言咄す處に、丁度十一時でムい升、グワラ／＼と馬車の響が、玄関の方に聽え升と、三太夫は飛で行き升、小女も跡から行き升、めた此中に家の中に這入つて居なければならぬと思ふ間もなく、其處へ這入つて來た

のは大臣ではなくつて、奥さん見た様な婦人で、ムい升、小女が二人で、衣物を脱がせ、不衛着になりて、火鉢の側に坐り、小女は脱捨ての衣物を持って行た跡に、郵便の手紙を二三本讀み升た處に、小女が茶を持って来て、咄を始め升た、硝子戸越ですから、能くは分り升せぬが、旦那様は、お船でお寒いせうねと云ふ辭が、ハッキリと分り升た時は、庵主の落膽と云ふものは、今筆にも口にも、盡くされ升せぬ、實にガツカリ致し升て、滿身の力も、抜け果て、寒さで全身も、堅くなる様に、覺え升て、足も動かぬやうになり、升た併し、其儘ではなり升せぬから、元來た處へ、引返し升た處が、岸を下りやうとする處に、小女が一疋飛んで来て、吠え付くこと、夥しく崖を下り升たら、下にまで来て、吠え付き升から、此處なら少し血が出て、好いと思ひ升て、足下に來たやつを、短刀で一と突きに、突き殺し升て、提げて、二町程來た、堀の中に捨て、宿へ歸つて來升たのは、十二時二十分頃で、ムい升た、庵主が此の芝居の泥棒見たやうな、真似を致し升たのが、身の大恥となりて、今日思ひ出すも、汗をかく程の身の戒めとなり、升て、少しにても人の爲めか、世の中の爲めにもなるならばと思ひ

升て、叶はぬなりに、今尙ほマゴク、驅けすり歩いて居り、升のは、皆之れ以來の罪滅ぼしと心の神への謝罪の積りで、ムい升多く世の中のこと、知らずに、血氣に早やお若いお方様方に對して、好い御意見の種と思ひ升て、恥を懺悔の思ひ草、摘も侘しき昔語り、其の結末は、如何なりませう、餘りお長くなり、升から委しく、次席に申上り

第五席

前席の續きを申上り、庵主は大凡半年の間、其の大臣の首を取るとのみを思ひ詰めて、升て、父母に別れ妻を去り、又其首抵當で、金まで借りた揚句の果が、マンマと其の首は取り得ずして、小犬一疋を、突き殺したと云ふ仕末にて、スゴスゴ宿に歸り、升て、越方行末のことを思ひ廻はせば、殘念で耐り升せず、何としたらば、アノ首が取れるかと、千々に思ひを碎き、升て、寧ろのこと、其の大臣の出先きに、追ひ行きて、強て首を頂戴することに、仕ようかとまで思ひ升たが、茲に庵主の身に、非常の災厄が、蔽ふて來升た、夫は丁度、四五日後のこと

でムい升た夜中より胸が苦しう及んで起上らうと致し升と足が立ち
 升せぬ早速近所の醫者を呼んで見て貰ひ升と之れは脚氣衝心であつて大
 分重體であると申します成程考へ升れば一ヶ月程前から足が重く食物も
 甚だ甘くムりませなんだが全く首狩りに心を奪はれて氣が付かなんだと
 見え升醫者が足を指で壓すのを見まするとブクムと穴が明き升夫から
 鏡を初めて見ますると他人の顔と見紛ふやうに青白く腫れて居り升夫か
 ら其の醫者が東京に居てはイケナイ大磯邊に行けと申し升から彌ふ身の
 不幸を悔み升て落膽し升たが又思ひ替へて何でも病氣を直して仕舞ふ迄
 は首取業を廢業して全快したら又開業することだと覺悟を極め升て其翌
 日地を這ふ様にして新橋の停車場に參り升て大磯に轉地と出掛升た夫か
 ら其冬は夢と暮れ升て翌年の一月二十日頃は二度程の危険の時を凌ぎ升
 て兎や角一人歩きの出來るやうになり升たからソロ／＼東京に引返し升
 た夫から方々聞き合せ升ると彼の大臣は已に昨年内に歸京して居るとを
 確かに聞き升たから今度は萬全の策を定めて何でも立派に首を取らねば

ならぬと考へ升たが何分面會する手段が六ヶ敷ふムい升處で豫て熊本を
 出る時友達から貰ふて居た山岡鐵舟先生へ宛た添書を思ひ出し升たから
 之れを以て山岡先生に會ふて何とか胡魔化して山岡先生から更らに彼の
 大臣への添書を貰ふて面會するが一番早道かも知れぬと考へ升て夫から
 四ッ谷仲町の先生の宅に參り升た先生直に會ふて呉れ升たから段々咄の
 中に禪學の門々一切境と云ふ咄になつた時雷霆の頭上に破裂したやうな
 先生の聲と共に貴様のやうな面ら付きの奴が間違ひで大臣の首などを覗
 つて居るものだと云ふ一刹那に先生が手に持て居る一尺二寸位の鐵扇で
 庵主の横面を火の飛ぶ程打たれ升た庵主の驚とき云ふものは噓ん物もム
 い升せぬ先生の聲に應じてアツト聲は合せ升たが何んにもなり升せぬ右
 の方へ倒れん計りに打付けられ升た夫から庵主も負け惜みの性質でムい
 升から古徹の生えた宗門禪を根據として人の精神を奪はふと思ふても養
 ひ得たる定力の象は決して變り升せぬと云ふと先生ニコ／＼笑ひ升て如
 是觀と云ふものは非常に面白いものだから短かい考へを持つてはならぬ

長い考を持つて短い活断を付けねばならぬものだ、先づ緩々飯でも食ふて咄さうと云ふて、夫から晩飯を差向ひで御馳走になりて段々庵主の考を質問致され升から此處へめたと思ひ升て人間と云ふものは自分の爲めに生きて居るものとは思ひ升て天下の萬象は劣悪なる政治に苦められ殊に外國に對する政治の有様は犬猫も其の恥を忍ぶ能はざる有様で、升就中某大臣の如きは私名私功を成すの道を知つて世を戕ない人を害することは物の數とも思はぬ暴戾を極めて居り升故に庵主は慰み半分、世の爲め人の爲にもなるか知らぬと思ひ升て試みに此の人を打殺して見たいと企て升たので、升庵主の體は初めから入用がありて此の事に使ふと注文して誂へたものでは、升升せぬ竹切れで水を敲いたら泡が出た、夫れと同じ位の理窟で生れたので、升升故にマア何かになるかも知れぬ位で成長したので、升升から一つ首でも取つて見たらば何とか面白くなるか、升升は経験世は咒詛で遣けて見ねば、升升せぬから、昨年來是々のを致し升て頻りに奔走を

致して居る譯で、升と初めからの顛末を委敷咄し升と、先生ボント膝を叩いて成程面白い、夫なら首を取るが至極好いであらう、私しが其の大臣に會へるやうに手紙を書いて上げるから、親しく面會してヨク咄をして委敷取調べた上、君の考に相違なく、又世に大害ありと思ふなら、其座で殺して仕舞ふが好い併し、若し君の考へが間違ひであつたら、其時は能く跡先のことも私と相談して不都合のない様に仕なされと云はれ、升から何を云ふ老翁も親爺、奴今に其寢言の夢を覺して遣るぞと思ひ升たが、顔にも出さず重々御教訓御親切有がたく存じ升と、禮を云ふて手紙を貰ひ、其足で出掛け升たが、其手紙が開き封のやうに糊が離れかゝつて居り升から面白と思ひ升て途或るお堀の土堤の芝の蔭に日和ボッコをして讀んで見升と、今確かりとは覺え升せぬが、此者は至極誠實の青年に、御座候處、世事に付色々誤解を相重ね、其極強ひて閣下の御首を頂戴すると、頑固なる覺悟致居る者に、御座候間、御引見の上、此間老生拜見被仰付候書類等も、御内示被下重々の御教解切望仕候、但し慥かに兇器等をも所持致居候と存じ候間、此點には十分の

御要領被遊候様致度候云々のやうな文言が書いてムい升庵主の面白さ限りなく之れではピストルも短刀も取上げらるに違ひない夫なら好し無手で先づ一と當て當て直に殺すに手間隙はないと覺悟を致し升た之より此手紙を持つて大臣に面會し借金百六十圓の始末の段と相成升が餘りお長くなり升て恐れ入升から一寸一息入れ升て次席に伺ひ升

第六席

引續き伺ひ升山岡先生の手紙を讀んだる庵主は其愉快さ面白さ何だか頭の中に世の中を掃除する蟲が居つて箒をヒョク／＼振り廻す様な心持が仕升て其翌日午前八時に其の首を覗つて居る大臣の官邸に出掛けて参り升た其時庵主考へ升たには此の山岡先生の手紙を見て庵主に面會することの出来る大臣は相當骨のある奴だから其の積りでシツカリ覺悟をして居らねばならぬと思ひ升て箒を堅く締めて足も蹴返しのよいやうに襦袢を着ず素裸に衣物に着て羽織の下に袴を刀の下げ緒のシツカリしたの

で掛け羽織の紐をヒツ詰めて袴の見えぬやうに致し升て小倉の袴を装高に着込み紐を唐結びにして剃刀でフツンと切り捨て升て扱て玄關に行つて名刺と手紙を差出し升とや／＼暫くして前と違ふ袴掛けの取次が出て來升てコチラへお通りなさい申升から後に付いて行升と玄關の直傍の部屋に入れ升て只今大臣は食事を致し又一人客が待つて居り升から暫くお待ち下さいと云ふて茶を出して引込み升た夫から待つて置かねば用心し升て何の音沙汰もムいませぬ其内庵主は小便を能くして置かねば用心が悪いと思ひ升て其部屋を出升とヒツクリ仕升たのは戸の外に巡察が二人立つて居り升て何處に行くかと聞き升から用たしに行くからと便所を聞き升と此方にお出なさいと云ふて二人の巡察がクツ付いて室外へ連れて行つて不潔い車夫の便所のやうな所へ連れて行升て又元の部屋に入れた夫から外の様子がどうも變で警部らしき奴が一人居つて頻りに奔走して居り升て巡察も彼地此地に七八人位は居るやうでムい升ソコで庵主本當に心中で怒り升た天下の志士を以て任ずる者が已に一死を決し血を吐

くに齊しき意見を提げて當路の大臣に面會せんとするに多數の巡查を以て一人の庵主を取捲くは其心中測り知るべしだヨシ左様の無態を働くら未熟ながらも日頃覺えた武術の限りを盡して一ト泡次かせて呉れんと心中忽ちに一決し直ぐに其の巡查に向ひ人を待せるにも大抵程のあるものなり遇ふか遇はぬか主人に取次いで否やの近事をせられよと云ふと巡查は承知の旨を答へ升から又た暫く待つて居り升と今度は前きの袴を着た取次が來升てお待せ申升て失禮でした此方らへと云ひ升から後に付いて行くとすると巡查の奴が官邸の規則ですからお身内を改め升と云ふて懐に手を入れ方々から改め升た素より前からの覺悟故凶器は一つも持つて居り升せぬが羽織の下に櫛を掛けて居たのには巡查の奴膽を潰した模様で妙なドングリ目を光らし升た何か云ふかと思ふと何も申升せず今度は警部のやうな奴と取次と二人で長い廊下を隔てた大臣の居間へ連れて行升た其處には何も居らぬやうでしたが何でも縁側の方に二人斗は居たやうでした庵主は其の大臣の顔を見る前に座敷の模様足場を見たに相

違あり升せぬ第一番に目に付いたのは次の間の廻り縁の角に柱が一本あつて次の間と座敷の間に又た一本柱がある夫から床の間に細長い手頃の銅器の花活けがある占めたと思ひ升て初めて大臣の顔を見升と寫真で見たとは大違ひでソナナ堂々とした人物では無い升せぬ頗る貧乏らしき顔をした小男であり升ナンダ之れなら只だ一握だ半分間間があれば無活の一と當てい片付けて遣ると思ひ升て頃好き場所に坐り升て挨拶を致し升と向ふも挨拶を致し升てお待せ申して失禮でした初めてお目に掛る君を巡查で取捲かせたのは心無い事でしたが君に殺さるゝ迄は僕國家に責任を持つて居るから僕が臆病は暫く措き國家は非常に臆病なものと思ふて下さい又た君が僕を殺す考へを持つて居らるゝ事は山岡の心の手紙で承知し升たから則ち臆病の準備が出来た譯です然し臆病は臆病として話は別ですから緩くり十分に致し升から遠慮なくお話しなさいと云ふ庵主は實に此の一言を面白く感じ升たから一つ十分詰問をして遣らうと思ひ升て話したも話さないもない彼れ一語吾れ一話晝飯を食ふことも打忘れ龍

が黒雲に乗りて、爪を怒らして、火焰を吐く如く、其日の五時頃まで話し升た其話し升た事柄は今考へ升ても、餘り馬鹿々々敷くて、又借金談に關係がムい升せぬから、贅言敷く恐れ入升から申上升せぬが、結局庵主の詰問し升た九ヶ條の事柄は悉く駄目で、大臣は所有政府の書類、電報の翻譯文、又規則或時は、勅語などを持出し升て、事明細に説明をして、呉升て、語り三百有餘里隔りたる田舎の山の中に、芋や大根を嚼る片手に聞いた事や考へた事は、嘘計りでお話にならぬ誤解で、脳味噌から煙の出る程怒つて、長の年月不快の感を持つて、終に人を殺し、自分も死なふとまで決心したことに、落着し升た其處で、手前は其大臣を殺す事は、断然止ました然し、左の言を残し升た實に政治論と云もの、當にならぬとは、今日初めて知り升たが、天下の志士をして此誤解をせしめたる政府は、ドウです、此の如き政治の態度、憲法も、議會も、あつたものでは、無いではあり升せぬか、今日は決して貴下の首を貰ふとは申升せぬ庵主の方が誤解ですから、然し誤解しても、身を國事に委ぬる志士は何處までも志士ですから、此後は誤解せずにお首を頂戴に出る時機が有る

と思ひ升と云ふて、其から段々知らぬことを聞き考へて居ることも話し升て、晩飯を御馳走になつて、夜の九時半に宿に歸つて來升た、夫から困つたのは、百六十圓の借金のことで、大事の抵當物が取れぬことになり升たから、工夫をして左の手紙を書いて、熊本に送り升た

拜啓、過日借用致候、百六十圓に對する、第一の抵當物は、無餘儀事情により暫く取り外し難き譯有之、當分の間、其儘保存致置度、然し強て御入用に候は、第二の抵當物、何時にても、可差出候間、御入用次第、御申越可被下候、但し、第一の抵當物は、貴殿方強て御受取被成候も、當分、何の役にも、相立不申候事と、確認致申候、此儀御含まで、申上置候、早々不宣

と申送り升と、一ヶ月計の間に、左の返書が參り升た

貴書拜見仕候、第一抵當物、當分御保存の思召にて、御差入不出來の趣、敬承仕候、小生共も、種々取調の結果、只今其必要無之事に、相成申候間、第二の抵當物も、共に御保存相成置度、切望仕候、委細は、近日上京の上、親しく御相談可仕候、先づは、拜復まで、早々不宣

と申して参り升た夫から十數年の後其時の債權者が貧乏をして執達吏に
 差押を食ひ升て非常の困難をして居ることを聞き升たから庵主八百圓の
 金を拵へて持つて行き升て差押へを解いて遣り升た處が非常に喜んで跡
 で返しに來升たから夫は首抵當の借用金の元利であると暇の時に拵へて
 置いた重利法の十八年間の勘定書村を出して尙ほ不足金二十二圓三十二
 錢六厘を添へて渡し升たら大笑ひを致し升て夫ならマア、僕も今貧乏
 だから取つて置くと云ふて持つて歸り升て翌日美事なる刀を一本呉れ升
 た斯くお咄しを致し升すれば至極詰まらぬ屁の如き顛末でムい升るが當
 時にあつては夜の目も寝らぬことがムい升た之が首抵當借金のお咄しで
 ムい升へエお長くなり升て御退屈様

第 七 席

引續き伺ひ升泰平の世に生れて文を修めず武を練らず徒らに安穩に狂
 れて人の艱難を思はず身に餘る大祿を食りて榮華の夢に現を抜かし慾の

餘りの樂みは金錢財寶の貯蓄にして家風家格と嗚呼ケ間敷子孫に傳ふる
 事柄を煎じ詰れば知行所の百姓苛遇めの手段にして馬鹿侍一人の衣食を
 満たす奇味輕暖は民の膏血の絞り汁擧りて肥やす犬腹に均しき武士を養
 ふは制度の罪とは云ひながら庵主の家も其中に洩れざるものでムい升て
 人の善惡は存じませぬが七八代は金を溜める奴計り出たものと見え升て
 相當の財産がムい升た處で此財産の出來た原因を分析致し升れば百姓を
 絞りとるより外一文も收入の無い家に泥棒を爲るより外家財の殖える譯
 がムい升せぬ其の百姓の困苦を見れば雜食に腹も満たす檻樓に寒も凌げ
 ず三伏の暑に汗を浴び三冬の寒の霜に轉び升て働き出した穀物を武士と
 云ふ野放圖の無い馬鹿虫が待ち構へて群がり寄つて擡り取つて遊んで食
 うて樂んだ餘りを貯蓄して一文も人に分たす拵へた財産でムい升から人間
 らしき根性で考へ升てはドウしても心持ちの好い譯のものではムい升せ
 ぬ若し此の様を畫にでも描いて見升たらば此の馬鹿士の屋の棟には瘦せ
 衰へた百姓の老幼男女の亡靈が寄り群がつて丑滿の夜の嵐と諸共に颯々

泣いて打積る恨みの丈けを訴へて居るに違ひは無い升せぬソコで庵主が今更ニソナリ窟の本來を悉多太子ぢや無い升せぬが有情非情を濟度して成佛させる力はなくとも、娑婆の憐れ身に纏ひ生老病死の恐ろしさを片時忘れぬ人間に仇か敵の爲す業を七八代も爲したりし罪亡しを仕て見たく、茲に決心の臍を固めました、ソモ借金をする、始まりにて先づ此汚らはしき財産を人の爲と世の爲に無くして見たく思ひ升て色々面白き工夫を致し升て、満二十歳の時の年の暮は、お見せ申たい位の立派な貧乏世帯になり升て、五升の餅が搗けずして、家内擧つて、其工夫を研究すると云ふ、公立貧乏學校本科入校の試験に及第致し升て、堂々たる老幼家族付の貧書生の資格を備へ升た、數代連綿として貧乏を知らずに繼續した、庵主の家も、寡人が身に及んで、罪亡しが出来て、數百年間幾千百の家來百姓の亡魂の恨を慰むることの出来たのは、全く兩親家族共の能く物事を理解して貧乏になることに同意をして呉れた功績と常に心で禮を申して居り升する次第で無い升、扱て其から借りたも借りないも、丁度門司港から肥後の熊本まで、鐵道の

開通し升た時其起點たる門司停車場から汽車に乗り升て、熊本まで行き升間に、其鐵道沿線丈けて、金を借りた家が、無慮百七十六軒、夫が一圓五十錢から、三千圓止まり位迄、九州全面虱の卵を産み付けた程、借り升た顛末は、當時一緒に事を致した友達は皆な能く存じて居り升す事で、先づ綺麗に九州丈けは、食ひ詰めでなく、借詰め升て、錐を立てる餘地も無い升せぬ、夫から段々貸した人々に、相談を致し升て、手と身と、ツンツンの裸か坊主で、日本廻國を始め升た、夫とても身に一文の貯へが無い升せぬから、草鞋を買ふも茶を飲むも、借りた金が元手で無い升、借り出さねば素より食ふとも寝ることも出来ぬ次第で、無い升から、丁度泥棒と乞食の境目の僅な道を行つて、無い升一足踏み外せば何らか遣らなければなり升せぬ、皆様一寸お考へ下さい、此處が非常に六ヶ敷處で、お若い方は、好く此處を御了見なさらねば、御成功の後、ソナにお立派にお成り遊ばしても、お若い時に只一と足の踏み違ひが病となり升て、顔が曲つて、目鼻から汗が出升て、手足も動かぬ癩病患者見たような人間が出来上り、升丁度、庵主が、東海道を四晝夜飯を食はずに、陸行致し升

て静岡で倒れ升た時、或る知事さんのお世話になつて、東京に参り升た時、一人の奇人に遭ひ升た、其人は東洋のロビンソンと云ふて持て囃された人の由で一日、或る人の宅で人を寄せて演説を聞き升た、其咄に幾年か、或る島に居つて、忍耐刻苦を積み、何やら事業を遣つて屢次失敗をして日本に歸つて来た時は西も東も知る人は無く三日三夜絶食して、トリトリ、或る道路に倒れて飢死をするより外仕方が無い事になりました故、ゴソソ、匍匐て行つて島の芋を盗んで食ふて百姓にフン捕まつて恥辱を受けたと咄出た時は、満座水を打つたやうに涙にひたりました其後庵主が面會し升た時に其人に忠告をして遣り升た、君は此後何事をして、決して成功はせぬと覺悟をせられよ、夫は此間の咄しに人の島の芋を盗んで食つたと云ふたでないか、芋でも金でも衣類でも盗んだら、泥棒だぞ、人間、飢え死にする時になれば泥棒をするものと極まれば何事を成功しても尊敬と云ふことをする譯に行かぬぞと申升たら、夫ならドウしたら好いかと申升から、ナゼ死なぬのだ、君が忍耐刻苦して、何か下らぬ事業をするのを誰かに頼まれて爲たのか、自分

で勝手に命掛けの仕事をして不遇にして飢死をするまでに成つたら夫が成功だ、君が忍耐刻苦のドン詰りの成功は泥棒を成功したのだ、僕は此間東海道を四日四夜絶食で、歩行をして静岡で倒れた、其道中濱松の手前で、十銭紙幣の落ちて居たのを見た、其時に思はず一足立ち止まつて、其の錢を振り返つて見た時に、僕の幼少の時より學んで居た、學問が僕の膽玉を掴んでグイと後に引いたから、思はず拳骨を拵へて右の鬘太をクワンと毆つて遣つて来た、今考へると、其時の危険さは千仞の崖を踏み外す處を人に助けられた様な心持がして、此の拳骨を頂いて懐に仕舞て居るのだよ、君はドウカ事業杯と云ふ下劣なことを止めて少し、書物でも讀んで己れを責めて、夫から芋を盗んだ罪亡ぼしをして、後に人の世話にならずに食ふ丈けの事でも考へ出して野垂れ死をせぬ丈けのことを用心して、死玉へと申升たら、見る見る額から汗をボト／＼落し升て、涙を流して歸り升たが、其後の音沙汰は分り升せぬ、扱て色々隠居の道話見ようなことを申上り升て、恐れ入升が、之れが庵主の借金譚を書き升、餘徳と思召され升て、御辛棒を願ひ升、一寸一息致升

第八席

エー伺ひ升庵主が晴昔山陰道の方を漫遊致し升た頃の事でムい升た神
 戸に出て來升て不思議の人から十圓のお金を借り升た其時の庵主の風體
 つたらムい升せぬ今考へ升と噴出し升位先づ下に差し子の稽古着に腹帶
 を締め夫に毛縷子の黒い襟を掛けて胡魔化し其上に双子の着物に同じ羽
 織を着夫に前垂を掛け股引脚絆甲掛け草鞋掛け夫から輪珠數を二の腕に
 擦り上げ懐には美濃國善定兼吉の短刀と法華經の普門品が一巻ねじ込ん
 でムい升夫から小さき柳行李を風呂敷に包んで背中に背負ひ菅笠を冠ぶ
 り升て丹波竹の肉厚き杖を持ち見掛けは丸で旅商人ですが其行李の中の
 荷物が面白い靖献遺言に回天詩史ルーソーの民約篇に佛國革命史維摩碧
 巖等の白文禪書にミルの經濟書夫から帳面が三冊一は人を懲しめて頭を
 毆つた姓名帳暴行を吾れに加へた人に怪我をさせた姓名帳人に毆られ自
 分に傷を付けた人の姓名帳矢立が一つ跡は血止めの膏藥と繻帶布れと氣

付け薬と半紙が少々計りと云ふ仕末にて丸で出家武士諸商人を一人り
 背負つて歩いて居升た幸ひに山陰道も暴れ散し升て怪我もせず神戸に
 出て來升たが丁度其時に國事犯謀殺の罪で牢に入つて出て來た極正直な
 男に遭升た所が其男牢の中で耶蘇坊主の説教を聴いて酷く感服し升て丁
 度屑屋の後家の入婿にでも成つたように紙神だくと計り申升て蒼蠅く
 て癪に障つて成り升せぬからトウく妙なとで其耶蘇坊主に面會し升た
 其坊さんは日本に九年も居た人で詞も能く出來升すし段々咄しの末愚弄
 て居り升たら坊さん怒り出して庵主と決闘をすると云ひ出し升た夫から
 段々謝つて決闘をすることは止めにして日本古代の法律に隨ひ議論に負
 けた方が横つ頬を三つゝ毆ることに仕ようと申し升と坊さん夫に同意を
 仕升て若し其爲め怪我をしても異議を云はぬと云ふ契約を仕ようと申し
 升から仕方がない契約を致し升た大變な亂暴な坊さんも有るもので跡で
 聞き升たら魯西亞人で佛蘭西の籍にあつて天主教なソいでムい升夫から
 今一人血氣壯んな歐人が立會人となり升て契約書を取交し升て忘れも致

し升せぬ、十月七日の朝、十時に其會堂で議論を始め升て、今考へ升れば實に詰まらぬ事計り申し升たもので、十一時半頃、手前が正さに議論に勝升た夫は、勝つ筈です、先方は甘くても、日本語は或る要所では困り升坊さん負けたと思ふたかして、卓子の上にある、四角な硝子の文鎖様の物を、手に掴み升たから、庵主グーッと癪に障り升たから、先んずれば、人を制すだと左で拒ぐ覺悟をして、一つ耳尻をグワーンと參り升た處が、其人は、ヨロめく、今一人が掛つて來升奴を、足を飛ばして、彼れの膝を蹴り升たら、ハタリと倒れて、起き得升せぬ處に、先の相手が掛つて來升たから、椅子で以て、一と突き突いて置いて、殴り升たから、堪り升せぬ、胸を椅子の足で、突かれたのが、急所で、氣絶致し升た、夫から直に、足が痛んで動けぬ、一人の方に、勝手から、水を持って來て遣つて、介抱を托し、庵主は直に、車に乗り升て、佛蘭西領事館に參り升た、ドウして佛蘭西領事館に行たか、其理由は、覺え升せぬが、夫が大變仕合せになり升て、今考へますれば、治外法權の有る時ですから、ドンな騒動になるか、分り升ぬが、幸ひに、其坊さんが、耶蘇教の辯に、大酒を飲み升て、田舎などに行きて

屢次亂暴を働らき領事などを度々困らせたことがあるさうで、ムい升さうで、夫は、跡の咄で、庵主事の顛末を、委細訴へ升て、彼の片假名で書いた契約書を見せ升と、通譯の日本人が出て來升て、一々咄しを仕て呉れ升た、夫から、何か、一皿の肉と、パンを呉れ升て、一時頃まで、待つて居り升と、歸つて好いと申し升から、宿に歸り升た、其の午後、に神戸の警察から呼びに來升て、往升たら、署長さんが出て來升た、其の署長さんは、自由黨の中で、一寸顔を知つて居た人で、したから、非常に都合が好く、戸を締め切りて、色々咄をして呉れ升て、今の様な顛末を、聞き升た、又た其の坊さんは、直に本國に返へさるゝことに成つたさうで、ムい升署長さんからは、段々説諭をされ升て、日本人の外國人に對する關係や、治外法權の入り割りも、聞き升たが、其頃は、警察も、マダ寛大で、ムい升て、庵主も、血氣に計り早やる、若い盛りで、ムい升から、詰らぬことに悪いことをばしたと、後悔も致し升たが、先づ、夫れ文けで、事落着致し升た、其の明る日、庵主が椅子を壊した損害、二圓二十五錢出せと、書付が來升たには、驚き升た、庵主は、其時一圓某と、バラ、錢少々より、外懐に、ムい升せぬ、萬止を得ず

宿に借り升て拂つて貰ひ升たが當時庵主は是非國に歸らねばならぬ用事がムい升馬鹿を致し升せねば一夜の宿錢を拂ひ國に歸る船賃位はムい升たのに飛んでもない事を仕出かし升て腹の底から真に後悔を致し升た併し外國人跋扈の時に於て愚蒙な田舎の百姓などを苦むる暴漢を二人までもブン殴つて本國に追ひ返したのは愉快でないこともないと獨りニコニコ考へて其夜眠りに就き升たが其の寢た間に大々的破天荒の大失策否な庵主の當時の境遇に取りては始末の仕方無い非常の出来事が持ち上り升た其の爲めに筆紙に盡し難き苦心を致し升て終に知らない人に十圓の金を借りると云ふ珍事が出来致し升た譯で餘りお長くなり升て恐れ入り升から又一と息入れ升て次席に緩くり申し上り

第九席

エー前席に申上り升た通り其夜は至極好い心持に床に就き升たが何様風とした事よりの出来事ではムい升がドンナ大事にも相成かと思ひ升た一

件が無事に片付き詰り西洋人の方が負けに成るのみならず多くの人の害になる毛唐人を退去せしめた譯故世捨人同様なる武者修行の庵主としても甚だ心持が宜敷色々な事をも考へ升て何だか睡られず十一時の時計の音までは覺えて居り升が夫からするくと前後も分かず眠つた物と見え升一體庵主は幼少より寢像の悪いのと口の悪いのが疵だと云はれ升が自分では夫程とも思ひ升せなんだが其の晩丈けは思ひ知り升た何でも蠟一枚位間の隔たつた所に在る火鉢の處まで夜具を背負つて這つて行ったものと見へ升て何だか悪い夢にウナされて目を覺し升と座敷一杯の煙で一寸も見えず夜具の袖は焼けて疊から火が出て庵主の寢巻の裳まで火になつて居り升ワアツと勿ね起ると同時はバアツと燃へ出し庵主の體に寢巻の火が付升た幸ひ細帯が解けて居り升たから脱ぎ捨て升て裸となり途方に暮れでドウして好いか譯けが分り升せぬ其中火は燃え出す煙で邊りは見えず煙には咽ぶ降り口も何も分り升せぬから萬死に一生も得る道がムい升せぬソコで決心を致し升て表通りの町の方に二間計りの出格子がムい

宿に借り升て拂つて貰ひ升たが、當時庵主は是非國に歸らねばならぬ用事が
 無い升馬鹿を致し升せねば、一夜の宿錢を拂ひ國に歸る船賃位は無い升
 たのに飛んでもない事を仕出かし升て腹の底から眞に後悔を致し升た併
 し外國人跋扈の時に於て愚蒙な田舎の百姓などを苦むる暴漢を二人まで
 もブン殴つて、本國に追ひ返したのは愉快でないこともないと獨りニコニ
 コ考へて、其夜眠りに就き升たが、其の寢た間に大々的破天荒の大失策否な
 庵主の當時の境遇に取りては、始末の仕方無い非常の出来事が持ち上り
 升た其の爲めに筆紙に盡し難き苦心を致し升て終に知らない人に十圓の
 金を借りると云ふ珍事が出来致し升た譯で、餘りお長くなり升て恐れ入り
 升から又一と息入れ升て、次席に緩くり申し上り

第九席

エー前席に申上り升た通り、其夜は至極好い心持に床に就き升たが、何様風
 とした事よりの出来事では無い升が、ドンナ大事にも相成かと思ひ升た一

件が無事に片付き、語り西洋人の方が負けに成るのみならず、多くの人の害
 になる毛唐人を退去せしめた譯故世捨人同様なる武者修行の庵主として
 も甚だ心持が宜敷色々な事をも考へ升て、何だか睡られず、十一時の時計の
 音までは覺えて居り升が、夫からするくと前後も分かず、眠つた物と見え
 升一體庵主は幼少より、寢像の悪いのと、口の悪いのが疵だと云はれ升が、自
 分では、夫程とも思ひ升せなんだが、其の晩丈は思ひ知り升た何でも、盃一
 枚位間の隔たつた所に在る火鉢の處まで、夜具を背負つて這つて行たもの
 と見へ升て、何だか悪い夢に、ウナされて、目を覺し升と座敷一杯の煙で一寸
 も見えず、夜具の袖は焼けて、盃から火が出て、庵主の寢卷の裳まで、火になつ
 て居り升、ワアツと刎ね起ると同時に、バアツと燃へ出し、庵主の體に寢卷の
 火が付升た幸ひ細帯が解けて居り升たから、脱ぎ捨て升て裸となり、途方に
 暮れで、ドウして好いか譯けが分り升せぬ、其中火は燃え出す煙で、邊りは見
 えす、煙には咽ぶ、降り口も何も分り升せぬから、萬死に一生も得る道が無い
 升せぬ、ソコで決心を致し升て、表通りの町の方に、二間計りの出格子が無い

升、其の出格子の框に、満身の力を込めて、ブツ付かり、升た、何でも、四五度、遣り升たら、メリ／＼ドタンと音かして、往來へ其出格子が落升た、夫から直に、其の夜具を、往來へ放り出し、又疊を、剣くりりて、ドン／＼放り出し、升と盛んに往來で、燃え升、其中に、巡査が飛んで來升て、其近邊を起して、奴鳴り廻り升た、から、段々人も寄つて來升て、火を消し止め升て、幸ひに大事にならずに、濟み升たが、丁度其時、夜の二時半で、ムい升た、其時の庵主の有様は、大兵肥滿の大入道が、素ッ裸で、火の中を、荒れ廻るのですから、彼の芝居にある、魯智深の羅漢寺破りを見るようで、有つたらうと思升、夫は甚だ勇ましよう、ムい升が、其跡が、いけ升せぬ宿屋には、嗚鳴り付けられ、巡査に怒り付けられ、近所の人には、悪口を云はれ、庵主トント、形なしで、ムい升、夫から又彼署長さんに泣き付いて、色々口を入れて貰ひ升たが、結局損害金六圓二十錢と云ふことになり升た、其頃は、マダ物價の安い時で、ムい升て宿錢が、下等で二十五錢で、晝飯が、十二錢の時、で、ムい升から、大負けに負けて、六圓二十錢で、濟して、呉れたので、ムい升處で、六圓は、愚か、壹圓紙幣一枚より、外、ムい升せぬ仕合せ、故魯智深でも

辨慶でも、グウと行き詰り升た、庵主は實に夜逃でも仕ようかと、思ひ升たが、又考へて見れば、懸意でもない、宿に泊つて、宿錢も拂はず、西洋人を椅子でブン毆つて、氣絶さて、其椅子の、破れ賃は、宿屋に出して貰ひ、夫から其の中で、寢像の悪い爲めに、火事を出して、半焼けにして、其の損害も拂はずして、夜逃げをしたらば、丸で泥棒より、悪いので、人間ではない事になり、升、自分も將來は、是でも、一廉の男に成つて、世の爲め、人の爲めにも、成りたいと思ふて居るのに、若し是れで、生涯の履歷を、傷け、男らしく、無いことを仕ては、此れ切りの人間になつて、仕舞ふから、何でも、體の肉を裂いても、金の工面をして、拂はねばならぬと思ひ升て、其日は、一寸も外に出ず、頭も割れる程考へ升て、風斗新聞で、大阪の、俠氣あると聞く、或る紳士の、名前を見付け出し、升たから、先づ無駄と思ふて、此人に、手紙で、十圓金を借る相談をして見ようと思ひ升た、其手紙の、大要は、手前は、全くの野浪人で、四五日前、當宿に泊り、昨夜、寢像の悪い爲めに、夜具で、火鉢を、刎ね飛ばし、ボヤを出し、損害要償の、談判を喰つて、困つて居り候が、一人の知人も、無く、當惑致し、居升が、お名前を聞き、御相談を致し、升が

若しお差支が無くば、金十圓拜借致し目下の苦難を相凌ぎ度勿論返済の義は今日より何時と申覺悟も無之候得共必ず御高恩を忘却せず御返上申時機あると確信罷在候間出來得らるゝ義ならば恩借仕度云々と云ふやうなことを書いたと思ひ升其手紙を出した翌日の晩方金十圓の爲替手形入の郵便が舞込んで來升た時の庵主の嬉しさは今日筆にも口にも盡され升せぬ、『おちぶれて袖に涙のかゝるとき人の心のおくぞしらるゝ』と云ふ歌の如くコンナ時でなければ自分の心も人の心も分り升せぬ庵主は何時にも知らぬ人が困つた咄しを聞き升時は此時十圓の金を見ず知らずの庵主に貸して呉れた人の心根を考へ出し升て大低十圓宛を幾人となぐ送つた事がムい升此は其人への報恩と思ふて居り升其後其貸主と至極惡意になり升て今日まで相互ひに忘れられぬ友達になつて居り升此が十圓借た顛未でムい升一寸一息して跡を申上げ升

第十席

エー借金譚も段々喋舌進み升て第九席も相濟此十席を以て一と先づ打止めと致し升が元々借るが本業でムい升から喋舌れば喋舌る程數限りはムい升せぬ上は大臣元老銀行會社から知人朋友茶屋の喫藝者女中より車夫馬丁出入の職人小商人に至るまで大なり小なり借らないものは實に各階級を通じてムい升せぬから種の盡ると云ふことはムい升せぬが其内で餘りキマリの悪くはない外聞の悪い中にもイクラカ我慢の出来る分丈り二三件申上げたやうな次第でムい升段々五圓三圓から借り上げ升て終には米國のゼービーモーガン氏に向つて一億三千萬圓まで借り込みに行き升たまでのお話は實に只今考へ出し升ても噴き出すやうな面白いお咄がムい升が之れを一々申上げ升には第一庵主に面目ないことの有ること夥多第二當時のお役人様方に關連した議論を申上げねばなり升せぬ夫では此の先きも借りて食つて行かねばならぬ庵主の營業上のお得意様方を

皆な四九尻る譯になり升から即ち營業妨害と相成升から足元の明るい中此位で御免を蒙り逃げ出すやうな次第で、へい若し此以後何とか運が向いて來升て、兎や角借らずに徹かに飯丈けでも食へるやうに相成升たら年期の明いたお三どんの如く、永年我慢したお店の悪口旦那の妾狂ひから奥さんの嫉妬番頭の小盗からお嬢さんの掴み食まで、洗ひ酒ひお喋舌を致し升て溜飲を下げやうと思ひ升から、夫までの御辛棒を願ひ升一體庵主は比類のない變テコな性質がムい升て金は借りても頭が下げたくない、貧乏で居ていて威張りたい金が無く、贅澤がしたい人の世話になることが嫌ひで人の世話はしたい力の強い癖に弱い者を助けたい、若い癖に年寄と交際したい、學識の無い癖に六ヶ敷いことを知りたい、錢の無い癖に高い物が買ひたい、財産の無い癖に金持と競争して見たい、自分は正直で居て悪い奴を遣つて見たい、人に物を貰ふことが嫌ひで人に何でも遣つて見たく、腹を干しても構はぬ癖に甘い物が食ひたく、女が嫌ひで居て女に惚れられて見たい、ナカと手前看板で恐れ入り升が先づコンナ心持で、フワ〜と此の世を煙

のやうに、其日々々と暮して參り升ので、ムい升から借金で世渡りを致すよ外仕方がムいませぬ、諺に稼ぐに追付く貧乏なしとか申升が、庵主は借るに追付く金持なしと申したい位で、ムい升庵主が借りてズン〜思ふ儘のことを致し升て、夫から稼いで一生懸命になつて返し、又た借りて遣つ付けると云ふ、其日庵式の真似事は、金持では出來升せぬ、昔時庵主の友達に蜀山人と申す、暢氣な爺夫が居り升て、狂歌を讀み升た

酒のめば、すぐに心も春めきて

借金鳥も鶯の聲

とやり升た庵主も不味ながらも、負けぬ氣になりて、一寸とやつて見たくな

り升た、
かくばかりかり倒しても、武藏野の
はらには、盡きの黄金草かな

へい長々御退屈さま

法螺の説

第一吹

世の中にサンデーと云ふ雑誌屋程五月蠅く押の強いものはない、一寸の物の云ひ様に付け込まれて初めて義太夫論を書かされたが、連の盡にて、田舎成育の藪雀め愚圖々々下らぬ文章でヤツトの事で済んだかと思ふ間もなく出し抜けに勝手な社告を振り舞し、今度は刀劍譚だ、今度は借金譚だ、次から次に追駆けて煽立の風に漕ぎ出す硯の海の麓瀬戸を筆の水棹で掻き渡る、覺束灘の向ふ風波々々ならぬ文字が闊、ヤツトの思ひで漕ぎ付ける、湊の見えし其時に又も社告の旗の手に今度は法螺の説なりと、黒黒々と現はれしに、ガツカリする程勇氣落ち、今度は御免降参だ、庵主が世渡る商賣の専賣特許の法螺種を、君等が様な鼻糞を丸めたやうな書生等が飯の足しなる滋養劑に賣つて食ふとは不届ぢや、此れ許つかりは御免ぢやと云へば雑誌

屋ドツカリと尻をまくりて上げ上座願の街に交番がないとて、勝手な熱を吹き、我等が頼みの法螺説を書ぬとあれば是非がねえ物の道理と云ふものが、お前の耳に入るならば、我等が云ふこと、好く聞な、日本五千萬の國民に、位の尊卑と貧富の差別はあれど一人でも國の平和の保険料税金拂はぬ商賣は、只だの一つも無きぞかし、竹の籬の鳥追ひも、破れ三味線の門付けも、夫れ相當の上納を濟ませて後ちの金儲け夫れにお前の商賣は法螺を資本で借金、儲けたやうに借り盡し死ぬるを見當ての證文を受取りに差出して、今日様を馬鹿にして、暮して行とは俗に云ふ鑑札なしの地獄業併し、浮世は廻り持ち見離す神の其の後に助くる佛のサンデーが世に有り難き文明の耳目と云ふ看板に、帝都の花と公けに人も稱へる商賣の雑誌の端に載せると、お慈悲に書せる法螺説を、只だ食ふ罪の税金と二つ返事で三つお辭儀何でも書いて宜敷と、素直に出るが道理だせ、嘘へ生れが九州で根性ツ骨に筋金が這入つて居ても、日本の生馬の目を抜き通し、横着筑紫で一生活を、胡魔化すことは駄目だよ、其上お前の文章は下手で、長門の恐れがあつて、周

防もないとは思へども、チヨト三田尻の節々に山口ありて安藝が來ず今は讀者も廣島で春の初めの賣れ高は部數も茲に五萬餘部祝ひ目出たの若松と小倉音頭や追分に祝杯擧ぐる其の箭先き書くの書かぬと云はれては此の商賣の福浦を繰り出す紅茜の小田巻に絲の六連れの始めだから、愚圖愚圖云へば此の我等が榮螺の如き玄海を食はしてまでも書さにや置かぬ馬關にするなと洒落られて弱い尻には屁の音さへ備中と云ふ返答も出來ぬ始末に氣も沈む心を獨り播磨海幾瀬の波に漂ひし法螺屋の店の看板と長年仕似世たお得意と御最良様の袖褌に縫りて茲にポツ／＼と法螺の因縁吹立てゝ責めをば塞ぐことゝはなしぬ

第二一吹

一體法螺と云ふものは、大きい嘘を吐くことにて嘘と云ふものは人間の一番悪い行爲としてあるが、悪い行爲だから一切之れを吐かぬことに嚴禁したら、人間の交際は丸で石地藏の頭を鐵槌で敲くやうなものである。一

口物を言ふてもカチン／＼と音がして強く打てばパツと火が出る、夫から決して敲きバナシにしては濟まぬ即座に祟りが來て悶着と云ふ罰が當る之れに反して嘘即ち法螺を吹けば天下太平社會圓滿にして他の禽獸社會と隔離した進歩的文化の社會に入るのである、今假りに一寸其狀態を試みに記述して見れば、女が醜るい男に會たとき貴君は實に不味い顔です、ねーホントにヒョットコのやうですと云ふたら其の男は屹度怒り出すに違ひない、又男が鼻の低い肥滿的の女に會つた時貴嬢は實に婦人として始末の悪い顔で丸でお多福の標本のやうです、ねーと云ふたら其女は泣き出して腹を立てるに違ひない、之に反して其の不味い顔の男を見て女が貴君はホントに御愛嬌のある御様子の好いお方です、私は殿方の柔弱した方は厭ひです、わと云ふたらドンナ男でも怒る氣遣はない上にニコ／＼して御戲談もんです、咄者などの顔は貴嬢方の御批評に乗る造作ではござりませぬなど、謙遜の挨拶をする、又其の不始末な顔の女を男が見て貴嬢は實に福福しいお顔でお立派なお體で一寸お目に懸つた丈けでも好い心持で貴嬢

見たやうな方を與さんになさる紳士は實にお羨やましいことに存じますなど、遣つ付けると其お多福先生内心クスグラれる程喜んでアラ厭やですよ、御様子の良いこと計つかりおつしやつて私などはモ一鏡に向いて親計り怨んで居りますやうなことでなど、云ふけれど其の實非常の恐悦で直に菓子や饅頭の有り丈けを放り出して間が能ば晝飯の御馳走位には直有り付るのである、之れ即ち嘘の徳にて嘘なしでは一日も立行かぬ證據の一つである、其の他冠婚葬祭の事より政治の經濟生活状態に至るまで、法螺ななくては貧乏ゆるぎも出来ぬことにて、社會萬般の活動は法螺を以て釘付けになつて居るのである、人の子が元服するのに、貴様の子は馬鹿だから元服なんか止して置けとは云へぬ、貴様の娘はマダ寢小便をする癖に婿なんか持たしても駄目だとは云へぬ、貴様の親父の死だのは元々、腦溢血だから當り前だ、是から君も樂だらうとは云へぬ、貴様は平生不品行な癖に先祖の祭などは生意氣だ、昨夜買った藝者を手傳に呼ぶなぞは不都合とは云へぬ、其他政府の役人は議會に出て、又た厭やな乞食議員の舉足取りが集つた

本大臣が此席で諸君にお目に懸るのは實に嘔吐をばく程不愉快だとは云へぬ、議員の方も議案などはドウでも好い、イクラか錢を與れて舉句に政府を明渡せば夫で好いと云へぬ、其他社會は嘘吐き許りで練り上げて其の嘘が口癖になりて居る、三錢の買物をしても毎度有難うと云ひ始めて會ふた藝者でもアラ旦那何處かでお目に懸つたやうです、今夜は嬉しいわなど、ズバ、嘘を吐きつ放なして世を渡つて居る、總て是れが浮世の有様である、此以外に吾人の生存すべき浮世は坤輿の上に決して發見することは出来ぬのである、殊に軍事外交の如きに至りては嘘と法螺との吐きつ競らで、吐き負けた方が大損をするのである、詰まり國家の命脈は懸つて嘘と法螺にあると云ふてよいのである、之れに付いて面白い法螺咄がある、昔時支那三國の時に、諸葛孔明と云ふ手の付けやうの無い大法螺吹きが、呉の周瑜と云ふ、羨でも焼いても食へぬ軍師を法螺で吹き飛ばして己れの國を救ふたことがある、孔明周瑜に會ふた時、周瑜が魏の曹操が百萬の大軍を率ゐて江を蔽ふて、漢吳を攻めると云ふは實に一大事の軍だが、君は何と思ふて

居ると云ふと孔明は、落付拂つて、君程の大將が曹操が何で軍を起すか位の事が分らぬでは、呉の危きこと、累卵の如しだと云ふと、周論は、今度の軍は呉の危きは勿論だが、君が國の漢だつて同じことだと云ふと、孔明は、夫が君の考へ違ひた、僕の國を攻むると云ふが、曹操の大嘘で、其實は君の國を攻むる爲めの謀だ、僕の主人の玄德の友達で、今曹操の家來になりて居る、欽旦と云ふ奴が使に來て居る、其の主旨は、今度曹操が軍は呉を攻むるのが目的だ、漢の國は呉を攻め取られては、立場がない、故手出しさへせねば、曹操は決して漢を侵さないことを盟ふ、故其積りで居て、呉れ併し、表向き漢も攻むると云ひ觸して居る、故漢も表向き、丈け、兵を三峽まで出して、其砦を守りて居よ、左すれば不意に通じ、抜けて、呉を攻むるのだと云ふて、竊かに人質を送して居る、君とは古き、付合の友達だから知らすが、今曹操がソナナ甘いことを云ふけれども、呉を攻め亡ぼした後は、直ぐに漢を攻むるかも知れぬ、元來曹操と云ふ奴が、僞りの多い畜生だから、何とかして君の方で、シツカリ戦つて貰はないでは、兎ても漢の小國では、手向ひが出来ぬと云ふと、周論は、頓と困つた

顔をして、今天下を三分して、呉漢魏で、其の一分づつを持つて居るが、實力は曹操の奴が三分の二を持つて居る、割合だ、夫に漢が中立して、其三分の二の力を擧げて、呉の一分に總掛りに來ては、僕の國は亡ぼされぬまでも、片息になりて仕舞ふ、君は一體工夫者で、所有困難を凌いで來た人だが、何とか曹操を追ひ反す工夫は有るまいかと云ふと、孔明は、夫は無いことはないが、其工夫は何分君に向つては云ひにくいと云ふ、周論は、膝摺り寄せて、僕が困つて君に頼むのだ、遠慮をして、教へて呉れぬのは、怨だと云ふ、孔明は、サモ云ひ悪くさうにソナナラ云ふが、曹操に君が二つの物を遣りさへすれば、屹度出し、掛けた軍も引返して中止すること受合だ、と云ふと、周論は、ソリヤー、二つ位は、恐かなこと、若し今度曹操と戦へば、僕の國は大部分メチャクになるから、其の二つと云ふは、ドンナ物だと云ふ、孔明は、サ、其の二つと云ふは、女だ、今呉の國に、大喬小喬と云ふ美人がある筈だ、此の二人は、四百餘州で、比べ者の無い美人で、人は之れを、閉月羞花、沈魚落雁と評して居る、其の二人が、愆しい爲めに、攻めて來るのださうなと云ふと、周論は、大口を開いて、笑ひ出して

馬鹿ア云ひ玉ふな、假りにも曹操程の奴が女二人が慾しい爲めに、百萬の大軍を起すものかと云ふ、孔明頼りに眞面目になり、サ、僕も始めはソ、思ふたが茲に争はれぬ證據がある、夫は曹操、天下を殺掃して已に八分の霸權を占めて居る、只だ残りて強いのは呉計りである、其外の望は酒と女である、君も聞いたらう、一昨年の秋から銅雀臺と云ふ大壯な高樓を築き、此れも漸落成したから、是でソ、呉を攻めて彼の大喬小喬を生捕つて、往いて此臺上の花となし、黄金、瑠璃の酒と共に戯れて遊ばふと云ふ計畫だと、さう云ふ、周諭は矢張平氣で、夫は君の想像丈けで別に曹操から聞て来た譯ではあるまいと云ふ、孔明はサ、ソ、聞いて来た、と云ふ譯ではないが、曹操は己に其子曹子建をして銅雀臺の賦と云ふ歌を作らせ、又平陽、雲池より樂官を召して、樂譜を付けて、詠はせて居る、今魏の國の女子供は知らぬものはないので、守つ子までが市町を諂つて歩いて居る、せと云ふ、周諭少し氣色を變へて、夫はドンナ歌だと云ふ、孔明少し困つたが、即席で夫は斯様々々の歌だと、出鱈目に歌を作りて、曹操の威勢、日月の天に懸るが如く、四百餘州の草木

を靡かして、今小弱の分際で、魏に及向ふ、呉を打亡ぼし、宇内に美人と諂はれたる大喬小喬を伴ふて、銅雀臺の花月に遊ぶの詩を謳ふて聞せた、之れを聴いた周瑜は、眼を眩らし、拳骨を握り、ウーンと牛が糞を垂るゝ様な腰付をして、魏の方を睨み、アノ曹操のドッ畜生、今にドウする見て居やあがれ、孔明君は能く云て呉れた、僕は呉の國に人種の盡きるまで曹操と戦かひ、アノ畜生の首を斬りて踏みにじらなけりや、堪忍ならね、と云ふから、孔明占めたと思ひ、オイ周瑜君は夫がイケない、君がイクラ威張つたつて、兎ても叶はない、ソ、コ、デ、僕が心配をして、彼の二人の女さへ見付け出して、曹操に渡して、和睦すれば、戦はせぬで、済むから、只だ君程の大將が、今日まで、曹操と互格の仕事を、して来て、今更女を賄賂に遣つて、和睦をしたと云ふては、未代までの名折れだから、僕は云ひ悪くかつたが、春に腹は換へられぬ、君一番我慢をして、今度丈け其女を遣て、災難を逃れて、又た跡の工夫をしたら、好いちやないかと云ふと、周瑜は身震をして、止して呉れ、モ、云ふて呉れ、孔明君實は其の大喬小喬と云ふは、此間妹の方は、僕の妻姉の方は、先主人討虜將軍の後

妃にしたのだ、アノ曹操奴人の噂を奪つて往て樂む爲に高樓まで拵へてモ
 一取つたものゝ様な歌など作りて、人民に謠はせ毎日〱僕等主従の恥を
 市町に曝すナンテ、彼奴の肉を鹽辛にして、唐辛子を振り掛け、酒の肴にして
 も飽き足らぬドツ畜生だ、僕はモ一決心をしたから、君此上は何にも云ふて
 呉れな、見事曹操を打破りて見ると云ふから、孔明非常に驚いた顔をして
 コリヤ一大變な失禮なことを云ふた、夫れちや一、大喬小喬は君方の奥さん
 か、僕は些とも知らないもんだから、今更謝りようもない仕合だ、併し咄しを
 聞けば尤だ、君が其決心ならヨシ遣り玉へ、僕も屹度見ては居らぬ併し儲か
 つたら分け前はイクラか呉れ玉へ、左様ならと早々に歸つて來て、直ぐに手
 下に云ひ付けて、其の即席料理で拵へた銅雀臺の歌を印刷して、廻はし者を
 魏の國に入れて、女や子供に此の歌を毎日謠ふて、市町を歩けば、一日に金を
 三圓遣ると云ふて、廻はらせたら、三日目には皆んな謠ふようになつて、仕舞
 ふた、其時周瑜は人を魏の國に遣つて調べて見ると、銅雀臺は雲の大空に聳
 へ、其の廻りには、曹操が攻め亡ぼした列國の旗を建て飾りて、其中に吳の國

の旗も建てゝある、市中の女子供は、連節で銅雀臺の歌を謳ふて居る、此の由
 を周瑜に報告する、周瑜は愈々怒る軍になる、孔明は此の法螺がズドンと當
 りて、一兵も動かさず、周瑜が一人で曹操の喧嘩相手になつて呉れて、大儲け
 に儲けて、漢の國は五割八分の利益配當をしたとのこと、此の咄しも或は法
 螺かも知れぬから、讀者諸君は眉に唾でも付けて、用心して讀まるゝことを
 希望します

第三 吹

前説に段々述ぶる如く、法螺と云ふものは人間の悪行爲としてありなが
 ら、一方社會活動の原動力を司どりて居るもの故、吹かざれば靜止したる池
 水の如く、直ちに腐敗して、蟲を生じ、青苔惡藻之れを蔽ふて、社會は見すゝ
 陰屈なる裏面の生活に、罪惡のみを犯して、生存上の活氣を發揮することが
 出来ぬようになる、併し世人が第一の誤解は、此法螺は其人の謹慎で吹かぬ
 丈で、吹けば何でもなく、吹けるものと思ふて居る一事である、却々法螺と

云ふものは容易のことにて吹けるものでない、一盞法螺を吹くのは其の必要と目的があつて吹くのである。夫れに吹いて見ても人が聴いて呉れねば全くの無駄事にて、聴いて貰ふには夫れだけの信用がなくてはならない。信用が下品で、吹くだけでもいけぬ法螺を吹くだけの學問がなくては其の吹く法螺が下品で聞かれない。學問丈けでもいかぬ、夫れだけの修業と熟練と経験と資格を持たねばならぬ。此等のことが具備せずして、只だ法螺丈けをブー／＼無暗に吹いたとて、人が郵便馬車や電車の通行程も注意して呉れぬ。左すればホンの無駄法螺で吹かぬ方が餘ッ程利巧である。夫れから法螺學の原則として、古來より傳はりて來て居るものは第一(大黒吹)此れはニコ／＼笑ふて誰にも穩かに吹けども、吹けば吹く程聞賃を出さねばならぬ。即ち損をする吹方にて、常に打手の小槌から小判をバラ／＼出して吹かねば人が聞いてくれぬ。吹方なり、第二(恵比須吹)此れは愛嬌タツブリ常に中腰になつて吹けども、良き鯛の利益は釣り取りて、何時も儲かる藝者仲間などは此の吹方なり、第三(辨天吹)此れは萬事派手にグニヤ／＼して吹く事にて、當世の氣取屋、ハイカラ的

此なり、第四(毘沙門吹)此れは伊勢蝦國の憲兵見たように萬事トゲ／＼許りに吹く兵隊的の吹方なり、第五(福祿吹)此れは萬事柔和にしてお鬚の塵を取／＼お詣的に吹く事にて、官吏が月給勳章爵位等を得るを目的に吹く筋なり、第六(壽老吹)此れは物の分らぬこと夥しく、氣は頭と共に長く薩摩人が内閣を拵へたように鶴や鹿など鳥獸のような物許り、左右に置いて獨りニコ／＼得意があつて吹いて居る筋なり、第七(布袋吹)此れは矢張り愛嬌タツブリ八方美人的に、長州人の拵へた政府の如く子供の様な物許り、同僚に集めて、只だ自分の云ふことを聞きさへすれば愛撫して何か途方もない、經綸でもある、如く大きな經綸袋を見せびらかして、便々たる腹を大得意に出して、自分一人大政治家と思ふて威張つて居る式の吹方なり、以上の吹方は日本古代の吹方にて、之れを七吹神と云ふ、後世誤まつて七福神とするは迷信多き俗間の習しなり、中古の頃更らに吹方發達して、竹貝吹(一名駄法蛾朝顔吹)一名喇叭吹(一名垂吹)一名坐蒲團吹(庵主などは此流派に贊を執つて修業したもの)に屬す、又德利吹(此は腹に吹方を一杯貯へて事に臨みブクリ／＼と吹く醫學士

文學士などの吹く法式なり、瓢箪吹此は一番熟練を要する吹方にて腹のド
ン底にウント法螺力を貯へて中途に吹けぬ振りを見せ卑屈に吹き負けた
かのようにして、或る必要の程度丈け咽に小溜りを拵へ其の吹くに及んで
も根張り強く、ブク／＼タラ／＼ドブ／＼と緩急宜を得て吹く彼の強慾な
金持若くは物の道理の分らぬ大銀行家杯の吹く一番性質の悪い吹方なり
夫から近代になりて新式の吹方二三起れり、パロメーター吹此は自分に一
定の見識なく、其の當時に於ける空氣の乾燥加減若くは低氣壓の濃淡則ち
世間や人の肩尻りの上り下りを見て先方次第に意を迎へて所謂投機的法
螺を吹く法式なり、海岸吹此は世界的法螺の吹方にて墮落議員や食詰め浪
人の洋行歸りなどに吹く筋なり、大陸吹此は探檢若くは發見など、格別の役
にも立たぬ殻法螺を、無暗にブ／＼吹き廻る吹方なり、以上列記する吹方
が先づ法螺の原則にて世間大抵法螺を以て渡世する者は此の範圍内を出
でぬのである、併し今法螺屋の看板を上げて居る内に新聞屋の吹く法螺は
眞の竹貝吹き即ち駄法螺許りにて國家を解釋せず、社會を解釋せず、其他政

治經濟外交法律に至るまで、更に一定の見識だもなく彼のムク犬が花電
車を吠えて驅つクラをする如く、社會は如何なる妙感によりて活動しつゝ
あるか、國家は如何なる無線電信に觸れて運動しつゝあるかも識別せずし
て、只だ最も淺薄なる知識に生存する社會の渦中に投合して、嘘八百の駄法
螺の記事を滿載すること、恰も清潔社の芥車の中を覗くが如き紙上に筆を
舞はし人を傷ひ世を過るは雪駄の裏から蚤が食ふた程も感せずして、嘘や
法螺を吐くのは我等の商賣だと云はぬ許りの顔付をして、一枚でも自分の
新聞の餘計に賣れるを得意がる此を法螺の最下等となす併し此の駄法螺
専門の新聞を買ふて讀むは社會の罪にて、何程高尚がつても、賣れぬ新聞を
書いては、商賣にならぬから、根本を糺せば社會が劣等なので、此等新聞の賣
れる間は社會は駄法螺好きと斷定せねばならぬ、此から追々法螺の吹方を
陳述すべし

第四吹

往昔印度人の癡言に方便の謀計は菩薩の六度に構ひ愛着の功德は達多
 が五逆に勝ると云ふとがあるさうであるが此れは人を救ふの方便なら謀
 計をしてもよい私の爲めの功德は惡逆の事に同じいと云ふことであるさ
 うな庵主は或る時人を訓戒するの方便に一寸法螺を吹いて其人の心を救
 ふたことがある夫は今を去ること二十年も前六七年振りに郷里の福岡に
 歸つて再び上京する時マダ汽車のない時故博多の港より佐伯丸と云ふ大
 阪商船會社の小舟に乗り込んだ處が丁度今は故人の星亨と云ふ人と一處
 になつたソデ舟の中を見廻はすと一等室に五六人の乗客があつて其中
 の二人は碁を打て居る一人は鼻鬚のある黒紋付の羽織を着た何でも長崎
 の代言と言ふこと一人は二等室の客で縞の羽織を着た商人風の人と頻り
 に黒白を戦はして居る而して庵主は元來幼少より碁と云ふことには特別の
 興味を持つて子供の時に少々打つて其の面白さが尋常でなく一二度徹夜
 したことがあつたら或日父の膝下に呼び付けられ物知らかに懇々説諭を
 受けた其の要領を今も記憶して居るが人間と云ふものを神が天地の間に

産んだのは自分一人の爲めに生命を興へたのではない多くの人の爲め廣
 い世間の爲めに出來得る丈け働かせようと云ふ希望に相違ない左すれば
 何事によらず一つの技能を磨いて志を世の爲めに立て盡力せねばなら
 ん其の技能を磨く上には其の興味に耽ると云ふことは善いことである然
 るに茲に能く心得て置かねばならぬことは此の耽ると云ふことが惡事に
 傾きたがるものである善事に耽るのは結構なことであるが惡事に耽るこ
 とは斷然止めねばならぬ夫等の總てのことに第一善惡の辨別を付け又其
 の惡事に傾く時に斷然と踏み止まりて其の耽ることを善事に振り向ける
 力を養成する爲め學問と云ふものをするのである此頃貴様は碁に耽けつ
 て夜も寝ぬさうである貴様は世の中での爲め人間生存の大義として碁に上
 達して志を成す積りなら兎も角も一時の遊戯の爲めなら其の人間の本義
 に對する志の基礎を建て此の志を養成する丈けの學問を修むるまでは遊
 戯に耽ると云ふことをしてはならぬぞ之れは親の威光で差し止るのでは
 ない能く考へて見よと云はれた性質人の云ふことを聞かぬ庵主も此の慈

愛深き父の訓戒は今ま尙ほ忘れぬ程身に染みた故其の日より聊かにも人世の爲めに志を成すまでは決して碁石を手に觸れざること父に誓言した夫から如何なる場合も碁石を持つたことがない併し好きの道は仕方のないもので東京に住居するようになつても常に閑暇を偷み碁客を招き碁を圍ませて之れを見るを無上の樂として居たので今は故人の本因坊秀榮や安井算英や今の本因坊秀哉(前田村保壽)や中川龜三郎(前石井千治)などをして碁を打たせ碁盤の側に寢所を布かせて徹夜して見て居た。そこで少しづつ碁の理窟を解釋することになつて來た位故人の碁を見ることは此上ない樂である所に船の中に碁を圍んで居るから無上の退屈凌ぎと思ひ早速其の傍に坐して見た處が代言先生と綺の羽織は互ひ先で打つて居る然るに庵主の見た處では慥かに代言の方が商人より二三目位弱いのである。夫を商人の方は態と悪い手を打つて勝たり負たりして居る。其中に又た發見したのは此兩人は目碁即ち一目何程の賭け碁を打つて居るのである。ポイイに咄を聞いて見れば兩人とも長崎より乘つて昨日の晝より徹夜を

して代言先生六七十圓取られて居るソである。庵主等が見てからも五六番打つたが何時でも代言が勝つ時は五六目若くは十二三目で商人が勝つ時は押碁同様にゴツソリせしめるのである。夫から商人が負ける時は非常に苦められて代言先生大得意である。庵主は此れを見て實に悪い奴もあるものと思ふて其商人の碁を能く見るに何んでも力碁ではあるが柔かな所があつて慥かに初段か夫れ以上の力はあるとも以下ではないと見える所が舟が馬關に着く時代言先生は目も紅くなつて最早睡むいから少し休むと云ふて庵主等に挨拶をしてケビンに寢に往つて仕舞ふた。其の跡で彼の商人は頻りに手持無沙汰な風をして咄しなどをして彼の代言の碁の筋の良いことを譽めて居る。夫れから自分が碁が執心でと下手碁横好きの咄をして居る次に庵主等に向つて一面打つては如何と勧める。其の勧め方の巧いこと云ふものは却々尋常一様でない側に居る者も釣り込まれて頻りに庵主に一番遣れと勧むる。夫れから只さへ氣短かの星氏は躍氣となりて庵主に勧むる。庵主は碁は知らぬ解せぬの一天張りを以て断れども却々四面

の退屈組の鋒先鋭どく、アノ位基を見て居て知らぬ筈がない、勝敗と強弱は興味の本だから是非一番遣つて見よと云ふ而して彼の商人は碁盤を庵主の膝先きに突き付けて挑むのである、茲に至りて庵主の一種の性癖が腹の中に湧き出て来て此の悪漢泥棒に均しき手段を以て旅客の囊中を覗ひ金を掠むる好し、一法螺吹いて荒肝を抜き間が好くば魂性を敲き潰して呉れようと風斗決心をして俄かに態度を易へ左も鷹揚に構へ君が夫程云ふなら一番お相手を願はふが君は碁基を打つて居るようちやが賭けるかドウちやと云ふと商人ビヨコビヨコ頭を下げイヤモウ船中のお慰みでございませうからお手割によりては奨励みの爲め色を付けましても宜うございませうと云ふソコで庵主はイヤ、手割のことなら今朝より好く見たから大體分つて居る甚だ失禮ぢやが君先をして呉れ給へ賭方は先きのお客さんの通りで良いと云ふて庵主が坐り方を易へ斜に構へて白の碁石を取り側のカバンより昔の銀行紙幣の百圓束を出してグット下た腹に力を入れて身構へた處が一座の面々顔色を易へ星君を始め君は大變強いのだなア云

ひ片唾を呑んで見て居る處が彼の商人先生有がたうございませうと、黒石を取つたが彼は慥かに初段の腕のある奴だから今我等の碁を見て手割は分つて居る先をしると云ふ者天下に十數人の外ない必ず段碁に違ひないと、思つたらうと察しられるソコで商人腰を下げて曰ふには、憚りながら旦那様はお國はドチラでございませうと云ふから我等は東京だと云ふと、今回はドチラにお出になりなりましたかと云ふから福岡に往たと云ふと、福岡には小川様と申て方圓社の初段の生先が居られますが、お手合になりましたかと云ふから、占めたと思ひ、小川は福岡に往けば何時も打つと云ふと、ドーナお手割でございませうと云ふから、ウー彼れは元々定先で打つて居たが、此頃は少し我等が仕合せが好く打込んで二ツが交ざるやうになつて居ると云ふと、ハ、左様でございませうか、豊後の日田の五岳長老とお手合になつたことがございませうかと云ふから、ウー彼等は、大分弱わかつたやうじや、先年彼の地方に漫遊した時に打たが慥か六つで打つた様じや、といふと、彼奴目色を易へて、一體旦那様のお名前は何と申ますと云ふから、嘘も云へず、

仕方がないから、杉山だと云ふと、彼奴ビツクリ仰天碁石を直ぐに碁盤に上げて、席を下がつて九拜三拜コレハ、杉山先生でございませうか、左様とも存じませず、言語道断の失禮、平に御免下さりますやうと、頻りにビョココ、詫言を言ふから、一時形勢甚だ峻悪なりし庵主は、俄かに優勢となつて、君が折角のお勧めであるから、お相手を願はふと思つて居るのに、俄かに止めるとはドウ云ふ譯だ、御互碁道を樂む者が儲まで極めて、打試みもせず、止めるとは更に僕、其理由を解せぬかと云ふと、只モウ誠に失禮許りと云ふて居る夫から、庵主彌々圖に乗り、君は田舎で、初段は慥かに打つてせうと云ふと、へイ、へイ、イヤ、モウ、屁暮でございませうが、折節、東京からお下りになつた先生方に願つた事がございませうが、初段の免状を取れ、取つて遣らうと言つて下さつた方もございませうが、微力でございませうから、中々免状などは思ひも寄りませず、今日まで取りませぬと云ふから、夫ならお咄しをするが、君免状を取つては商賣が出来まい、免状を取らずに、田舎のザル碁の椋鳥を相手に、手割を好くして儲け碁を打つて渡世をするは、獨り碁道の悪業のみならず、人間

のあらゆる悪行の中で、最劣等のに憎むべき所業である、此の世の中に君より弱い碁打で飯を食ふて往きつゝある者が、澤山あるから、君ドウじや、若し止められるなら、ソナナ所業だけは止めてはドウじやと云ふと、商人先生、顔を眞赤にして、重々厚き御教訓、骨身に透りて有難う存じます、屹度此後を慎みまして、御意見を守りますと云ふから、初めてお目にかつた方に、甚だ失禮を申しました、マア一杯飲んで、お休みなさいと云つて、葡萄酒を一本と、果物を少々遣つたら、コソコソ中等室の方に往つて仕舞つた、夫から東京に歸つて碁客共に其咄しをする、一同アツと轉倒つて笑ひ出し、夫は大村の勝と云ふて名高い儲碁打で、慥かに初段打ますと云ふから、夫れがナゼ我等の名を聞いて、閉口したのだと云ふと、夫は東京で、杉山博雄さんと云ふて、三段の碁客があります、大村の勝は、東京に來たことなく、圍碁の雑誌ばかりで、碁客の名を知つて居りますから、旦那が東京で、杉山と云はれたから、博雄先生だと思つて閉口したので、果は一場の大笑ひとなつたが、此れが庵主が一目も碁を打たずに、初段の碁打に勝つた法螺話の一つである、其後、星君が

其の話聞いて、庵主が何か云ふと、君又た杉山博雄式ではないかと云ふて冷笑して居つた。其後人の話しを聞けば、其の大村勝は長崎に基會所を開き、基の指南をして居たさうである。

第五 吹

段々論ずる如く、法螺は吹方の六ヶ敷い上に吹丈の信用がなくては吹けぬ故、自分の信用のあるメートル以上は吹かぬと云ふ事を忘れてはならぬ。今より十四五年前庵主が日本の經濟界のことを憂慮して、自分でも辛棒の出來ぬ程の苦心をして遂に米國のゼー、ビー、モーガン氏に單獨個人の資格で、一億數千萬圓の外資を借入れに往たことがある。夫は日本が開國進取の國是を定めながら、經濟丈は鎖國封閉であつて、政府が外債を募集するの外國民の事業に外資と云ふものゝ疎通をしたことがない。ソコデ數年の間身を焦がす程の苦心をして、經濟的憂國の法螺を吹いて見ても、上下の國民は聽いて呉れぬのである。夫から此れは自分の信用が足らぬのであるか。

少しも怨むることは無いが、國の困難は救ふことが出來ぬから、段々考へて一大決心をして、豫て聊かの關係を以て居る米國のモーガン氏に直接ブツ、カル事にした。庵主が此のモーガン氏を説く法螺の困難は、筆紙の能く盡す處でない。第一庵主は惡時機なる難藩の窮極に生れて、文明の學問を修めず、英語も英文も知らず、只だ名詞を五十か六十か許り探り覺えに知つて居る丈にて、米國の富豪モーガン氏に經濟的の議論をすること。第二、モーガン氏に對する自分の信用を確むる丈の紹介者なきこと。第三、資本を借りる丈の資格なきこと。此の三つの困難は、只だの一つでも、法螺や力業では打破られぬ困難である。ソコデ庵主は極度の正直者で、秘密の守れる米國育の人を證議して、兎や角手に入れた。次に自分は東洋に於ける、非常に大きい經濟問題の解決者で、其の事件に付いて、モーガン氏に面會の必要があると申込んだ。此れで、二つ丈の困難は濟んだが、サー、第三番目の困難、大法螺の實地試験に至りて、少し弱つた併し態々米國まで往つて面會までも申込み、弱つて居ては濟まぬから、只だ無暗に會ふて見て、ニユーツと顔を見たら何と

か工夫が付だらうと思ふて、兎も角約束の時刻に其の事務所に向つたら、直に應接の間に案内して面會した其の容貌は梟鷲のやうな目付をして、非常に荒らい、縞の服を着て居る親爺で、行成彼れが云ふには、能く此の國に來升た直に用事を聞きたいと、僕曰く、用は金借りに來たのですと云ふ、彼曰く、貴下は拙者に金を借る信用を持って居り升かと云ふ故、タントは持たぬが、貴君位の信用はあると云ふと、彼曰く、ドウシテ比較し升と云ふから、僕は貴君より年が若い上に健康も好い、智識経験思慮分別膽略決斷より、道徳心宗教心に至るまで、大抵貴君と同じ位と思ふと云ふと、彼れ曰く、成程夫から貴下は財産を持つて居り升かと云ふから、夫は貴君は同じことを二度聽くのだ、初め金を借りに來たのであると云ふたでないか、財産があつても無くつても差引足らぬから借らねばならぬことになつたのだ、則ちないから借りるのだと云ふと、少し笑ひを含んで、夫で何を引當てに借り升かと云ふから、政府を保證人に立て、日本の國を抵當で借るのだと云ふと、彼れ少し顔色を換へて、夫なら貴下は日本政府の代表者で、命令書を持って居り升かと云ふから

代表者でもなく、命令書も持たぬと云ひ升と、夫でドウシテ政府を保證人に立て、日本を抵當に仕升かと云ふから、貴君が借すと云ふて、條件が極まれば、僕が其通りに爲せるのだと云ふと、ナゼ政府の方から極めて來ませぬと云ふから、何道から往くも片道で同じことだと云ふと、ナゼ日本政府の方を先きに極めて來ませぬと云ふから、日本は僕の國で、米國は他國だから、他國の方で信用せねば、駄目であるから、他國の信用を儘かめて自分の國にかゝるが順序だと云ふと、貴下は華盛頓の公使星氏を知つて居り升かと云ふから、友達だと云ふと、此の話しを仕升したかと云ふから、話さないと云ふ、ナゼ話し升せぬと云ふから、僕が貴君と話すことに公使の必用がない、貴君との話の結果、必要が出來るだけの事が發生したら、話す積りと云ふと、日本の國は何程位の信用があり升かと云ふから、貸借の金高によりては、米國より以上の信用があると云ふと、其の理由はと云ふから、第一政治系統の正しいこと、第二抵當權の確實なること、第三山河の富源の剰多なること、此の三つは、儘かに米國以上であると云ふと、其の理由はと云ふから、第一萬世一系の

天子の命令は一家財産の全部を失ふた上、妻子眷族の生命を捧げても遵奉し、第二に國家は爪を立つる丈けも、經濟的主權を侵されて居らず、第三、狭く短かい距離の間だ、溢るゝばかりの人民と、富源とありて、其の天産地産を消化する元動力の石炭と、山嶽の左右に落下する水力と、安價なる勞力は世界無比に充滿して居ると云ふと、夫れがナゼ米國より信用が勝つて居るか、と云ふから、第一、米國は人權の自由平等を主として、黒人坊まで一人前の人權を與へたいと云ふて、七年間血液で杵を漂よはすの戦争をして、合衆國を拵へ、今日黒人坊は社會別種の待遇に辱かしめられ、人間らしき位置を有する者は、兵隊で、大佐が一人、少尉が二人、議員に一人と云ふ有様で、終ひに膚色嫌惡の増長心は、日本人支那人までも排斥するに至る、國家建立の精神は何れの時よりか、紛雜を極めて居る、此の後幾年経ても、リンチングの刑は白人にまで加へても、社會制裁の平等は、望まれぬのである、國家の命令は、議會の議定したる法律以外にないのである、第二、日本は國家を建設したる土地の所有權を嚴守し、彼の千八百七十年代の英國が、富の増長に重帶脂肪の重患に

苦しめられて、己れの富を外國に移轉させる爲めに、拵らへた法螺の非理非法的經濟論、萬國協同論と云ふ惡疫に感染して居らぬ、日本は暗に昔日より、經濟的大家のリスト氏の主論に合一したる、經濟法を遵守して、即ち國家は、其の國家の境界以内を己れの經濟的行爲で經營する責任がある、經濟的に平等を論せんとすれば、各々其の國家の境界線を取り去り、世界合邦の上、世界國を拵へ、世界政府を建設し、世界國民となりて、此の世界政府の執行する同一法律に服従して、初めて平等を唱へ得べし、泥んや經濟の原理は平等に非らずして、不平等である、英國は萬國協同論を唱へて、富を世界の各國に移轉し、世界に不平等の領土と不平等の富とを有して居るゆゑに、日本は現に國家の經濟權の基礎たる土地所有權には、爪形も入れられて居らぬ、只だ山河の富源が開きたいため、資本が入用であるゆゑ、資本の報酬即ち利息は、永久間達なく拂ふことが確實である、併し事業の利益は、即ち國家の境界線内を護衛する責任があるから、誰れにも遣る約束をして居らぬ、第三、國家の富源たる、山川の事業は、其の資本の報酬即ち利息が單に世界的の平

均に應用せらるゝときは、優に何事も、大抵一割を標準として計畫せらるゝを以て知るべし、且つ問ふ、米國は國家建設の大主旨、自由平等にあるが爲め、何事もエレクションの意味を以て決定し、絶えず國家の利益と、一個人の利害と、相衝突し、各州其の法規を異にして、國家の事件決定の統一を缺くに終り、次ぎには、經濟主權の維持の爲め、常に政治的經濟行爲に紛雜の手段を要し、國家の富源は、四方數千哩の廣袤に散布し、先づ運輸交通の機關に、尤大なる資本を投するの後に、於て事業利益の決定を見るを常とし、勞力の配置は、六千萬の國民ありと雖も、其の領土の過大に比すれば、偏在稀薄にして、其の器械に應用する人民の勞力さへ、需用供給の結果より、始終ストライキの意味を忘れて、使用する能はざるに至る、此くの如く論ずるも、尙ほ資本貸借に對する信用は、日本の現在を、米國に優勝ならずとせらるゝやと云ふたれば、モーガン先生頻りに苦笑に、次ぐに失笑を以てし、貴下の立論頗る面白し、經濟論としては、拙者も貴下に論すべき事あるも、今ま徒らに此の議論を戦かはすも、甚だ無味事でもあり、又遠來の客に對する禮儀でもないから、今日は

先づ此れまでとして、クラブで晚餐を差上げたし、夫れから拙者は前約の商いで、明日より一週間旅行をするから、貴下は先づ我々の經營にかゝるナイヤグワラ水力電氣所を始め、バアフワロー附近にある各種の事業でも視察せられたし、案内者一人を付けて出すからと、親切のことを云ふから、ハハ、此れは、好い加減にして、断る積りだナと推し、此方も好い加減に挨拶して別れた、夫れから翌朝に、ウキリヤム、スチーブン氏と、フレデリック、ゼニングス氏と同道して、ホテルを訪問し、其の書記二人に連れられて、各地の興業見物の赤ゲット組と變化した爾後一週間の後、紐育に歸りて來たら、モーガン氏が、明日十時に事務所に於て面會したいと云ふから、行つたら此の間より御話しの日本に金融する事は、朋友と相談もしたら、此れ〱〱の方法になれば、三分五厘の利息で、其の必要の金額を御融通申す事に決定したと云ふから、實は吃驚して、一二度念を押したら、俄然顔色を變へ、拳固でドント、机の端を敲いて、米國のゼービー、モーガンのイエスであり、升ぞ少しの疑念を扱まるゝことも、好みませぬと云ふから、荐りに其の無禮を謝し、其の翌日

假契約を拵へ貫ふて歸朝した丁度米國滞在が、一ヶ月と四日間であつた此れが今の日本興業銀行の起原で、何の考へもなく始めから仕舞まで法螺許りで出来上つた顛末の大略である、ハ、ハ、ハ、

第六吹

人間の盛衰と云ふものは何時來るやら分らぬものであるが其何れの境遇に遭遇しても法螺は吹かねば始末が付かぬものである。庵主が日本興業銀行の創設を政府に迫つた間は前後五年間である、其始め米國に行つてモーガン氏と假契約をして以來二三年間の庵主の法螺の勢力は素晴らしいもので有つたが、元々興業資本を低利永年賦で貸付ける銀行を拵へるのであるから、三年目よりは、豪富や銀行屋が此れは大變だ彼の銀行が出来ては吾々金融商賣人は高利貸が出来ぬことになる、高利貸が出来ねば一割だの一割五分だの配當を取ることが出来ぬ配當が取れねば株券がゴツソリ低がる、低落れば財産が減ると云ふ意味から騒ぎ出して、期せずして豪富一致

結合して、反對をして庵主等の唱ふる經濟論は不道理だ、不必要だ、不賛成だと直ちに政府内にある豪富の奴隸役人と結合して一大反抗を企て、來た夫れは尤なることにて、日本の豪富と云ふものは、悪事を働いたとは別として、其の富を成した歴史は、一度も國家の幸運に乗じて金を儲けたことはない、何時も國家の災厄非運に乗じて富を得たのである、第一西南戦争、日清戦争、北清事件、日露戦争等の如く、國家の厄難があれば其の禍中に投じて、國の命脈を縮めて散らす金を機敏に獲得せしものが、今日の豪富である、夫れから平常にあつては、經濟界が悪兆になりて、所謂恐慌と云ふ非運になりて來ると全國の商工業が苦み始る、其時に流眇に見て藻掻は、と云ふ顔付で、ボツボツ高利貸を始る、是で他の商工業は、飄殺しに遭ふ、日夜眞黒な煙を上げて器械から火を出して死ぬ程働いて稼いだ金は、豪富が居眠り半分に煙草をバク／＼させながら取上げて仕舞ふ、ソコデ銀行の配當が多い、株券は値が好い、身代即ち富は殖える、コンナ順序で來た處に低利永年賦で、何程でも金を貸して、確實な商工業を助けて遣らうと云ふ銀行が出来て溜るもので

ない、ソコで一致結合反對するのだ、庵主は已に政府丈の敵でさへ少々受け太刀の處に此の豪富高利貸屋の援兵を併せて敵にしたから一と溜りもせず粉微塵になされる處を俠氣ある先覺知人の援助を受けて、又二年間戦闘を持耐へた處が彌々落城の末期になりて、當時の首相山縣元帥閣下が憐れんで下さつて、日本興業銀行と云ふもの丈は拵へて顔丈は立て、遣うと云ふて下さつたソコで、一方豪富の主張にかゝる安利貸の出来ぬ高利貸の仲間に入るより外仕方のない富豪保護的の骨抜き興業銀行が出来上つた處が昨日まで不道理不費用不賛成と云ふて、五年間反對した豪富や銀行家が忽ちにして道理必用賛成となりて、彼の豪富の反對者二十三人は日本興業銀行の創立委員になつて仕舞ふた處で茲に不思議なことは、日本政府のお役人様は、世界に無い金持好きで、其人間が喩へ馬鹿阿房間拔髮手古連癩病肺病微ツカキ片目鼻ツ缺け蟹坊躰ツ子穢多乞食であつても、お金さへ持つて居れば諸君僕君吾輩皆さん私しお手前拙者など、云ふて何歎に付けて交際することを見得のやうに思ふ濟がある、昔時耶蘇は、汝の富は

汝の皿に盛る肉の腐れたるが如しと云ひ、釋迦は七寶を積んで山の如きも道眼より之れを見れば路傍の糞と云ひ、孔子は我れに於て浮雲の如しと云ひ、僕の親友のルーズベルトと云ふ人は、豪富を征伐して石油を注いで焼くがよいと云ふ然るに日本のお役人様は、豪富を懇心の神様にして、お燈明を上げて拍手を敲いて、拜み奉うと云ふのだから、實に日本と云ふ國は、豪富萬歳、豪富獨り舞臺の國である、ソコで高利貸の豪富を呪ふて失敗した庵主、お役人様の御機嫌を損じた庵主、右兩者の餌食として、翫り殺しに遭ひつゝありし、商工業を助けんとしたる庵主が、其の遣り損じた跡の慘状は、目も當てられず、甘酒屋が泥濘に轉倒つたやうに、手の付けやうもなく、始末に困ると夥しく残りたるものは、無数の借金と法螺の名と五尺の體丈け出るものは、先覺知人の小言と借金の利息と奉公人の隙と水漬と涙と溜息と欠伸許りである、手に握りて居るものは、裁判所の支拂命令と銀行の催促状と八方の勘定書付と翠丸計りである、何とも乎とも人間では、始末の付かぬことになつた、ソコで此の難關を切り抜けるには、智慧も、學問も、物理も、化學も、武器も

器械も役に立つものでない、只だ一つ天より賜つた命から二番目の法螺を以て防ぐの外ないと考へたから吹いたも吹かないも、天地合名法螺會社の資本を獨りで供給した法螺銀行が支拂停止をした如く石垣島の低氣壓を百六十ツラストとして、八方に栓を抜き、後から臺灣の島に柄を付け、團扇にして煽ぐ位に吹いたから此の失敗後に残存した有形無形の物質は影も形もないやうに吹き飛ばして仕舞ふた其の吹いた法螺の中で一番可笑かりしは、其年の冬忘れもせぬ借金取りの頭数が百十四人直接間接に受取つた書出催促状の数が七百二十七通、金高が三萬四千餘圓、此は料理屋待合質屋高利貸洋服屋呉服屋馬車屋車屋丈けである、其他公式に印判を捺した借金は別である、所で前の百十四人の借金取の中で大抵は吹飛ばしたが、ドウしても尻が重くて吹き飛ばぬ者が十三人である、此の十三人は皆な剛愎非道な高利貸で石垣島自身が轉がつて来て吹いても吹飛ばぬ借金取だから實に世界的の借金取りである、故に之れを吹き飛ばすと飛ばさゝるとは庵主が法螺の鼎を輕重する譯でもあり、又實に其冬の死活問題であるから日々

臍を燃つて法螺術の研究をして居たが工夫が付かぬ、其中に時日も立つて来て、止むを得ず、十二月二十八日の午前正十時に某れの待合に集合せよ、即時に仕拂をする、と明白と通告した、夫から段々工夫をすれども、何とも工夫の種がない、ソコで儘よ當年の遊び納めに下手義太夫でも語りて氣保養をしたら、又何か思案の出ることもあらうと義太夫の師匠を呼びに遣りて兼て素人仲間の某銀行の頭取を勧誘に遣つた、此れが丁度暮れの二十七日の事で、彼の戦争なら關ヶ原か、田原坂か、沙河かと云ふ實に天下分け目の二十八日の前日である、處が其日の晩方師匠が目色を變へて馳せ返りて来て、今日某銀行の頭取様を命によりてお迎へに參つた處が、お宅は大騒動である、何でも彼の方の銀行が支拂停止になつたとのことで、却々義太夫處の騒ではない、人力車が門前に十二三挺もあつて、銀行の門前は取付預金者の人山を築いて居るとのことであるから、見に行つて來ましたら、イヤ早や夫は咄の様なもの、でなく、大變な騒動であると云ふから、之れを聞いた庵主は腹の中で好し、占めたと思ひ、翌朝早く起きて、平常になく袴羽織を着込んで、其の